

栃木県埋蔵文化財調査報告第 366 集

神田城南遺跡

—安全な道づくり事業費(補助)

—一般県道小川大金停車場線北片平工区に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2014.3

栃木県教育委員会

公益財団法人とちぎ未来づくり財団

かん だ じょう みなみ い せき
神 田 城 南 遺 跡

—安全な道づくり事業費(補助)

—一般県道小川大金停車場線北片平工区に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2014.3

栃 木 県 教 育 委 員 会
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

序

神田城南遺跡は、栃木県の北東部、那須郡那珂川町に位置しています。当地は那須連山を源とする那珂川によって開析され、古来より人々の生活に適した豊かな台地が広がっています。これらのことを証明するように、有史以前から数多くの遺跡が存在し、中でも古墳時代では国の史跡指定を受ける著名な古墳が数多く築造されております。

このたび、栃木県県土整備部が実施する一般県道小川大金停車場線拡幅工事に先立ち、記録保存を目的とした発掘調査を行いました。その結果、古墳時代から中・近世にかかわる遺構が数多く出土しました。特に、古代末葉に整備された道路跡は、隣接する国指定史跡那須神田城跡に大きく関わるものと推察されます。

本報告書はその調査成果をまとめたものであり、本書が県民の皆様にとって郷土の歴史を理解する一助となるとともに、各方面において広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、多大な御協力をいただきました栃木県県土整備部、那珂川町教育委員会をはじめとする関係機関、並びに関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成26年3月

栃木県教育委員会
教育長 古澤 利 通

例 言

1. 本報告書は、栃木県那須郡那珂川町三輪地内に所在する神田城南遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、安全な道づくり事業費（補助）一般県道小川大金停車場線北片平工区に伴う記録保存調査であり、栃木県土整備部からの委託事業として栃木県教育委員会の指導のもとに、財団法人とちぎ未来づくり財団（平成25年4月 公益財団法人とちぎ未来づくり財団に名称変更）埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本遺跡の発掘調査及び整理・報告書作成にかかわる期間ならびに担当者は次のとおりである。

発掘調査	平成24年12月3日～平成25年3月28日（うちの3ヶ月）
担当者	調査課長 芹澤 清八 囑託調査員 大野 淳史
整理・報告書作成	平成25年4月1日～平成26年3月27日（うちの6ヶ月）
担当者	調査課長 芹澤 清八 囑託調査員 大野 淳史
4. 本書の執筆及び編集にかかわる作業は大野の協力を得つつ芹澤が行った。
5. 発掘調査から報告書作成にいたるまで、下記の委託業務を行った。

（発掘調査）

金澤建設株式会社（表土除去及び埋め戻し、安全柵の設置及び撤去）、株式会社リッケイ（三次元写真解析図化、RCヘリコプターによる空中写真撮影）、中央航業株式会社（基準杭打設、航空写真撮影）

（整理・報告書作成）

パリオ・サーヴェイ株式会社（放射性炭素年代測定AMS法及び樹種同定）
小川 忠博（遺物写真撮影及び図版作成）
6. 発掘調査に伴う現地作業の実施にあたり、下記の方々のご協力をいただいた。（敬称略、五十音順）
阿久津ヒロ 小川 征男 小川 享二 加藤 清 加藤レイ子 久郷ヨシ江
桑木二三夫 小島 利三
7. 整理作業・報告書作成に際し、次の方々にご協力をいただいた。（敬称略、五十音順）
池田 孝子（旧姓 小倉） 武田 智子
8. 発掘調査の実施ならびに報告書作成にあたり、下記の諸機関ならびに諸氏からご教示及びご協力をいただいた。（敬称略）
栃木県土整備部島山土木事務所 栃木県立なす風土記の丘資料館 那珂川町教育委員会
国士舘大学考古学研究会
木本 雅康 高橋 一夫 竹澤 謙 橋本 澄朗
9. 本遺跡の概要については、既に栃木県教育委員会文化財保護行政年報35号、公益財団法人とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター年報第23号において報告しているが、本書をもって正式報告とする。
10. 本遺跡の出土遺物及び記録類については、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターが保管している。

凡 例

1. 神田城南遺跡にかかわる遺跡略号及び遺物注記は、NK (Nakagawa) - KN (Kanda Jyominami) である。
2. 遺構
 - 1) 遺構実測図中に示した方位は国土法座標の北を表示する。
 - 2) 各遺構の縮尺は基本的に住居跡・土坑・井戸跡を1/60とし、これに外れるものは適宜明記した。
 - 3) 遺構の表示はSI (住居跡)、SZ (方形周溝遺構)、SB (掘立柱建物跡)、SK (土坑)、SD (溝跡)、SE (井戸跡)、SA (櫛列跡) とした。
 - 4) 土層堆積図中の番号は必ずしも堆積順序を示すものではない。
 - 5) 土層の色調は「新版標準土色帖」(財)日本色彩研究所 色票監修を参考とし記入している。
 - 6) 遺構図版中のスクリーントーンが示すものは、図版中に記入もしくは文章にて説明している。
3. 遺物
 - 1) 遺物番号の発番は、出土遺構単位に1, 2, 3, 4, ……とした。この番号は、本文、遺物出土位置、遺物実測図、遺物観察表、写真図版等に共通する。
 - 2) 遺物実測図に掲載した実測図の縮尺は概ね1/4を基準としている。
 - 3) 写真図版に掲載した各遺物の縮尺はおおよそ2)に従っている。
 - 4) 遺物の色調は「新版標準土色帖」(財)日本色彩研究所 色票監修を参考とし記入している。

本文目次

序	
例言	
凡例	
第Ⅰ章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	3
1. 試掘調査	3
2. 調査の方法	3
第Ⅱ章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	8
第Ⅲ章 検出された遺構と遺物	
第1節 調査成果の概要	15
第2節 古墳時代	21
1. 竪穴住居跡	21
2. 方形周溝遺構	40
3. 土坑	42
第3節 奈良・平安時代	43
1. 溝跡	43
2. 掘立柱建物跡	47
3. 柵列跡	48
4. 井戸跡	48
5. 土坑	49
6. 遺構外出土遺物	51
第4節 中世	52
1. 溝跡	52
第5節 中世以降	53
1. 土坑	53
2. 溝跡	60
3. 不明遺構	61
第Ⅳ章 まとめ	
第1節 発掘調査の成果	62
1. 古墳時代	62
2. 奈良・平安時代	63
3. 中世	64
附編 理化学分析	
1. 神田城南遺跡出土炭化材の放射性炭素年代（AMS測定法）	67
2. 神田城南遺跡出土炭化材の樹種同定	69

挿 図 目 次

<p>第1図 一般県道小川大金停車場線 拡幅範囲及び調査区位置図 …… 2</p> <p>第2図 神田城南遺跡調査区位置図 …… 4</p> <p>第3図 神田城南遺跡位置図 …… 5</p> <p>第4図 栃木県及び神田城南遺跡周辺の 地形図 …… 6</p> <p>第5図 神田城南遺跡周辺の地形と 遺跡分布範囲 …… 7</p> <p>第6図 周辺の遺跡位置図 …… 12</p> <p>第7図 神田城南遺跡遺構全体図 …… 17</p> <p>第8図 第11号住居跡実測図 …… 21</p> <p>第9図 第11号住居跡出土遺物実測図 …… 22</p> <p>第10図 第18号住居跡実測図 …… 23</p> <p>第11図 第18号住居跡出土遺物実測図 …… 24</p> <p>第12図 第19号住居跡実測図 …… 26</p> <p>第13図 第19号住居跡出土遺物実測図 …… 27</p> <p>第14図 第22号住居跡実測図 …… 28</p> <p>第15図 第22号住居跡出土遺物実測図 …… 28</p> <p>第16図 第26号住居跡実測図 …… 29</p> <p>第17図 第26号住居跡カメラ実測図 …… 30</p> <p>第18図 第26号住居跡出土遺物実測図 …… 31</p> <p>第19図 第46号住居跡実測図 …… 33</p> <p>第20図 第47号住居跡実測図 …… 34</p> <p>第21図 第47号住居跡出土遺物実測図 …… 34</p> <p>第22図 第64号住居跡実測図 …… 35</p> <p>第23図 第66号住居跡・カメラ実測図 …… 36</p> <p>第24図 第66号住居跡出土遺物実測図 …… 37</p>	<p>第25図 第80号住居跡実測図 …… 39</p> <p>第26図 第80号住居跡出土遺物実測図 …… 39</p> <p>第27図 第86号・第87号方形周溝遺構実測図 …… 40</p> <p>第28図 第86号・第87号方形周溝遺構 出土遺物実測図 …… 41</p> <p>第29図 第20号・第23号土坑実測図 …… 42</p> <p>第30図 第23号土坑出土遺物実測図 …… 42</p> <p>第31図 第5号溝跡出土遺物実測図 …… 44</p> <p>第32図 第6号溝跡出土遺物実測図 …… 44</p> <p>第33図 第5号・第6号溝跡実測図 …… 45・46</p> <p>第34図 第32号掘立柱建物跡実測図 …… 47</p> <p>第35図 第67号掘立柱建物跡実測図 …… 47</p> <p>第36図 第52号櫓列跡実測図 …… 48</p> <p>第37図 第77号井戸跡実測図 …… 48</p> <p>第38図 第77号井戸跡出土遺物実測図 …… 48</p> <p>第39図 土坑実測図 …… 50</p> <p>第40図 土坑内出土遺物実測図 …… 51</p> <p>第41図 遺構外出土遺物実測図 …… 51</p> <p>第42図 第88号溝跡実測図 …… 52</p> <p>第43図 土坑実測図（1） …… 54</p> <p>第44図 土坑実測図（2） …… 56</p> <p>第45図 土坑実測図（3） …… 58</p> <p>第46図 溝跡実測図（1） …… 60</p> <p>第47図 溝跡実測図（2） …… 61</p> <p>第48図 不明遺構実測図 …… 61</p> <p>第49図 那須神田城跡と道路状遺構及び 第88号溝跡位置図 …… 65</p>
--	--

表 目 次

<p>第1表 周辺の遺跡一覧 …… 13</p> <p>第2表 遺構計測表 …… 18</p> <p>第3表 第11号住居跡出土遺物観察表 …… 22</p> <p>第4表 第18号住居跡出土遺物観察表 …… 25</p> <p>第5表 第19号住居跡出土遺物観察表 …… 27</p> <p>第6表 第22号住居跡出土遺物観察表 …… 28</p> <p>第7表 第26号住居跡出土遺物観察表 …… 32</p> <p>第8表 第47号住居跡出土遺物観察表 …… 34</p>	<p>第9表 第66号住居跡出土遺物観察表 …… 38</p> <p>第10表 第80号住居跡出土遺物観察表 …… 39</p> <p>第11表 第86号方形周溝遺構 出土遺物観察表 …… 41</p> <p>第12表 第87号方形周溝遺構 出土遺物観察表 …… 41</p> <p>第13表 第23号土坑出土遺物観察表 …… 42</p> <p>第14表 第5号溝跡出土遺物観察表 …… 44</p>
---	---

第15表 第6号溝跡出土遺物観察表 …………… 44	第18表 遺構外出土遺物観察表 …………… 51
第16表 第77号井戸跡出土遺物観察表 …………… 49	第19表 栃木県内の道路状遺構(抜粋) …………… 64
第17表 土坑内出土遺物観察表 …………… 51	

図版目次

図版 一 遺構(航空写真)

発掘調査区と史跡那須神田城跡(真上から)

図版 二 遺構(航空写真)

発掘調査区と史跡那須神田城跡(南側上空から)

発掘調査区と史跡那須神田城跡(北側上空から)

図版 三 調査(I-A・B区)

I-A区 現況(北から)

I-A区 調査風景(北から)

I-A区 調査風景(南から)

I-A区 完掘(南東から)

I-B区 現況(北から)

I-B区 調査風景(北から)

I-B区 確認(北から)

I-B区 調査風景(南から)

図版 四 調査(II-A・B区)

II-A区 現況(北から)

II-A区 表土除去(南から)

II-A区 調査風景(南から)

II-A区 調査風景(南から)

II-B区 現況(南から)

II-B区 確認(南西から)

II-B区 調査風景(北から)

II-B区 調査風景(南東から)

図版 五 調査(III区・史跡那須神田城跡)

III区 現況(南から)

III区 調査風景(南東から)

III区 SZ-86・87確認(南西から)

III区 SE-77調査(東から)

降雪日の調査

RCヘリによる空撮

史跡那須神田城跡土塁遠景(北から)

史跡那須神田城跡土塁遠景(北西から)

図版 六 遺構(堅穴住居跡)

II-B区 SI-11完掘(南西から)

II-B区 SI-11完掘(南東から)

II-B区 SI-11遺物出土(南から)

II-B区 SI-11柱穴土層(東から)

II-B区 SI-11貼床完掘(東から)

図版 七 遺構(堅穴住居跡)

II-B区 SI-18土層(南から)

II-B区 SI-18完掘(北西から)

II-B区 SI-18, SD-06土層(南から)

II-B区 SI-18 P1完掘(南から)

II-B区 SI-18・19完掘(南から)

図版 八 遺構(堅穴住居跡)

II-B区 SI-19・18完掘(南から)

II-B区 SI-19土層(南から)

II-B区 SI-19完掘(東から)

II-B区 SI-19調査風景(南から)

II-B区 SI-19・18調査風景(北から)

図版 九 遺構(堅穴住居跡)

II-B区 SI-22完掘・土層(南東から)

II-B区 SI-22遺物出土(東から)

II-B区 SI-22遺物出土(北から)

II-B区 SI-22遺物出土(南から)

II-B区 SI-22, SK-15-17完掘(南から)

図版 一〇 遺構（竪穴住居跡）

- II-B区 SI-26遺物出土（南から）
- II-B区 SI-26, SD-06確認（南西から）
- II-B区 SI-26調査風景（北から）
- II-B区 SI-26遺物出土（北東から）
- II-B区 SI-26遺物出土（東から）

図版 一一 遺構（竪穴住居跡）

- II-B区 SI-26カマド1・2確認（南東から）
- II-B区 SI-26カマド1・2半截（北西から）
- II-B区 SI-26カマド1・2土層（南西から）
- II-B区 SI-26カマド1・2完掘（東から）
- II-B区 SI-26カマド3完掘（西から）
- II-B区 SI-26カマド3確認（東から）
- II-B区 SI-26カマド3土層（西から）
- II-B区 SI-26カマド3土層（南から）

図版 一二 遺構（竪穴住居跡）

- II-B区 SI-46完掘（南東から）
- II-B区 SI-46確認（北から）
- II-B区 SI-46完掘・土層（西から）
- II-B区 SI-46遺物出土（南から）
- II-B区 SI-46焼土（西から）

図版 一三 遺構（竪穴住居跡）

- II-B区 SI-47完掘（東から）
- II-B区 SI-47確認（北東から）
- II-B区 SI-47完掘（南から）
- II-B区 SI-47遺物出土（南東から）
- II-B区 SI-47, SK-60土層（東から）

図版 一四 遺構（竪穴住居跡）

- II-B区 SI-64完掘（南から）
- II-B区 SI-64確認（南から）
- II-B区 SI-64土層（南西から）
- II-B区 SI-64完掘（北西から）
- II-B区 SI-64北部完掘（西から）

図版 一五 遺構（竪穴住居跡）

- III区 SI-66遺物出土（西から）
- III区 SI-66確認（西から）
- III区 SI-66遺物出土（北東から）
- III区 SI-66遺物出土（東から）
- III区 SI-66完掘（南西から）

図版 一六 遺構（竪穴住居跡）

- III区 SI-66カマド完掘（南東から）
- III区 SI-66カマド確認（南から）
- III区 SI-66カマド土層（南東から）
- III区 SI-66カマド袖完掘（南西から）
- III区 SI-66カマド土層（南から）

図版 一七 遺構（竪穴住居跡）

- III区 SI-80完掘・土層（北西から）
- III区 SI-80確認（南西から）
- III区 SI-80完掘・土層（西から）
- III区 SI-80掘方（南から）

図版 一八 遺構（方形周溝遺構）

- III区 SZ-86・87完掘（北東から）
- III区 SZ-86・87確認（北東から）
- III区 SZ-86・87土層E-E'（西から）
- III区 SZ-86土層B-B'（北から）
- III区 SZ-86・87調査風景（南東から）

図版 一九 遺構（溝跡）

- I-B区 SD-05調査風景（南から）
- I-B区 SD-05完掘（北から）
- I-B区 SD-05確認（北から）
- I-B区 SD-05調査風景（南から）
- I-B区 SD-05土層B-B'（南から）
- I-B区 SD-05土層C-C'（南から）

図版 二〇 遺構（溝跡）

- I-B区 SD-05完掘（南から）
- I-B区 SD-05底面（南から）

- I-B区 SD-05西壁土層・底面（北東から）
- II-B区 SD-06調査風景（南から）
- II-B区 SD-06調査風景（北から）

図版 二一 遺構（溝跡）

- II-B区 SD-06-09, SK-08周辺確認（南西から）
- II-B区 SD-06, S1-26周辺確認（南東から）
- II-B区 SD-06, SK-20土層E-E'（南から）
- II-B区 SD-06, SK-27土層G-G'（南から）
- II-B区 SD-06, SK-54土層F-F'（南から）
- II-B区 SD-06調査風景（南から）
- II-B区 SD-06, S1-18土層（南から）

図版 二二 遺構（溝跡）

- II-A区 確認（南から）
- II-A区 SD-02-03確認（南東から）
- II-A区 SD-04確認（南東から）
- II-A区 調査風景（南から）
- II-B区 SD-09-06確認（南西から）
- II-B区 SD-09, SK-08完掘（東から）
- II-B区 SD-49完掘（北から）
- II-B区 SD-49完掘（西から）

図版 二三 遺構（溝跡・柵列跡・掘立柱建物跡）

- III区 SD-88, SZ-86-87確認（南から）
- III区 SD-88調査風景（東から）
- III区 SD-88, SK-89完掘・土層（東から）
- III区 SD-88, SK-91完掘・土層（西から）
- II-B区 SA-52完掘（南から）
- III区 SB-67完掘（南西から）
- III区 SB-67確認（南西から）

図版 二四 遺構（井戸跡・土坑）

- III区 SE-77完掘（南から）
- III区 SE-77土層（南から）
- II-A区 調査風景（南から）
- III区 SE-77出土線（南から）
- III区 SE-77調査風景（東から）

- II-A区 SK-01完掘（南東から）
- II-B区 SK-08完掘（南から）
- II-B区 SK-10完掘（南から）
- II-B区 SK-12・21完掘（南から）
- II-B区 SK-20完掘（西から）
- II-B区 SK-23完掘（東から）
- II-B区 SK-27完掘（南から）
- II-B区 SK-20, SD-06土層（南から）
- II-B区 SK-24・25土層（東から）
- II-B区 SK-27, SD-06土層（南東から）

図版 二五 遺構（土坑）

- II-B区 SK-33・34土層（南から）
- II-B区 SK-35土層（南から）
- II-B区 SK-36・37・56完掘（東から）
- II-B区 SK-39土層（東から）
- II-B区 SK-40土層（南から）
- II-B区 SK-41完掘（南から）
- II-B区 SK-42土層（南から）
- II-B区 SK-44完掘（東から）
- II-B区 SK-48・57土層（西から）
- II-B区 SK-28-30・54完掘（西から）
- II-B区 SK-29・30完掘（西から）
- II-B区 SK-53完掘（西から）
- II-B区 SK-28完掘（西から）
- II-B区 SK-54, SD-06土層（南から）
- II-B区 SK-53土層（南西から）

図版 二六 遺構（土坑）

- II-B区 SK-50・51確認（南東から）
- II-B区 SK-51土層（南から）
- II-B区 SK-54土層（南から）
- II-B区 SK-50完掘（南から）
- II-B区 SK-51完掘（南から）
- II-B区 SK-55完掘（東から）
- II-B区 SK-60完掘（東から）
- II-B区 北側確認（南西から）
- II-B区 調査風景（北から）

- Ⅲ区 SK-65完掘（南から）
- Ⅲ区 SK-68・69・71・72完掘（西から）
- Ⅲ区 SK-68土層（南から）
- Ⅲ区 SK-69・71土層（南から）
- Ⅲ区 SK-73・74完掘（西から）
- Ⅲ区 SK-75完掘（西から）

図版 二七 遺構（土坑・溝跡）

- Ⅲ区 SK-76土層（南から）
- Ⅲ区 SK-78・79完掘（南西から）
- Ⅲ区 SK-78完掘（南から）
- Ⅲ区 SK-81完掘（南西から）
- Ⅲ区 SK-84完掘（東から）
- Ⅲ区 SK-85完掘（南東から）
- Ⅲ区 SK-81土層（南から）
- Ⅲ区 SK-84土層（南から）
- Ⅲ区 SK-85底面（南東から）
- Ⅲ区 SK-82・89土層（東から）
- Ⅲ区 SK-83完掘（西から）

- Ⅲ区 SK-90土層（東から）
- Ⅲ区 SD-88完掘（東から）
- Ⅲ区 SK-91土層・底面（西から）
- Ⅲ区 遺構確認（南から）

図版 二八 遺物（住居跡）

SI-11・18出土遺物

図版 二九 遺物（住居跡）

SI-19・26・47・66出土遺物

図版 三〇 遺物（住居跡・その他）

SI-66・80, SZ-86・87, SD-05・06, SK-21・44・53,
遺構外出土遺物

図版 三一 遺物集合写真（第26号・第66号住居跡）

第26号住居跡

第66号住居跡

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

栃木県県土整備部烏山土木事務所は、那須烏山市と那須郡那珂川町の1市1町を所管しており、当地には県全体の人口の2.3%にあたる46,019人が暮らしている。烏山土木事務所が管理する生活に最も密着する道路については、一般国道の293号・294号・400号及び461号の4路線、主要地方道8路線、一般県道13路線の合計25路線で、その延長は217.1kmの距離となる。また、河川では、管内のほぼ中央を南北に関東地方トップクラスの清流と謳われる「那珂川」が貫流しており、那珂川本流管内約30kmの国土交通省直轄管理分を除く那珂川水系の33河川の合計185.7kmを管理する。

栃木県県土整備部では、「だれもが」、「どこから」そして「どこへでも」、安全・スムーズに移動できる交通網の整備を進めており、県内各所の主要な渋滞ポイントについて、バイパス整備や交差点の立体化などの事業を推進している。これらの政策を基本とし、烏山土木事務所においても、一般県道小川大金停車場線の拡幅及び片側歩道設置の改良工事が実施されることとなり、事業地内に所在する埋蔵文化財の有無について栃木県教育委員会に調査の依頼を行うこととなった。これを受けて県教育委員会では、平成20年12月4日に小川町遺跡分布調査報告書を基にした踏査による調査を行い、事業地内には三輪遺跡（古墳～中世、集落跡）・神田城跡（古墳～中世、国指定史跡中世城館）・神田城南遺跡（古墳、集落跡）及び蛇身浄度経塚町（中世、町指定文化財経塚）が所在し、これ以外の新たな散布地は認められないとの回答を提出している。なお同時に、それぞれの遺跡に対し用地買収時には試掘調査が必要と打診している。

当時の土木事務所による工事計画は、平成21年度より用地買収、同22年度より事業実施であるが、実際に改良工事が具体化し、県教育委員会に対する試掘調査の依頼は平成23年4月12日である。さらに地点を変え、平成24年2月10日に第2回目の試掘調査を実施している。

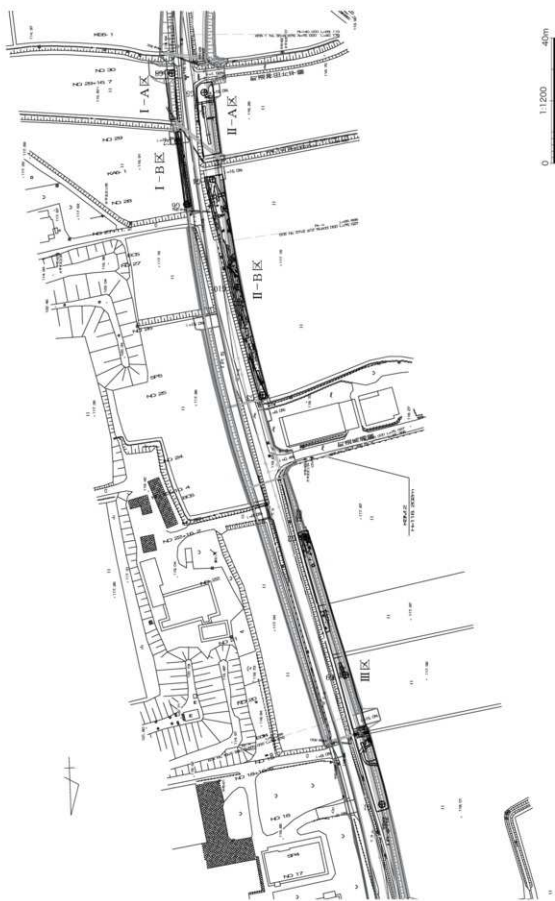
この結果、国指定史跡那須神田城跡の南側に広がると明示された神田城南遺跡については、小川町遺跡分布調査報告書記載の範囲よりさらに西側に広がる事が確認され、改良工事に先行する発掘調査が必要との回答を提出している。

平成24年12月3日付けにて、栃木県と財団法人とちぎ未来づくり財団が埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、那珂川町三輪地内に所在する神田城南遺跡発掘調査（安全な道づくり事業費（補助）一般県道小川大金停車場線北片平区に伴う発掘調査）が実施されることとなった。契約内容は、委託期間が契約締結日である平成24年12月3日から平成25年3月28日迄であり、この間に発掘調査を3ヶ月実施するものである。調査面積は1,100㎡、委託料は15,355,000円である。

現地における発掘調査は、平成24年12月3日から平成25年2月28日迄行われ、十分な成果を得て終了している。この間、栃木県による条例改正に伴って人件費に余剰金が発生したため、契約金額から406,000円を返納することとなった。これにより、平成25年1月15日付けにて、埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書の変更契約が行われ、当初の委託料15,355,000円が14,949,000円に変更された。



神田城南遺跡及び国指定史跡那須神田城跡（南上空から）



第1図 一般乗車場線拡幅区及び調査区位置図

第2節 調査の方法と経過

1. 試掘調査

栃木県土木整備部による県道小川大金停車場線の改良工事に伴い、栃木県教育委員会文化財課により2度の試掘調査が実施されている。この試掘調査の対象遺跡は、国指定史跡那須神田城跡の南側周辺に広がる神田城南遺跡であり、旧小川町作成の詳細遺跡分布調査による神田城南遺跡包蔵地及びその周辺に対してである。

第1回目は平成23年4月12日で、調査第Ⅱ-B区にあたる箇所幅0.8m、長さ5～13m前後の4本の試掘トレンチ調査が実施され、各トレンチからは土坑や溝跡と思われる遺構の発見が報告されている。

2回目は平成24年2月10日である。やはり調査第Ⅲ区にあたる箇所にも都合3本の試掘トレンチ調査を実施しており、各トレンチ内からは溝跡及び住居跡に想定される遺構が発見されている。

これら2度におよぶ試掘調査結果から本調査区が決定され、発掘調査が実施されるに至った。

2. 調査の方法

調査区は県道の拡幅に伴い、第2図に示したように東側と西側に設定されている。調査区名については調査着手順より、県道東側を調査第Ⅰ区とし、地形形状にあわせ南側よりⅠ-A区、Ⅰ-B区とした。また、西側についてもやはり南側から調査第Ⅱ区、調査第Ⅲ区とし、Ⅱ区については第Ⅰ区と同様に南北に区分されることから、それぞれⅡ-A区、Ⅱ-B区と呼称した。

各調査区は道路拡幅部分となるため南北方向に細長く、Ⅰ-A区は3×16m、Ⅰ-B区は最も狭小で1.8×24mとなる。Ⅱ区の幅は僅かに広く、Ⅱ-A区で3×23m、Ⅱ-B区は北側先端に向かってやや細くなる形状であり、南端で6m、北端で3m、全長は72mである。Ⅲ区はⅡ区との間に住宅及び未買収地を挟むため若干の距離を置く。当区は最も大きな調査区であり、その大きさは幅4m、長さ92mである。

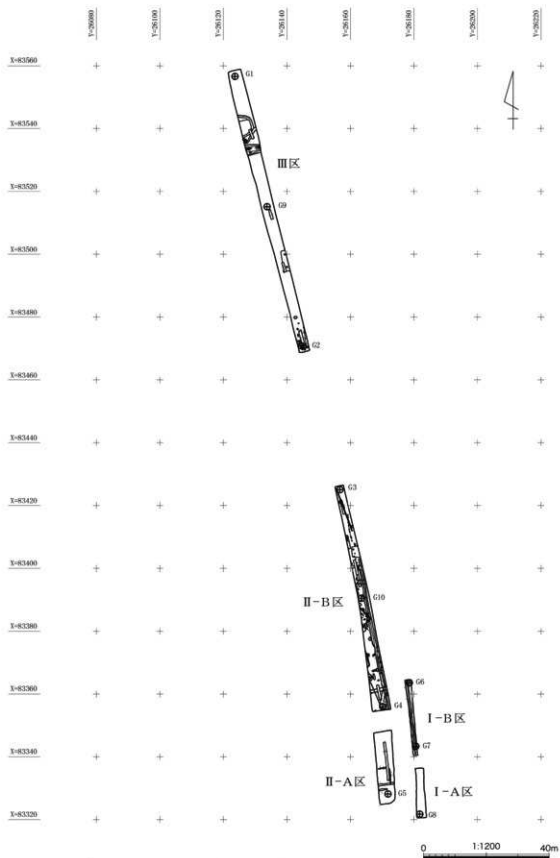
調査を開始するにあたって表土除去を実施するが、狭小な調査区では小型な、また幅のあるⅡ-AやB区、さらにⅢ区では、作業効率を考えやや大型なバックホーを使用することとした。なお、排土については調査区内における仮置きが困難なため、2kmほど離れた那珂川河川敷に搬出している。なお、交通量の多い県道脇の調査であるため、運転者への注意喚起を図ることを目的に、調査区と道路間には安全柵を設けている。発掘調査はⅠ、ⅡそしてⅢ区の順で開始し、発見された遺構順に番号を付すと共に、溝跡、土坑及び住居跡等についてその性格を表すSD、SK、SIなどについても明確にした。

各遺構の調査手順は、基本的に先ず遺構の確認と同時に確認状況の写真撮影、土層堆積状況を理解するためのベルトの設定と堆積状況の写真撮影、堆積状況の図化、遺構の完掘後に写真撮影及び平面図作成である。これに遺構内からの出土遺物がある場合は、その都度毎に写真撮影や平面図作成を繰り返している。

本発掘調査においては、土層堆積図の作成や平面図の作成を、株式会社リックイが独自に開発した三次元写真撮影図化を採用している。これについては特許取得によるものであり、明確に記載することはできないが、神田城南遺跡の発掘調査における作業効率上において極めて多大な成果があった。

特に、発掘調査は平成24年12月から翌年の2月末日までであり、第Ⅱ章の地理的環境にて述べているように、当地域の冬は厳しく、また那須嵐と呼ばれる強風が名物でもある。また、平成24年の1月、2月は積雪の回数も多く、その度に調査の中止や除雪に時間を費やすこととなった。このような中で、写真をオーバーラップさせながら撮影することにより土層堆積図や遺構平面図が作成できたことは、調査担当者にとってこの上ない手助けとなった。

発掘調査は平成25年2月末日をもって終了すると共に、那珂川河川敷より排土を搬入して埋め戻し作業を行った。その際、調査区内を横切る水路等についても復旧し、すべての調査が完了した。



第2図 神田城南遺跡調査区位置図

第II章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

栃木県は関東平野の最北にあり、東北地方から南下する山岳部と関東平野の北縁が接する地域にある。県の東西及び北側のそれぞれに山地があり、東部は八溝山地、西部に足尾山地、そして北側には那須岳や高原山を取り囲むように帝釈山地が広がる。これら三方に挟まれた県東部は南流する幾つもの大河川によって、丘陵部、台地及び低地を伴う平野部が形成されている。

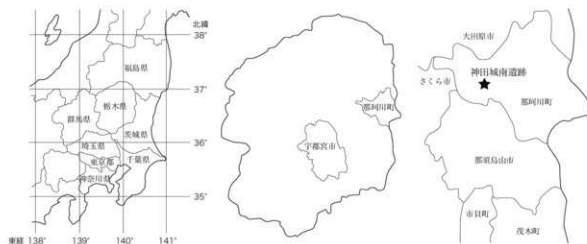
このような中で、神田城南遺跡が位置する那珂川町は県中央東端に位置し、東側は茨城県境となっており、大字町・常陸大宮市と、南及び北側はそれぞれ那須烏山市と大田原市、さらに西側はさくら市と接している。平成11年より総務省主導による平成の合併が積極的に推進されてきたが、那珂川町も平成17年に旧馬頭町と旧小川町の合併により誕生した町であり、その町域は東西約19.1km、南北約17.5km、総面積192.84km²を数え、人口は平成25年4月1日現在で18,519人を数える。

新生那珂川町は、県都として本県のほぼ中央部に位置する宇都宮市からやや北東方向に位置し、町の中央を茨城県日立市と栃木県足利市を結ぶ一般国道293号が東西に通じ、これに福島県会津若松市と千葉県柏市を結ぶ国道294号が直行する。2本の国道に接続する県道は数多く、今回調査が実施されることとなった那珂川町とその南側の那須烏山市を結ぶ小川大金停車場線もその一つである。

遺跡周辺の地形を概観すると、先ず一際目に付くのは県境に沿って南北に連なる東部山地、いわゆる八溝山地である。これらは北から八溝・鷺子・鷲足及び筑波の4山塊に分かれ、最高峰は八溝山塊に位置する1,022mの八溝山である。八溝山塊の標高が600～1,000mであり、鷺子山塊が400～500m、鷲足山塊が300～500mであることから、順次南下するに従って低くなることが理解される。

もう一つは、町名の由来ともなる関東随一の清流と謳われる那珂川である。那須岳に源を発し、余笹川・帯川及び荒川と幾つもの小河川が一つとなって、八溝山地を横断して一気に茨城県ひたちなか市へと下る。全長は150km、流域面積3,270km²、支川数197などから、関東地方第3の大河に数えられる。また、堰が存在しない大河として、カヌーをはじめとするアウトドアレジャーや鮭が遡上する河川として著名である。

山脈や山地を横断する際に形成された谷を横谷というが、南に隣接する茂木町飯野付近では那珂川の河床面の標高が40～50mほどであることから、那珂川は八溝山地を150m以上も削ったことになる。現在は水量



第3図 神田城南遺跡位置図

が減ってしまっているが、以前には小舟による上下流域との往来が盛んに行われ、橋が架かる昭和10年以前には数多くの「渡し」が設けられていたこと、また依存度は少ないものの鮎・鮭を中心とした内水面漁業の発達、人々の生活に大きく関係していたことを物語るものである。

那珂川町周辺の気候は、内陸のため寒暖の差が大きく、冬の最低気温は-5℃程度、夏の最高気温は近年の異常気象に伴い30℃を大きく超えることもある。また、冬は空気が乾燥し、夏は湿度が高く、年間の降水量は比較的多い。さらに冬には「那須嵐」と呼ばれる空^(空)っ風が吹き、夏には雷が多いという特色があるものの春秋の気候は穏やかで、春の新緑や秋の紅葉、そして山菜・茸・鮎などの山や川の恵みが豊富で、いたって過ごしやすい。山地は大部分が林地として利用されているが、一部には畑地や果樹園もみられ、丘陵は広葉樹林や針葉樹林として利用される他に畑地や果樹園等が多く、また地形の特徴を生かしたゴルフ場も多く開発されている。

このような自然環境の中、神田城南遺跡は那珂川より1kmほど離れた中央部平地の東縁部となる那珂川右岸の台地上に位置する。この台地は、南流する那珂川と西側の喜連川丘陵との間を東西幅およそ1.5kmにて南北に連なり、途中、箒川や権津川などの那珂川支流の開析によって断ち切られる。このうち権津川は喜連川丘陵に源をもち、丘陵内を東流した後に幾筋かに分かれて台地を横断し、那珂川に合流することとなる。

神田城南遺跡は、この権津川の南側に面した台地の先端部分に広がる。遺跡の標高は117mであり、同面には国指定史跡那須神田城跡をはじめ、多くの埋蔵文化財包蔵地が確認できるが、中でもキジガ尾遺跡、神田城跡及び神田城南遺跡が縦方向に連なる箇所は、馬の背状の緩やかな舌状台地となって東西の水田面より一段比高差がある。遺跡周辺は既に戦後の耕地整理によって、田畑が基盤のマス目状に整えられると共に一部では雑壇状に削平されるが、今回の神田城南遺跡の調査にて理解されたように、遺跡そのものはほぼ完全な状態で埋蔵されていると言ってもよからう。



第5図 神田城南遺跡周辺の地形と遺跡分布範囲

(主要参考文献)

- 阿久津純 1976 「栃木県の地形・地質（県央北部を中心に）」『資料編・考古一』栃木県史編纂委員会
 眞保昌弘 2011 「3. 遺跡の環境」『国指定史跡那須宮衛遺跡 周辺詳細調査報告書1』栃木県那珂川町教育委員会
 芹澤清八 2003 「遺跡の位置と環境」『鳴井上遺跡』栃木県教育委員会（財）ちぎ生生涯学習文化財団
 相馬一夫 1997 「遺跡の位置と環境」『滝田本郷遺跡』栃木県教育委員会（財）栃木県文化振興事業団
 塚原孝一 1994 「歴史的環境」『三輪村町遺跡』（本文編）栃木県教育委員会（財）栃木県文化振興事業団
 栃木県企画部資源対策課 1988 『土地分類基本調査 喜連川・大子』栃木県

第2節 歴史的環境

那珂川町教育委員会作成の詳細遺跡分布地図(旧小川町作成)には、きめ細やかな埋蔵文化財包蔵地が記載され、また数多くの発掘調査例や多数の指定史跡などが存在するなど、有史以前から古代そして中世にかかわる歴史的つながりが見て取れる。ここでは神田城南遺跡を中心として、東西約10km、南北16kmの範囲内に所在する89箇所の埋蔵文化財包蔵地や史跡を図示し、これらを時代順に概要を記載すると同時に、歴史上における関わりや評価を明示することとする。なお、図中より外れる遺跡については、市町名を記載している。

旧石器時代 この時代については県内全体を見渡しても低調であるが、本町域でも調査例や発見例が極めて少ない。20.三輪仲町遺跡では、ナイフ形石器や尖頭器の発見と共にブロックが一箇所発見され、また時間的にこれに後続する89.三輪御城遺跡では細石核が出土している。その形態は、北方系のもと思われるが、よりの確かな判断は下されていない。

縄文時代 那珂川流域において、縄文時代草創期から前期にかかわる遺跡の発見例は少なく、その大半は表面採取により知られるものである。より広範囲な地域に目を向けると、土器出現期では神子柴型石斧と共に尖頭器、搔器や削器などの多量の剥片石器を出土した大田原市川木谷遺跡が特筆できる。早期以降では子母口式期の生活面と諸磯式期の堅穴住居跡が出土した那須町木下遺跡、またやはり諸磯式期の堅穴住居跡が出土した那須烏山市富士丘遺跡がある。このように資料不足であるため、該期における当地域の様相については不明な点が多いが、採集された土器片からは東北地方南部との関連が窺えるものも散見できる。中でも、那珂川町野出平遺跡、御守山遺跡及び上丸遺跡では早期の常世式土器が、また那珂川町和台A遺跡や那須烏山市の陣場遺跡からは前期の大木式5式が出土している。

中期では、9.浄法寺廃寺跡、20.三輪仲町遺跡、63.大平遺跡、75.松野遺跡、76.新道平遺跡、87.滝田内遺跡及び588.鳥の子沢遺跡、その他では大田原市の片野田富士山遺跡、品川台遺跡及び岩船台遺跡、那珂川町古館遺跡、那須烏山市羽場遺跡及び桜窪遺跡など、規模が拡大しその数も増加する傾向にある。

幾つかの遺跡の内容について記載すると、先ず浄法寺廃寺跡では110基ほどの袋状土坑から、良好な土器の一括資料が出土している。そこには火炎式土器の影響が見られる浄法寺タイプとして、本県における加曾利E1式土器平行期の特徴的な土器も認められる。三輪仲町遺跡は国道293号改良工事に伴い、昭和62年から2年間の発掘調査により、中期から後期前葉を主体とする堅穴住居跡18軒、土坑49基、埋甕3基などと共に大量の土器や石器類が出土した。北側隣接地では、町主体による圃場整備に伴う調査が同時に行われており、国道部分と同時期の遺構や遺物が出土している。松野遺跡では県内初例となる複式炉の発見のほか、五領ヶ台式土器の出土で注目を集めた。羽場遺跡からは堅穴住居跡と甕棺の出土が、また新道平遺跡では多くの堅穴住居跡や袋状土坑と共に同時期の集石や溝跡が発見されている。この他では、調査は実施されていないものの、古館遺跡からは良質な硬玉製大珠が3点出土している。

後期の遺跡の発見例は少ないが、上述した中期の遺跡大半が後期前半までほぼ継続する。後期単独の遺跡では称名寺式期の大田原市羽黒山II遺跡や那珂川町古館遺跡、東北の新地式土器を出土した那珂川町深見内遺跡や同細沢B遺跡などがある。

那珂川流域において晩期の遺跡は数多く発見されている。主なものでは堅穴住居跡と配石が発見された那須町赤羽遺跡、古の上遺跡及び西ノ原遺跡、多量の土器が出土した那須烏山市羽場遺跡や鳴井上遺跡などがある。これらの遺跡からは、関東地方の安行式土器や千綱式土器と共に東北地方の大洲式土器が出土しており、各地域の特徴ある土器型式の共存関係が理解できる。

弥生時代 弥生時代に関しては、神田城南遺跡周辺における確認例が少なく、発掘調査例もほとんど無い。

表面採集等により知られている遺跡を挙げれば、中期では条痕文系や縄文系の土器が出土した那珂川町古館遺跡や摩り消し縄文系土器が出土した72.三枚畑C遺跡、また条痕文系や縄文系の壺形土器の出土が認められる87.滝田内遺跡や八ヶ平遺跡などがある。後期では大田原市岡林遺跡、那珂川町23.宮内遺跡や38.吉田富士山古墳などがあり、二軒屋式土器あるいは茨城県の十玉台式土器に比定されるものが出土している。

古墳時代 那珂川流域は栃木県有数の古墳集中地域であり、その地理的位置や古墳の形状等から本県中部とは別の文化圏が想定されている。先ず、全体を見渡すと古墳時代前期として確認されているものに前方後方墳6基、方墳30基がある。これらの立地は丘陵上ではなく、いずれも周囲との比高差がまったくない河岸段丘上に占地している。その分布は権津川流域と旧湯津上村那珂川右岸地域に限定される。

旧湯津上村那珂川右岸地域の前方後方墳としては、上流から54.下侍塚古墳、55.上侍塚北古墳、56.上侍塚古墳があり、下侍塚古墳の東側に隣接して方墳である53.侍塚8号墳がある。権津川流域の前方後方墳は、やはり上流から左岸に15.駒形大塚古墳、35.吉田新宿古墳群、37.那須八幡塚古墳があり、那須八幡塚古墳については権津川と那珂川の合流点を見下ろす右岸段丘上に位置する。おそらくこれらの変遷は、関東地方でも最古級に位置付けられる15.駒形大塚古墳を初現とし、37.那須八幡塚古墳、35.吉田新宿古墳群、56.上侍塚古墳、54.下侍塚古墳、55.上侍塚北古墳の順への変遷が想定される。

中期の特徴としては、県中部では前方後方墳から前方後円墳に転換し、大形の前方後円墳が継続的に築造されるものの、本地域では55.上侍塚北古墳直後の古墳を見出すことができない。当地域のこの時期には、中小規模の帆立貝式前方後円墳ないしは円墳であり、47.蛭田富士山古墳群や48.酢原1号墳がある。

中期後半から後期になると、本地域でも前方後円墳が築かれ、埴輪を伴うものも見られる。また、横穴式石室も後期中半には出現する。前方後円墳では2基の無袖型横穴式石室を持つ大田原市二ツ堂塚古墳、埴輪を伴う53.下侍塚1号墳や2.塚原1号墳、2基の横穴式石室がある11.梅曾大塚古墳、無袖型横穴式石室の28.首長原古墳、県内最大級の横穴式石室をもつ70.川崎古墳、埴輪を伴う79.戸田1号墳などがある。

当時代の集落の調査例は少なく、不明な点が多い。調査が行われた集落遺跡を列挙すると、9.浄法寺庵寺跡、5.藤柄遺跡、30.三輪遺跡、40.谷田遺跡、42.谷田上の原南遺跡、75.松野遺跡などがある。このうち30.三輪遺跡、40.谷田遺跡及び42.谷田上の原南遺跡は神田城南遺跡と同一段丘上に営まれた遺跡である。

古代 本地域は古代下野国の那須郡にあたる。古墳時代に那須国として成立した当地域は、51.那須国造碑の解釈から、7世紀末に那須評として下野国に組み入れられ、大宝律令後に那須郡になったとされている。この新しい行政区分に伴い、中央政府による新しい政治や経済の改革及び文化が本地域に及んだことが幾つかの遺跡より窺うことができる。

那珂川町梅曾付近は那須郡の中心とされる那須郡の郡役所である14.那須官衙遺跡や寺院跡である9.浄法寺庵寺跡がある。14.那須官衙遺跡は近年の発掘調査により、溝で区画された三つのブロックが存在し、その営まれた時期は8世紀初頭前後から10世紀代と考えられている。9.浄法寺庵寺跡は伽藍配置が不明であるが、出土した瓦より7世紀後半代に建立されたものと考えられ、県内でも最古に位置付けられる寺院跡である。

仏教に関連する遺跡は、他に62.尾の草遺跡や那須烏山市寺下遺跡がある。62.尾の草遺跡は遺跡の性格については明確でないが、浄法寺庵寺跡と同範の瓦が出土しており関連が窺われる。また、寺下遺跡も遺跡の状況がはっきりしないものの銅製の観世音菩薩立像が見つかっており、やはり銅製の如来坐像が出土している那須町堂平遺跡と同様に小仏堂のような堂宇の存在が予測される。これらの遺跡は、那須郡における仏教の伝播を考える上で極めて重要な例と言える。

那須国造碑が位置する大田原市湯津上付近は、那須郡石上郷に比定される地域である。この郷は東山道の

ルート上にあり、磐上駅家が存在するとされている。現在、磐上駅家は那須国造碑の西方に想定され、ここに位置する50.小松原遺跡は駅家に近接する集落跡と考えられ、多数出土した墨書土器が目される。この磐上駅家推定地付近は条理遺構も想定できる地域であり、大田原市大河内付近、同北滝付近及び同片田付近に条理遺構の痕跡が見いだせる。

神田城南遺跡が位置する那珂川町三輪は那須郡三和郷に比定される。ここには式内社である17.三和神社が位置し、遺跡としては当時期の集落跡が幾つか発見されている。24.上宿遺跡からは8世紀半ばの漆工房跡である堅穴住居跡が見つかり、漆容器である土器と共に漆紙文書が出土している。また、22.温泉神社裏古墳群に近接する温泉神社北遺跡は平安時代の集落跡であり、堅穴住居跡と共に鍛冶工房跡が見つかり、さらに、神田城南遺跡の西方喜連川丘陵内には製鉄炉と思われる跡が多数確認されている。これらの時期は不明であるが古代まで遡る可能性もあり得る。

那珂川左岸の那珂川町馬頭方面は砂金の産地であり、また窯業の地でもある。『続日本後記』によれば、式内社である健武山神社は採金地に鎮座する神社として位が与えられている。

古代の窯跡としては61.小砂古窯跡群と71.荒神平瓦窯跡がある。61.小砂古窯跡群は須恵器窯であり、出土土器から8世紀中葉から9世紀代の操業である。71.荒神平瓦窯跡は瓦窯跡であり、その供給先は那須官衙跡と推測される。那須郡における窯跡は、この他に那須烏山市の中山窯跡や銭神窯跡群がある。両窯跡とも須恵器窯であり、中山窯跡は8世紀末から9世紀、銭神窯跡は9世紀代の操業であると考えられている。

古代の国軍制は、在地豪族の私領の開発と荘園の成立に伴い、11世紀頃には解体したとされる。そして開発者である在地豪族が荘園の支配者となり、これが武士団として形成されていったとされる。那須郡において那須荘が成立し、那須氏が支配するようになった。これ以降、中世の那須郡は一部を除き、那須氏とその一族及び家臣が郡内各地を治めている。

中世 城館跡によりその流れを概観すると、古代末期、那須氏の本拠は神田城南遺跡北側に築城された31.神田城跡に置かれた。これは11世紀中頃から12世紀初め頃に須藤兼良信が築城したとされ、那須之隆（資之）が大田原市福原北岡城館に拠点を移すまで存続する。この居館は短郭式長方形プランであり、堀と土塁で囲まれた内部は東西132m、南北162mの広大なものである。

15世紀の初め頃には、那須氏兄弟の資之と資重の間に不和が生じ、那須氏は上・下に分裂した。上那須氏は福原北岡城館に、下那須氏は那須烏山市烏山城館にそれぞれ本拠を置いている。その後、約100年にわたって両氏は分裂し、16世紀前葉に上那須氏内の家督争いの結果による断絶で、下那須氏の資房に統一されている。上那須氏の家督争いは、上那須氏が属していた磐城の岩城氏と常陸の佐竹氏が宇都宮氏と永正13年(1516年)頃に那珂川町調吊台で戦った際の混乱に乗じて起こったものと推察される。統一後の那須氏は烏山城館を本拠としたが、豊臣秀吉の小田原攻め後の天正18年(1590年)、資晴の代に没収され、大田原市佐良土城館へ移っている。そして資晴の子資景の時に再興となり、那須氏は福原北岡城館の要害であった福原城館を再利用し、拠点としている。

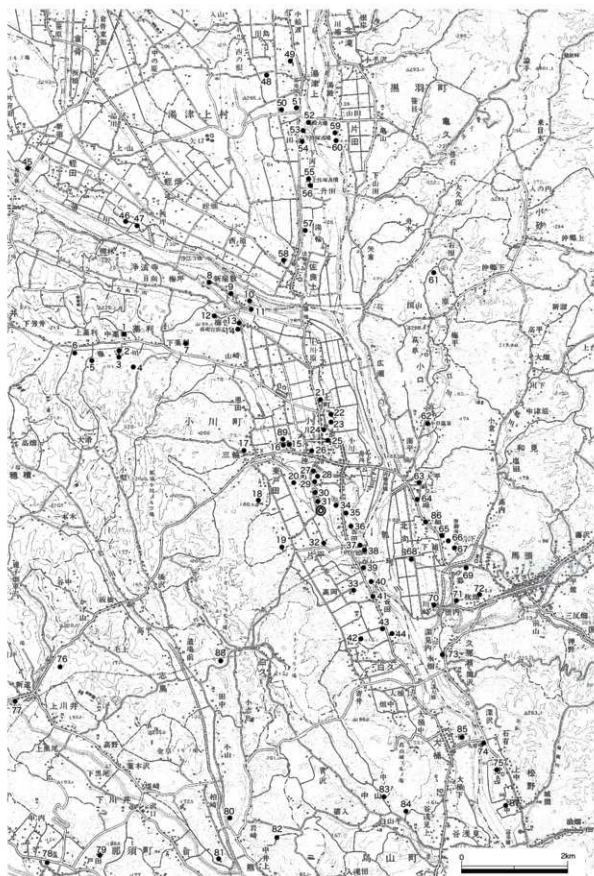
以上が那須氏の流れであるが、那須郡内に那須氏本家の城館跡の他に、分出した一族や家臣の城館跡が存在する。大田原市の亀山城館と山田城館は那須義隆を祖とする堅田氏や重臣の大関氏が拠点とし、金丸氏要害は那須資國を祖とする金丸氏が創築した。大田原市片府田城館は那須久隆を祖とする福原氏の拠点であり、那珂川町浄法寺城館は那須氏の支家浄法寺氏が創築し拠点に、片平城館は片平氏の祖である堅田義隆が亀山城館より移り創築した。大久保城館は那須資清が、那須烏山市根小屋城館は那須氏一族の大桶備前守義康が、同小堀城館と下川井城館は那須友家が、熊田城館は那須光資の次男光保が分知し、それぞれ築城したもので

ある。また、那珂川町馬頭付近は宇都宮氏の一族であり、後に佐竹氏に属した武茂氏や松野氏の城館跡が存在する。武茂城館は正応・永仁の頃（1288～1299年）、宇都宮氏より武茂泰宗が分知し築城した。松野城館や台城館、松野南城館は八田業義を祖とする松野氏が構築したものである。この他、広瀬城館と梅ヶ平城館は武茂氏に所属した大金氏の拠点である。このように、中世の神田城南遺跡周辺は、那須氏と武茂氏の基盤であったが、豊田秀吉と徳川家康の首領支配政策によって、近世期には大きく変化する。先ず、武茂氏は佐竹氏の秋田への移封に伴って去り、那珂川町馬頭町付近は水戸藩領となる。那須氏とその分家は旗本に格下げとなり、その領地は天領となった。この地域に中世から残ったのは那須氏の家臣である大田原氏と大関氏であり、それぞれ大田原藩と黒羽藩として立藩し、明治期まで存続している。

なお、ここに記載した内容については、『三輪仲町遺跡』（塚原1994）と『那須吉田新宿古墳群』（眞保1999）双方の歴史的環境になっている。

〈主要参考文献〉

- 宇都宮大学郷土史研究会 1955『栃木県那須郡伊王野村西ツ原遺跡発掘調査報告』
 宇都宮大学歴史研究会 1957『栃木県那須郡那須町赤羽遺跡調査報告』
 宇都宮大学歴史研究会 1960『栃木県羽場遺跡調査報告書』
 大和久震平・境 静夫 1972『栃木県の考古学』吉川弘文館
 小川町教育委員会 1983『栃木県小川町三輪御城跡調査概報』
 小川町教育委員会 1985『小川町遺跡分布調査報告書』
 葛連川町教育委員会 1971『早乙女台古墳調査報告書』
 財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1994『那須官衙跡Ⅰ』栃木県教育委員会
 眞保昌弘 1999『那須吉田新宿古墳群』栃木県小川町教育委員会
 塚原孝一 1994『三輪仲町遺跡』栃木県教育委員会 財団法人栃木県文化振興事業団
 栃木県教育委員会 1971『吉田富士山古墳』
 栃木県教育委員会 1972『天矢場遺跡』
 栃木県教育委員会 1972『榎田富士山古墳群』
 栃木県教育委員会 1974『中山宮跡発掘調査概報』
 栃木県教育委員会 1975『栃木県遺跡地図』
 栃木県教育委員会 1975『鳥羽新田菩提神社境内内遺跡発掘調査概報』
 栃木県教育委員会 1975『二ツ室塚発掘調査概報』
 栃木県教育委員会 1978『栃木県埋蔵文化財保護行政年報 昭和53年3月』
 栃木県教育委員会 1979『茶臼塚古墳群 小松原遺跡』
 栃木県教育委員会 1981『栃木県埋蔵文化財保護行政年報 昭和55年度』栃木県教育委員会
 栃木県教育委員会 1983『栃木県の中世城館跡』財団法人栃木県文化振興事業団
 栃木県教育委員会 1988『栃木県生産遺跡分布調査報告書』
 栃木県史編さん委員会 1976『栃木県史 資料編・考古Ⅰ』栃木県
 栃木県史編さん委員会 1980『栃木県史 通史編2・古代Ⅱ』栃木県
 栃木県史編さん委員会 1981『栃木県史 通史編1・原始古代Ⅰ』栃木県
 栃木県立しもつけ風土記の丘資料館 1988『前方後円墳の時代』
 栃木県立しもつけ風土記の丘資料館 1989『磯穴式石室の世界』
 馬頭町史編さん委員会 1990『馬頭町史』馬頭町
 三本文雄・村井富雄 1957『那須八幡塚』
 三本文雄 1986『那須駒形大塚』
 南那須町編さん委員会 1993『南那須町史・資料編』南那須町
 南那須町教育委員会 1991『南那須町の遺跡』
 南那須町教育委員会 1992『銭神宮跡群』
 南那須町教育委員会 1993『新道平遺跡現地説明会資料』
 湯津上村誌編さん委員会 1979『湯津上村誌』湯津上村
 湯津上村教育委員会 1976『下侍塚古墳周濠発掘調査概報』



第6図 周辺の遺跡位置図

第1表 周辺の遺跡一覧

№	遺跡名	所在地	時期	概要
◎	神田城南遺跡	那珂川町三輪	古墳-中世	本遺跡及び昭和45年調査
1	中打古墳	那珂川町栗利	古墳	前方後円墳
2	塚原古墳	那珂川町栗利	古墳	前方後円墳(消滅) 円筒埴輪
3	稲荷古墳	那珂川町栗利	古墳	円墳(消滅)
4	庭渡古墳群	那珂川町栗利	古墳	円墳3基
5	藤柄遺跡	那珂川町芳井	古墳	集落 昭和55年調査 古墳時代後期堅穴住居跡3軒
6	刈田遺跡	那珂川町芳井	古墳	散布地
7	荒屋古墳群	那珂川町栗利	古墳	円墳3基 須恵器
8	新屋敷古墳	那珂川町浄法寺	古墳後	円墳 墳形約15m 川原石小口積み横穴式石室露出
9	浄法寺庵寺跡	那珂川町浄法寺	奈良	寺院跡 濠弁瓦、重弧文字瓦など出土
10	観音堂横穴	那珂川町浄法寺	古墳後	横穴2基
11	梅曾大塚古墳	那珂川町小川	古墳後	前方後円墳 全長50m 昭和39年調査 横穴式石室2基(消滅)
12	地蔵久保古墳群	那珂川町小川	古墳	円墳2基
13	梅曾2号墳	那珂川町小川	古墳	円墳(消滅)
14	那須官衙遺跡	那珂川町小川	奈良-平安	那須郡衙 溝区画内基壇、掘立建物多数 銅印、瓦出土
15	駒形大塚古墳	那珂川町小川	古墳前	前方後方墳60.5m 昭和49年調査 木炭樫 画面帯四獣鏡、銅鏡、鉄斧、直刀、剣、刀子、ガラス玉、土師器
16	駒形大塚古墳群	那珂川町小川	古墳	円墳が5基(うち3基消滅)
17	三和神社	那珂川町三輪		延喜式内社
18	竹ノ内古墳	那珂川町片平	古墳	通称熊野神社古墳 前方後円墳が約40m山頂墳
19	岩谷内横穴	那珂川町片平	古墳後	横穴
20	三輪神町遺跡	那珂川町三輪	旧石器-中世	古墳時代全般の大規模集落のほか方墳8基、土墳墓3基
21	上の原古墳	那珂川町小川	古墳	円墳(消滅)
22	温泉神社裏古墳群	那珂川町小川	古墳	円墳5基(うち2基消滅) 平成元年一部調査
23	宮内遺跡	那珂川町小川	弥生-古墳	十王土器式土器、円墳横穴式石室(消滅)
24	上宿遺跡	那珂川町小川	古墳-奈良	集落 平成4年一部調査 古墳時代前期堅穴住居跡1軒
25	上の台遺跡	那珂川町小川	古墳-平安	集落 古墳 古墳時代前期赤彩塗出土
26	増倉内遺跡	那珂川町小川	古墳	集落 古墳 古墳時代前期高坏出土
27	桃塚古墳	那珂川町三輪	古墳	昭和29年調査 前方後円墳(消滅)
28	首長原古墳	那珂川町三輪	古墳	別名東山古墳 平成4年調査 前方後円墳が、川原石小口積み横穴式石室 大刀、銅剣、耳環、鉄鍬、刀子、勾玉、管玉、切子玉、ガラス玉
29	七所原古墳群	那珂川町三輪	古墳	首長原古墳周辺に6基、一部に横穴式石室(消滅)
30	三輪遺跡	那珂川町三輪	古墳	集落 昭和28年調査 古墳時代前・中期の堅穴住居跡5軒確認
31	神田城跡	那珂川町三輪	古墳-中世	昭和42年調査 中世遺構のほか古墳時代後期堅穴住居跡確認
32	嚴治が原古墳	那珂川町小川	古墳	円墳(消滅)
33	谷田上の原古墳	那珂川町谷田	古墳	円墳
34	新宿遺跡	那珂川町小川	古墳	集落 平成5年調査 古墳時代前・中期の堅穴住居跡2軒
35	吉田新宿古墳群	那珂川町小川・吉田	古墳	前方後方墳2基、方墳21基
36	観音堂古墳	那珂川町吉田	古墳	方墳 昭和56年、平成4年範囲確認調査 墳丘下から古墳築造直前の堅穴住居跡を確認
37	那須八幡塚古墳	那珂川町吉田	古墳	前方後方墳 墳長60.5m 前方部両隅面取り状 主体部木棺両端小口粘土塊、雙龍鏡、短剣、鋸、鏡、鉄斧、鎌、管玉、土師器高坏、器台、鉢、有段口辺意、異形土器 昭和28年、平成3年調査
38	吉田富士山古墳	那珂川町吉田	古墳	方墳 昭和45年範囲確認調査 古墳時代前期の堅穴住居や弥生土器出土
39	岡の上古墳	那珂川町谷田	古墳	通称東金市遺跡 集落 昭和43年調査 6軒の古墳時代中期の堅穴住居跡を確認
40	谷田遺跡	那珂川町吉田	古墳	円墳 鏡出土(消滅)
41	谷田古墳群	那珂川町吉田	古墳中	円墳2基、1号墳は昭和57、58年調査 直径15m 箱式石棺、甕玉、番石製小玉、ガラス玉、高坏、S字甕
42	谷田上の原南遺跡	那珂川町谷田	古墳	平成3年調査 集落 古墳時代中期の堅穴住居跡確認
43	上人塚古墳	那珂川町谷田	古墳	昭和39年調査 古銭6枚出土
44	高野古墳	那珂川町谷田	古墳	円墳 横穴式石室 刀土出(消滅)
45	岡林遺跡	大田原市新宿	縄文-平安	集落 弥生時代後期 二軒屋式土器出土
46	蛭田富士山古墳	大田原市蛭田	古墳	前方後円墳 墳長40m

No.	遺跡名	所在地	時期	概要
47	輝田富士山古墳群	大田原市輝田	古墳	昭和45年調査 円墳4基のほか箱式石棺、竪穴式石室など埋葬施設のみ墳墓8基 横穴式石室8基を確認 直刀、刀子、鉄鏝、耳環、勾玉、管玉、土師器ほか 古墳中期の竪穴住居跡2軒確認
48	静屋古墳群	大田原市湯津上	古墳	昭和52年調査 帆立貝式前方後円墳1基、円墳4基 埋葬主体は土坑、箱式石棺など鉄剣、内反刀、直刀、刀子、鉄鏝、滑石製剣形、白玉、紡錘車、土師器
49	岩船台古墳群	大田原市湯津上	古墳	大正11年調査 円墳 箱式石棺、短甲、鉄剣、鹿角製端押付直刀、鉄鏝出土（消滅）
50	小松原遺跡	大田原市湯津上	奈良～平安	集落 昭和52年調査 竪穴住居跡52軒 多量の墨書土器の出土
51	那須国造碑	大田原市湯津上	奈良	国宝 石碑 国造那須直草穂の顕彰碑
52	石田横穴群	大田原市湯津上	古墳後	横穴 直刀出土
53	侍塚古墳群	大田原市湯津上	古墳	前方後円墳1基、方墳1基、円墳6基 形象、円筒埴輪 須恵器、土師器
54	下侍塚古墳	大田原市湯津上	古墳前	前方後方墳 墳長84m 調査元禄5年(1692) 主体部粘土床もしくは塊か 鏡、鉄刀、柄笏、鉾、鏝、土師器
55	上侍塚古墳	大田原市湯津上	古墳前	前方後方墳 墳長48.5m
56	上侍塚古墳	大田原市湯津上	古墳前	前方後方墳 墳長114m 調査元禄5年(1692) 主体部粘土部分、鏡、鉄刀、鉄鏝、管玉、石器、土師器
57	高野遺跡	大田原市佐良土	古墳	集落 古墳時代前期の高塚、器台、壺など出土
58	佐良土小学校遺跡	大田原市佐良土	古墳	集落 古墳時代中後期の土師器、須恵器
59	温泉神社古墳	大田原市片田	古墳	古墳
60	熊野神社古墳	大田原市片田	古墳	古墳
61	小砂古窯跡群	那珂川町小砂	奈良～平安	窯跡 4支群で9基 須恵器
62	尾の草遺跡	那珂川町小口	奈良	寺院跡 浄法寺院寺の裏弁、複弁系鏡瓦と同様瓦群が出土、瓦窯跡か
63	大平遺跡	那珂川町小口	縄文～平安	集落跡 大規模な複合遺跡
64	大平横穴群	那珂川町小口	古墳後	横穴9基
65	北向田横穴群	那珂川町北向田	古墳後	横穴30基
66	和見横穴群	那珂川町和見	古墳後	横穴47基
67	唐御所横穴	那珂川町和見	古墳後	玄室形家形 天井切妻屋根形椽木造り出し
68	北向田古墳群	那珂川町北向田	古墳	古墳8基、方墳、円墳、埴輪 昭和62年7号墳調査、円墳直径16m 横穴式石室 大刀、刀子、耳環、勾玉、小玉、須恵器
69	新道遺跡	那珂川町馬頭	古墳後	集落
70	川崎古墳	那珂川町久那瀬	古墳後	前方後円墳45m、横穴式石室 昭和62、63年石室調査 耳環、靱片、鉄鏝、弓筋金具、馬具 平成16、20年範囲確認調査、須恵器
71	荒神平瓦窯跡	那珂川町馬頭	奈良	登窯1基
72	三枚畑古墳群	那珂川町馬頭	古墳	姫塚古墳など円墳12基 横穴式石室 C地点から弥生中期土器出土
73	舟場平遺跡	那珂川町久那瀬	古墳～平安	集落 平成20、21年調査
74	深沢古墳群	那珂川町深沢	古墳	円墳6基
75	松野遺跡	那珂川町松野	縄文～平安	集落 古墳前期竪穴住居2軒、後期4軒
76	新道平遺跡	那須烏山市上川井	縄文～平安	集落 弥生中期土器出土
77	森後遺跡	さくら市鹿子畑	古墳～近世	集落 平成17～19年調査 古墳前期～平安を中心とした遺構多数検出
78	古館横穴群	那須烏山市三箇	古墳後	横穴7基
79	戸田古墳群	那須烏山市三箇	古墳	前方後円墳1基、円墳2基、埴輪
80	小志鳥横穴群	那須烏山市志鳥	古墳後	横穴41基、昭和60年調査調査、須恵器
81	山崎横穴群	那須烏山市熊田	古墳後	横穴3基
82	銭神窯跡群	那須烏山市熊田	平安	窯跡 平成元年調査 須恵器窯2基
83	中山窯跡	那須烏山市中山	奈良～平安	窯跡 須恵器窯
84	中山横穴群	那須烏山市中山	古墳後	横穴8基
85	大桶古墳群	那須烏山市大桶	古墳	古墳40数基、昭和34、38年調査 横穴式石室、直刀、刀子、鉄鏝、勾玉、管玉、耳環
86	宮本遺跡	馬頭町北向田	古墳中	集落
87	庵田内遺跡	馬頭町松野	縄文～古墳	集落 弥生時代中期、古墳時代後期土器出土
88	鳥の子沢遺跡	那須町志鳥	縄文～古墳	集落 弥生中期土器出土
89	三輪御城遺跡	那珂川町三輪	旧石器～近世	細石刃石器群あり

第三章 検出された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要

栃木県県土整備部が進める県道小川大金停車場線の改良工事は、その拡幅箇所の一部が旧小川町（馬頭町との合併により現在は那珂川町）作成の詳細遺跡分布調査による神田城南遺跡の範囲内に位置し、また工事箇所の一部には国指定史跡那須神田城跡も近接する。これらのことから、栃木県教育委員会では用地買収の完了を待って、平成23年4月12日と平成24年2月10日の2回にわたって試掘調査を実施している。今回の試掘調査箇所については、詳細遺跡分布調査に示された遺跡の分布範囲を基本とするものの、北側の範囲外についても調査の対象としている。

設定した9箇所のトレンチからは、住居跡・土坑・ピット及び溝跡等の遺構が発見されると共に、これらより土師器や近世の陶器類が出土したため、県土整備部に対し改めて発掘調査の必要性と調査範囲について回答を示すこととなった。発掘調査着手までの経緯については第1章に詳しいので、そちらを参照されたい。

なお、調査にあたっては、通行量の激しい県道の拡幅工事であるため安全柵の設置を、また掘削した表土を約2km先の那珂川河川敷に搬出する際に交通誘導員を常備する等、安全面への徹底が行われている。

調査第1区

調査第1区は、現県道の東側部分にあたる拡幅箇所とし、さらに耕作面の段差に伴い南側をⅠ-A区、北側をⅠ-B区と呼称している。県道の拡幅に伴う東側部分は、西側と比較して調査範囲が極めて狭小となることから、必然的に使用する重機も小型なものに限定される。掘削を開始すると、先ず県道建設時の盛り土、その直下には耕地整理を行った際の盛り土、さらに旧表土、そしてようやく遺構確認面に到達する。その深さは現地表面から1.4mにおよぶため、小型な重機ならではの極めて手間のかかる掘削作業、そして搬出用トラックへの詰め込みとなった。

発見された遺構についてであるが、南側のⅠ-A区では耕地整理に伴う掘削によってローム層が大きく削り取られており、残念ながら遺構はすべて消滅したと考えられる。

北側のⅠ-B区は、幅1.5m、長さ24mの南北に延びる調査区である。この狭い調査範囲に沿うような状態で溝跡が1条出土した。後にこれは、現道の西側調査区であるⅡ-B区より出土した溝跡と共に、古代の道路状遺構の両側の側溝として機能したものと理解されることとなる。

従前、Ⅰ-A区では耕地整理により遺構は消滅したと記載したが、Ⅰ-A区とⅠ-B区の境界は難壇状に地形が大きく改変を受けており、本来存在したであろう溝跡はこの時点で消滅したものと考えられる。

SD-05とした道路状遺構の東側側溝は、最大幅約1m、確認面からの深さは北端で65cmを測る。覆土の状況から2回の掘り返しの痕跡が窺え、最終段階の断面形状は上方が聞く箱葉研状である。側溝という性格上、出土遺物は極小片かつ微量であることに加え、また構築時期を決定する遺物としての認定に極めて苦慮するが、その点Ⅰ-B区では側溝と切り合う遺構が皆無であり、出土遺物がそのまま構築時期を示すものとして高い信頼性が得られる。

調査第2区

本調査区は、県道西側に設定した調査区で、上述した調査第1区とはほぼ対峙する位置関係にある。やはりⅠ区と同様に、耕地整理によって難壇状に改変されていることから、段差の有無をもって南側をⅡ-A区、北側をⅡ-B区としている。

Ⅱ-A区より発見された遺構の概要を各区毎に大略すると、南側のⅡ-A区は台地南端部にあたるため、

南側に向かって遺構確認面までの深さが徐々に増すこととなる。発見された遺構は南北に長い土坑1基と3条の溝跡である。第2号及び第3号溝跡は東西方向に互いに並行して掘り込まれる。各遺構からの出土遺物はほとんど無く、所属時期については不明である。

Ⅱ-B区の調査区では遺構全体固くからも明らかのように、Ⅰ区からⅢ区の中でも遺構が密集する地区である。特に、古墳時代に所属する竪穴住居跡が拡張したものも含め8軒発見されており、当該時期の集落が当地区周辺を中心に営まれていることが証明できよう。調査範囲が狭小であるため、住居跡の全体形状が明らかになったものは皆無であるが、中には第19号住居跡のように、おそらく一辺が10mを超える大型なものも存在しており、集落構成についても興味が尽きない。また同様に、第26号住居跡では、付随するカマドが新旧を合わせ3基発見されており、大きく延びる煙道部や内面黒色処理される土師器の出土など、東北地方との関連を想起させる。

Ⅰ-B区にて発見された第5号溝跡に対応する第6号溝跡は道路状遺構の西側側溝と考えられ、長さ49mにわたって発見されている。双方の溝跡は一部平行する箇所があり、当所では心々の距離にて6.5m前後を測る。この道路状遺構を官道とするならば12mから6m前後に変更された時期とすることができよう。またⅠ-B区と同様に、当調査区内においても2回の掘り返しが観察することが可能であり、当初とそれ以後に2回の掘り返しが行われている。これ以外に12基の土坑や第32号とした掘立柱建物跡・柵列跡が古代に所属すると思われるが、覆土の切り合いや僅かな出土遺物より判断しており、明確な確証に欠ける。さらに中世以降とした遺構に溝跡や土坑があるが、やはり所属時期については不確定な部分が多々ある。

調査第三区

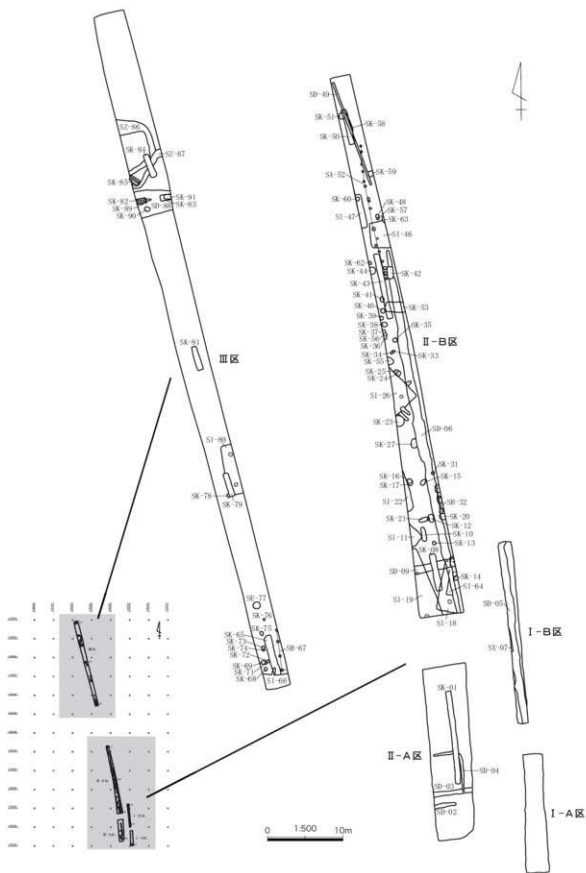
第三区は県道西側において最も北側に位置する調査区であり、その範囲は東西4m×南北92mの368㎡である。最大の調査区であるものの発見された遺構数は26と少なく、さらにこれらは極めて疎らな状態で出土している。

時代の古い順に記載すると、古墳時代後期に該当する遺構はSI-66とSI-80とした竪穴住居跡2軒、また互いに切り合う2基の方形溝遺構のSZ-86・87がある。調査区南端より発見されたSI-66はカマド周辺を調査したに過ぎないが、土師器を中心に多数の什器類が出土し、住居跡の構築時期やセット関係を明瞭に把握可能と思われる。また、カマドの燃焼部壁面に煉瓦状の粘土を貼付して補強する点や煙道部が大きく延びるなど、構築方法や形状が非常に特異であり、Ⅱ区のSI-26と同様に東北地方との関わりが強く感じ取れる。切り合う2基の方形溝遺構は、全体の約1/2程度を調査したに過ぎないが、方形というよりは六角ないしは五角形に近い印象を受ける。

平安時代では、掘立柱建物跡及び井戸跡としたSB-67とSE-77がある。SB-67は建物西側に相当する4本の柱穴を確認している。柵列跡との判断もあるが、柱間が建物の間尺に一致しており、東側に延びる2間×3間の建物と判断して大過ないであろう。SE-77からは大量の礫に混じって須臾器の破片が出土しており、本時期に所属する遺構と判断した。

中世では、隣接する神田城跡を囲む北辺の外堀と同一方向で掘り込まれた第88号溝跡がある。確認幅が約3.5mであることから、本来は幅4m、深さ1mにおよぶ大溝が西側に直線的に掘られ、単郭周縁部の区画をなしていたと思われる。残念ながら溝内部からの出土遺物は無い。

上記以外に小穴や方形土坑などが幾つかあるが、出土遺物がほとんどなく時期不明のものが多く、中には茅葺の貯蔵に使用された土坑も発見される。



第7図 神田城南遺跡遺構全体図

第2表 遺構計測表

():推定 []:残存

遺構名	調査区	主軸方向	平面形	規模 (m)			備考
				東西 (長径)	南北 (短径)	深さ	
SI-11	Ⅱ-B区	N-40°-E	(方形)	[2.40]	[1.90]	0.26 ~ 0.30	伊:南西寄
P1			円形	0.44	0.41	0.43	
SI-18	Ⅱ-B区	N-12°-E	(方形)	[2.70]	[6.20]	0.25 ~ 0.35	SD-06・SK-08・14より旧、SI-19-64より新
P1			楕円形	0.53	0.44	0.44	
P2			(不整形)	[0.58]	0.58	0.51	
SI-19	Ⅱ-B区	N-22°-W	(方形)	[2.90]	[9.56]	0.40	SI-18-SD-09より旧
P1			不整形円形	0.33	0.33	0.33	
P2			(楕円形)	[0.39]	0.47	0.27	
SI-22	Ⅱ-B区	N-16°-W	(隅丸方形)	[0.84]	5.10	0.18 ~ 0.30	
SI-26	Ⅱ-B区	N-46°-E	(方形)	[5.21]	[3.83]	0.12 ~ 0.25	カマド1・2:南東壁、カマド3:北東壁東寄、SK-23-24-25-SD-06より旧
P1			円形	0.42	0.42	0.50	
SI-46	Ⅱ-B区	N-5°-W	(方形)	[2.43]	3.20	0.02 ~ 0.06	SK-63より旧
P1			不整形円形	0.26	0.24	0.21	
SI-47	Ⅱ-B区	N-12°-W	(隅丸方形)	[0.81]	4.30	0.25	SK-60より旧
SI-64	Ⅱ-B区	N-1°-W	(方形)	[0.86]	5.04	0.30 ~ 0.45	SI-18より旧
SI-66	Ⅲ区	N-1°-E	—	[3.46]	[2.00]	0.35 ~ 0.45	カマド:北壁、SK-65より旧
SI-80	Ⅲ区	N-11°-W	(隅丸方形)	[1.74]	6.72	0.18 ~ 0.20	SK-79より旧
P1			楕円形	0.47	0.41	0.55	
P2			楕円形	0.52	0.45	0.45	

掘立柱建物跡

遺構名	位置	主軸方向	平面形	柱間	総長 (m)	備考
SB-32	Ⅱ-B区	N-12°-W	—	2間	3.1	西側柱列のみ確認
SB-67	Ⅲ区	N-8°-W	—	3間	5.3	西側柱列のみ確認
遺構名	平面形	柱間距離 (m)	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備考
SB-32	SK-28	楕円形	—	0.70	0.48	0.66
	SK-29	楕円形	1.50	0.67	0.59	0.40
	SK-30	(楕円形)	(0.30)	[0.31]	0.51	0.20
	SK-54	(楕円形)	1.20	1.00	[0.61]	0.34
SB-67	P1	円形	—	0.34	0.29	0.21
	P2	円形	1.90	0.31	0.30	0.17
	P3	円形	1.90	0.35	0.29	0.40
	P4	(不整形円形)	1.50	0.32	[0.23]	0.40

櫛列跡

遺構名	調査区	主軸方向	柱間	総長 (m)	備考	
SA-52	Ⅱ-B区	N-11°-W	14間	18.12	P2・3新旧あり	
遺構名	平面形	柱間距離 (m)	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備考
SA-52	P1	楕円形	—	0.38	0.25	0.32
	P2	楕円形	0.57	0.39	[0.15]	0.11
	P3	円形	(0.20)	0.37	0.37	0.42
	P4	円形	0.64	0.42	0.40	0.59
	P5	円形	0.94	0.31	0.26	0.25
	P6	円形	1.36	0.30	0.25	0.27
	P17	円形	0.90	0.31	0.30	0.32
	P7	円形	2.20	0.44	0.40	0.45
	P8	楕円形	2.75	0.30	0.21	0.20
	P9	円形	0.96	0.27	0.21	0.10

遺構名	平面形	柱間距離 (m)	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備考
SA-52	P10	円形	0.34	0.38	0.33	0.29
	P11	円形	1.71	0.30	0.30	0.31
	P12	円形	0.66	0.26	0.24	0.14
	P13	円形	1.31	0.27	0.24	0.20
	P14	(不整形)	0.98	[0.25]	[0.37]	0.45
	P15	円形	1.64	0.28	0.25	0.31
P16	円形	0.76	0.27	0.26	0.23	

井戸跡

遺構名	調査区	主軸方向	平面形	断面形	規模 (m)			備考
					長径	短径	深さ	
SE-77	Ⅲ区	—	円形	円筒状	0.90	0.89	1.75	

土坑

遺構名	調査区	主軸方向	平面形	断面形	規模 (m)			備考
					長径	短径	深さ	
SK-01	Ⅱ-A区	N-6° -W	長方形	逆台形状	12.30	0.70	0.04	SD-04より新
SK-08	Ⅱ-B区	N-11° -W	長方形	方形状	5.60	0.90	0.08	SD-09・SI-18より新
SK-10	Ⅱ-B区	N-12° -W	長楕円形	鍋底状	1.90	0.55	0.10	
SK-12	Ⅱ-B区	N-13° -W	楕円形	鍋底状	1.05	0.55	0.15	SK-21より新
SK-13	Ⅱ-B区	N-23° -W	円形	ビット状	0.50	0.45	0.47	
SK-14	Ⅱ-B区	N-68° -E	(長楕円形)	円筒状	[0.53]	0.55	0.95	SI-18より新
SK-15	Ⅱ-B区	N-35° -E	楕円形	W字状	0.85	0.55	0.50	
SK-16	Ⅱ-B区	N-27° -W	不整形	逆台形状	0.60	0.57	0.29	SK-17より新
SK-17	Ⅱ-B区	N-13° -E	楕円形	逆台形状	[0.77]	0.60	0.50	SK-16より旧
SK-20	Ⅱ-B区	N-81° -E	(楕円形)	鍋底状	[0.74]	0.85	0.40	SD-06より旧
SK-21	Ⅱ-B区	N-74° -E	長楕円形	(逆台形状)	1.45	0.55	0.45	SK-12より旧
SK-23	Ⅱ-B区	—	(円形)	鍋底状	1.50	[1.05]	0.45	SI-26より新
SK-24	Ⅱ-B区	N-41° -E	楕円形	鍋底状	0.70	0.55	0.25	SK-25・SI-26より新
SK-25	Ⅱ-B区	N-46° -W	(楕円形)	皿状	[0.40]	0.60	0.13	SK-24より旧、SI-26より新
SK-27	Ⅱ-B区	N-3° -E	楕円形	皿状	1.25	[0.78]	0.18	SD-06より旧
SK-28	Ⅱ-B区	N-1° -W	楕円形	円筒状	0.71	0.48	0.67	SD-06より旧
SK-29	Ⅱ-B区	N-3° -W	楕円形	鍋底状	0.67	0.59	0.40	SD-06より旧、SK-30より新
SK-30	Ⅱ-B区	—	(楕円形)	(逆台形状)	[0.31]	0.51	0.20	SD-06・SK-29より旧
SK-31	Ⅱ-B区	—	円形	漏斗状	0.42	0.37	0.50	SD-06より旧
SK-33	Ⅱ-B区	—	円形	ビット状	[0.27]	0.30	0.28	SK-34より旧
SK-34	Ⅱ-B区	—	円形	ビット状	0.39	0.33	0.30	SK-33より新
SK-35	Ⅱ-B区	—	円形	皿状	0.58	0.55	0.07	
SK-36	Ⅱ-B区	—	円形	U字状	0.60	[0.37]	0.53	SK-56より新
SK-37	Ⅱ-B区	—	(円形)	U字状	[0.38]	[0.46]	0.40	SK-56より新
SK-38	Ⅱ-B区	N-85° -W	円形	鍋底状	0.75	0.60	0.33	
SK-39	Ⅱ-B区	—	円形	皿状	[0.54]	0.50	0.08	
SK-40	Ⅱ-B区	—	円形	船底状	0.60	0.58	0.18	
SK-41	Ⅱ-B区	N-21° -W	不整形楕円形	船底状	0.75	0.55	0.20	SK-43より旧
SK-42	Ⅱ-B区	N-4° -W	隅丸長方形	箱形	1.60	0.80	0.60	SD-06より新
SK-43	Ⅱ-B区	N-11° -W	長方形	逆台形状	8.80	0.70	0.05	SK-41・53より新
SK-44	Ⅱ-B区	—	円形	箱形	0.95	[0.71]	0.35	
SK-48	Ⅱ-B区	N-23° -W	不整形	ビット状	0.48	0.44	0.35	SK-57より新
SK-50	Ⅱ-B区	N-14° -W	長方形	皿状	4.66	0.70	0.05	SD-49より旧、SK-51・58より新
SK-51	Ⅱ-B区	N-70° -E	楕円形	鍋底状	[1.05]	0.90	0.40	SD-49・SK-50より旧
SK-53	Ⅱ-B区	N-89° -W	隅丸方形	(逆台形状)	[2.57]	1.45	0.20	SD-06・SK-43より旧
SK-54	Ⅱ-B区	N-2° -E	(楕円形)	(鍋底状)	1.05	[0.61]	0.34	SD-06より旧
SK-55	Ⅱ-B区	N-89° -E	(楕円形)	箱形	[0.76]	1.10	0.20	

第3章 検出された遺構と遺物

遺構名	調査区	主軸方向	平面形	断面形	規模 (m)			備考
					長径	短径	深さ	
SK-56	II-B区	—	(槽円形)	U字状	[0.50]	[0.30]	0.50	SK-36-37より旧
SK-57	II-B区	—	円形	鍋底状	0.37	[0.26]	0.20	SK-48より旧
SK-58	II-B区	N-18°-W	(長方形)	皿状	[1.59]	[0.14]	0.05	SD-49-SK-50より旧
SK-59	II-B区	N-73°-E	隅円長方形	円筒状	[1.17]	0.75	0.95	SD-49より旧
SK-60	II-B区	N-90°-W	隅丸方形	U字状	[0.51]	0.50	0.70	SI-47より新
SK-62	II-B区	N-17°-W	不整形円形	ビット状	0.40	0.38	0.50	
SK-63	II-B区	N-24°-W	不整形円形	逆台形状	0.98	[0.26]	0.25	SI-46より新
SK-65	III区	N-16°-W	長方形	逆台形状	5.40	0.90	0.17	SI-66より新
SK-68	III区	N-1°-W	不整形円形	ビット状	0.50	0.40	0.23	
SK-69	III区	N-40°-E	円形	ビット状	0.56	0.52	0.45	SK-71より新
SK-71	III区	N-63°-W	槽円形	(ビット状)	[0.28]	0.36	0.23	SK-69より旧
SK-72	III区	N-58°-E	槽円形	鍋底状	0.50	0.32	0.18	
SK-73	III区	N-11°-E	円形	ビット状	0.47	0.41	0.35	SK-74より新
SK-74	III区	N-83°-W	不整形円形	ビット状	0.32	[0.19]	0.20	SK-73より旧
SK-75	III区	N-21°-W	不整形円形	逆台形状	0.55	0.45	0.35	
SK-76	III区	—	円形	ビット状	0.28	0.26	0.15	
SK-78	III区	N-22°-W	不整形円形	鍋底状	0.47	[0.34]	0.13	SK-79より旧
SK-79	III区	N-17°-W	長方形	鍋底状	3.15	0.72	0.18	SK-78-SI-80より新
SK-81	III区	N-15°-W	長方形	逆台形状	3.20	0.80	0.15	
SK-82	III区	N-79°-E	(長方形)	円筒状	[1.25]	0.62	0.45	SD-88-SK-89より新
SK-83	III区	N-84°-E	(長方形)	円筒状	[1.47]	0.75	0.55	SD-88-SK-91より新
SK-84	III区	N-23°-W	長方形	鍋底状	3.20	0.80	0.22	SD-86-87より新
SK-85	III区	N-58°-W	長方形	円筒状	1.45	0.73	0.66	
SK-89	III区	N-82°-E	(長方形)	円筒状	[1.33]	0.74	0.25	SK-82より旧、SD-88より新
SK-90	III区	—	槽円形	鍋底状	0.70	0.60	0.17	SD-88より旧
SK-91	III区	N-86°-W	(長方形)	円筒状	[0.96]	0.62	0.35	SK-83より旧、SD-88より新

方形周溝遺構

遺構名	調査区	長さ (m)		幅 (m)		深さ (m)	備考
		長軸	短軸	確認面	底面		
SZ-86	III区	[3.42]	4.46	0.55 - 2.16	0.46 - 0.50	0.10 - 0.35	SZ-87より旧
SZ-87	III区	—	—	0.33 - 1.05	0.29 - 0.87	0.14 - 0.19	SZ-86より新

溝跡

遺構名	調査区	断面形	長さ (m)	幅 (m)		深さ (m)	備考
				確認面	底面		
SD-02	II-A区	逆台形状	[2.86]	0.38 - 1.10	0.29 - 0.49	0.40	
SD-03	II-A区	箱形	[5.20]	0.49 - 0.90	0.34 - 0.63	0.30	
SD-04	II-A区	逆台形状	[8.39]	0.31 - 0.34	0.20 - 0.23	0.08	SK-01より旧、SD-03より新
SD-05	I-B区	V字状	[24.22]	[0.71] - 0.95	0.16 - [0.47]	0.22 - 0.65	一部掘り直しあり
SD-06	II-B区	V-U字状	[48.82]	0.97 - 1.60	0.30 - 0.48	0.15 - 0.48	一部掘り直しあり
SD-09	II-B区	皿状	[5.43]	1.00	0.74	0.14	SK-08より旧、SI-18-19-64より新
SD-49	II-B区	方形状	14.56	0.25	0.16	0.45	SK-50-51-58より新
SD-88	III区	船底状	[4.75]	2.53 - 3.50	0.55 - 1.13	0.38 - 0.56	SK-82-83-89-91より旧、SK-90より新

竪穴状遺構

遺構名	調査区	主軸方向	平面形	規模 (m)			備考
				東西	南北	深さ	
SX-07	I-B区	—	(方形)	[0.24]	[3.28]	0.17	SD-05より旧

第2節 古墳時代

今回の調査範囲は、畷道幅幅に伴うため非常に狭小であったものの、調査第Ⅱ区B地点より8軒、また第Ⅲ区より2軒の、都合10軒の竪穴住居跡が発見されている。何れも調査範囲の狭さから住居跡全体を窺い知り得るものは皆無であったが、第18号及び第19号住居跡の状況が示すように大型な竪穴住居跡が含まれる点が明示できる。特に第19号住居跡の南北壁は、その一部が調査区外に延びるものの現状で9.56mを確認しており、おそらく一辺が11m前後の極めて大型な竪穴住居跡であったことが推測される。

出土遺物を見ると、やはり調査範囲の関係から出土遺物が僅少となる点は否めない。中には、遺物実測図として提示不可能な住居跡が存在するが、土器片等の観察及び重複する遺構の前後関係により、10軒すべてが当該時代に所属するものとして理解できる。

住居跡に付随するカマドが発見されたものに第26号及び第66号住居跡があるが、第26号のカマド1ヤカマド2としたもの、そして第66号のカマドを含めた特徴として、煙道部が壁外に大きく突出する形状を示しており、東北地方との関連が認められる。なお、このことは、第11号・第18号・第19号・第26号・第47号及び第80号住居跡出土土器内に、内面黒色処理される坏類が含まれる点も一つの根拠として提示できる。

住居跡以外では、調査第Ⅲ区北端に方形周溝遺構と判断した重複する第86号及び第87号がある。共に幅50cm前後、深さ10～35cmの溝が廻るもので、第86号は明らかに隅丸方形形状を呈するものであろう。重複関係から後出する第87号については、「S」字状にねくる溝的な様相も拭いきれないが、調査時の所見では双方の覆土が極めて近似し、小片ではあるがほぼ同一時期と考えられる土器が出土するなど、第87号を第86号の改築等とする関連ある遺構として解釈することとした。

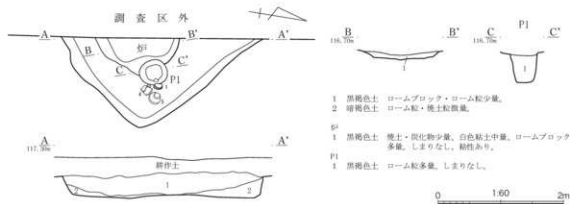
これら以外に、本時代に所属する第20号及び第23号とした2基の土坑を掲載している。第20号土坑については切り合い関係にある第6号溝跡との前後関係から、また第23号土坑については小片ではあるものの出土土器及び覆土の状況から本時代に伴うものと判断している。

1. 竪穴住居跡

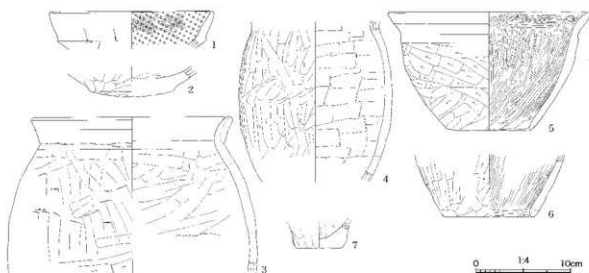
前述したように、本時代に所属する竪穴住居跡は、調査第Ⅱ区B地点内より第11号・第18号・第19号・第22号・第26号・第46号・第47号及び第64号の8軒が、これに調査第Ⅲ区内の第66号及び第80号の2軒が加わり総計で10軒が出土している。これらのすべての住居跡では、調査範囲の制約から全体を明示し得たものは皆無であり、そのため形状や細部の特徴等の記載については極めて断片的とならざるを得ない。

第11号住居跡（第8・9図、図版6・28）

本住居跡は、調査第Ⅱ区B地点内の中央やや南側に位置する。西側の調査区域外に住居跡の大半が存在す



第8図 第11号住居跡実測図



第9図 第11号住居跡出土遺物実測図

第3表 第11号住居跡出土遺物観察表

(上) 土器定額 (下) 土器残存

No.	器種・器形	大きさ(cm)	整形	特徴	胎土	色調・焼成	残存率	備考
1	土師器 環	口径: 117.0 底径: - 器高: 14.0	内: 口縁～体部ミガキ 外: 口縁部コナナデ・体部上の境ヘラナデ・体部ヘラナデ	直線的に開く体部。口縁部と体部の境に境をもつ。口縁部は外反して開き、上弁は内湾する。内面黒色処理。	白色粒微量	内: 黒外: 橙 ・良	口縁部1/8	覆土
2	土師器 甕	口径: - 底径: 8.6 器高: 12.5	内: 体～底部ナデ 外: 体部ナデ、底部ケズリ後ナデ	底部にゆるやかな弧状を呈し平坦にならない。	白色粒・砂粒・小礫少量	内: にぶい黄橙外: にぶい黄橙 ・良	底部1/2	覆土
3	土師器 甕	口径: 120.6 底径: - 器高: 116.6	内: 口縁部コナナデ、胴部縦位ヘラナデ・後ナデ・中位傾位ケズリ外: 口縁部コナナデ、胴部ヘラナデ・ナデ	胴部はゆるやかな湾曲をもつ。口縁部肥厚し、わずかに外反して開く。	白色細粒・砂粒少量、白色粒・小礫微量	内: にぶい黄橙外: にぶい赤褐色 ・良	口縁～胴部1/5 中位1/4	覆土 胴部中心部面荒れ
4	土師器 甕	口径: - 底径: - 器高: 117.0	内: 胴部下端～胴部ヘラナデ 外: 胴部コナナデ、胴部縦位ケズリ後中心にナデ	胴部は細長く、ゆるやかな湾曲をもつ。胴部はくびれ、その直上はまっすぐのびる。	白色細粒・砂粒少量、小礫少量	内: にぶい黄橙外: 明赤褐色 ・やや不良	胴部3/4	覆土
5	土師器 甕	口径: 21.1 底径: 8.7 器高: 12.6	内: 口縁部傾位ミガキ、胴部放射状ミガキ、底部ナデ 外: 口縁部コナナデ、胴部縦位傾位ケズリ、底部下端ナデ	小形。胴部はゆるやかな湾曲する。胴部はわずかにくびれて、口縁部はくの字状に折れて開く。胴部周辺の肥厚あり。	白色細粒・砂粒・小礫中量、白色粒微量	内: 橙外: にぶい橙 ・良	底部一部欠損	覆土
6	土師器 甕	口径: - 底径: 9.4 器高: 16.6	内: 胴部縦位ミガキ 外: 胴部縦位ケズリ・下端周辺ナデ・傾位ケズリ	胴部下部はゆるやかな湾曲をもつ。	白色粒・透明粒・小礫少量、赤色粒微量	内: 黄灰外: にぶい黄 ・良	胴下部～底部1/4	覆土
7	土師器 手捏ね土器	口径: - 底径: 4.8 器高: 12.2	内: 体～底部ヘラナデ 外: 体部ナデ、底部ケズリ後ヘラナデ・ナデ	残存部分は筒状を呈すが、上弁は外側に開くとと思われる。	白色細粒・白色粒・褐色粒・小礫微量	内: 橙外: 明褐色 ・良	底部完存	覆土

るため、住居跡東側コーナ付付近の僅かを調査したに過ぎない。調査区内における東壁及び南壁長はそれぞれ2.4mと1.9mであり、また確認面から床面までの深さは30cm程度である。床面はやや凹凸があるもののほぼ平坦で、東壁は垂直に、南壁はやや外傾気味に立ち上がる。

覆土はレンズ状堆積を示すことから自然埋没を示し、壁際から中央部に向かって暗褐色土の第2層が薄く堆積し、その後には黒褐色土の第1層が住居跡全体を大きく覆う。P1は柱穴に相当すると考えられ、これに近接して径1.35mの皿状の掘り込みがある。双方の掘り込みを柱穴及び炉跡と考えると、一辺3m前後の小型な住居跡であると想定することも可能であるが、小さ過ぎはしないか。炉跡については、白色粘土やロームブロックを多量に含むもの焼土が少量であるなど、床面下の掘方の一部である可能性も否定できない。

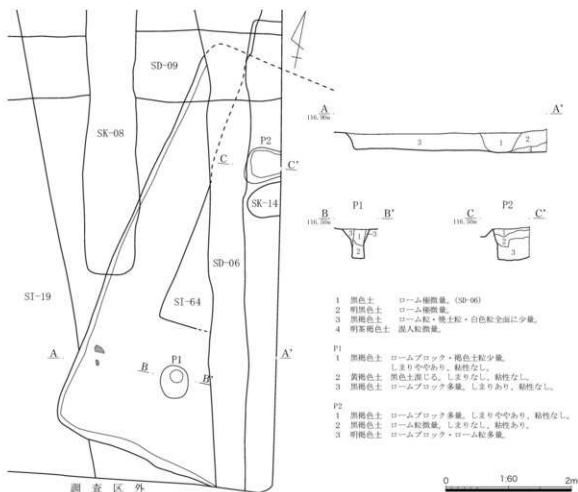
出土遺物は、調査範囲が狭いことと相反し、実測可能なものが7点出土している。その内訳は坏1、甕3、甕2に加え手捏ね土器1点がある。大半の残存率が低い中において、5の甕はほぼ完存に近い。甕類の内外面整形の主体はヘラケズリ及びヘラナデであるが、坏及び甕の内面にヘラミガキが施される。

第18号住居跡 (第10・11図, 図版7・8・21・28)

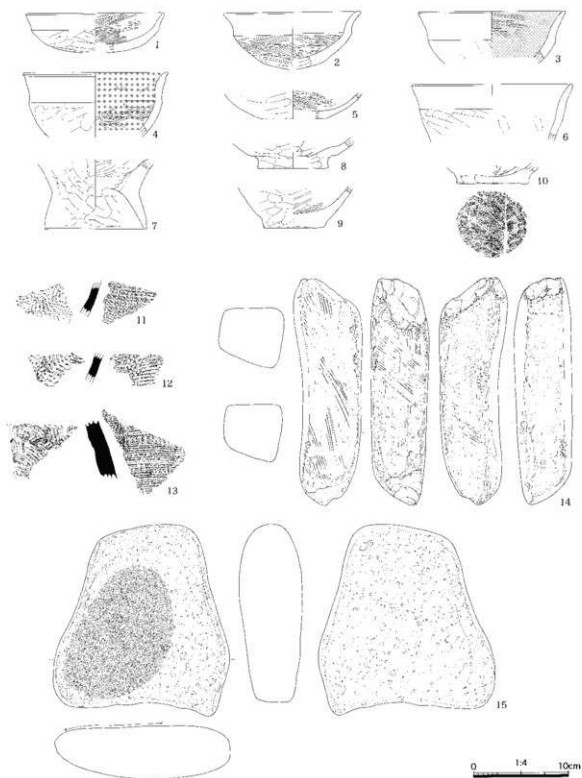
本住居跡は調査第Ⅱ区B地点内の南端に位置し、道路状遺構の西側側溝にあたる第6号溝跡や、中世以降に所属する第8号土坑・第14号土坑及び第9号溝跡に切られる。また、やはり調査範囲の狭さから住居跡の大半が東側の現果道直下に延びるため、その形状、規模及び細部の特徴等について不明確な部分が多々ある。西側では後述する第19号住居跡と重複関係にあるが、覆土の切り合いから本住居跡が後出することが明らかである。さらに、住居跡内部の床面上には僅かな掘り込みがあり、これと第9号溝跡北側にある壁が同一の遺構のものであることが判明した。本遺構が住居跡であると確信すると共に第64号と番号を付し、第19号住居跡と同様に本住居跡より以前に構築されたものと理解した。

本住居跡の平面形は、西壁及び南壁の形状から、コーナーがほぼ直角を呈す方形であると思われる。その規模については西壁を基に推定することも可能であるが、北側部分が第6号溝跡に切られるため、全長を明示することはできない。P1が南西部の柱穴に相当することは間違いのないと思われ、これとやや形状が異なるものの、P2についてもP1に対応する柱穴として問題ないであろう。P1と南壁間が1.4mであることをP2と北壁間にあてはめると、西壁長は約6.5mと推定することができることから、これを一辺として各コーナーが直角を呈する方形の形状であると理解できる。

確認面から床面までの深さは25～35cmで、壁はやや外傾気味に立ち上がり、さらに確認面付近で大きく外傾する。壁面からは緻密さや堅固な状況は窺えず、また側溝は認められない。



第10図 第18号住居跡実測図



第11図 第18号住居跡出土遺物実測図

床面についても、壁と同様に堅固な状況は認められないが、第64号住居跡と重複する箇所については、黒褐色土中に小石大のロームブロックを多量に混在させて貼り床を行っている。

P1は長径53cmの楕円形で、床面からの深さ44cm、断面形は漏斗状である。P2は長径約70cmの不整形で床面からの深さ51cm、断面形状はP1と異なり筒状を呈す。本住居跡の北壁については、第9号溝跡北側の第64号

第4表 第18号住居跡出土遺物観察表

() 上層定額 () 上残存額

No.	器種・器形	大きさ (cm)	形状	特徴	胎土	色調・焼成	残存率	備考
1	土師器 坪	口径: (14.5) 底径: - 器高: (14.2)	内: 口縁～斜位ヒガキ、体～底面放射状 横状ヒガキ 外: 口縁部コナテ、体～底面ケズリ 横ナテ	丸底で体部は浅い。口縁部は体部との 境に線をもち、わずかに外反して 開く。	白色細粒・褐色 胎土少量	内: 黒褐色 外: にぶい橙 ・黄	口縁～体部 1/6	覆土
2	土師器 坪	口径: (14.2) 底径: - 器高: (16.2)	内: 口縁部コナテ、体～底面ヒガキ 外: 口縁部コナテ、体部ヒガキ	丸底。口縁部は体部との境に線をもち、 微く外反して開く。	白色細粒・透明 胎土少量、黒ガ ラス胎土、白色 粘土胎土	内: にぶい黄褐色 外: にぶい橙 ・黄	口縁～体部 1/6	覆土
3	土師器 坪	口径: (15.3) 底径: - 器高: (15.5)	内: 口縁部傾位ヒガキ、体部調整不明 胎土 外: 口縁部コナテ、体部調整不明 胎土	丸底をもつ体部。口縁部は体部との境 に線をもち、口縁部は外反して開く。 内面黄色処理。	白色細粒・砂 胎土中量、黒ガ ラス胎土少量、 白色粘土胎土	内: 黒褐色 外: 赤褐色 ・黄	口縁～体部 1/10	覆土 体部内外面 摩耗顕著
4	土師器 坪	口径: (15.2) 底径: - 器高: (16.9)	内: 口縁部コナテ後ヒガキ、体部 不定方向ヒガキ 外: 口縁部コナテ、体部調整不明 胎土	体部は丸底をもつて立ち上がる。口 縁部は体部との境に線をもち、やや 直立気味に外反して開く。内面黄色 処理。	白色粘・砂粒 胎土	内: 黒 外: 橙 ・黄	口縁～体部 1/4	覆土 外面磨耗
5	土師器 坪小	口径: - 底径: (6.6) 器高: (2.6)	内: 体～底面不定方向ヒガキ 外: 体部ケズリ後ナテ、底面ナテ	平底で体部は丸底をもつて立ち上 がる。	透明粒・砂粒 胎土少量	内: にぶい橙 外: 黄 ・黄	体～底面傾 片	覆土
6	土師器 鉢小	口径: (16.8) 底径: - 器高: (16.0)	内: 口縁部コナテ、口縁部下位部 周りによる成形後コナテ、体部 コナテ	胴部のわずかに丸底を帯びて立ち上 がる。外面にわずかな線をもち、口 縁部は外反して開く。	白色細粒・白色 胎土少量、白色 粘土胎土	内: にぶい橙 外: にぶい黄褐色 破片	口縁～体部 1/5	覆土
7	土師器 台付甕	口径: - 台径: (10.6) 器高: (16.9)	内: 胴～台部ナテ 外: 胴部台部との境に側面傾位後ナ テ、台部ナテ	台部はハの字状にひろく、胴部下 端は直立気味にのびる。胴部は直線 的にのびる。	白色細粒・砂 胎土中量、黒ガ ラス胎土少量	内: 橙 外: にぶい黄褐色 ・黄	台部 1/5	覆土
8	土師器 甕	口径: - 底径: 7.4 器高: (2.7)	内: 体～底面ヘラナテ 外: 体部ナテ、底面ナテ	突出する平底の底面。胴部下端はや や外に開きながら立ち上がる。	白色細粒・黒 ガラス胎土、砂 粒胎土	内: 黒褐色 外: 橙 ・黄	胴部下～底 面破片	覆土
9	土師器 甕	口径: - 底径: 6.4 器高: (4.1)	内: 胴部ヘラナテ後底面立ち上がり 付込を中心ヒガキ、底面ケズリ後 ナテ・一部ヒガキ 外: 胴部ナテ、底面不定方向ケズリ 後側傾ケズリ	やや凹底で突出する底面。胴部はや や内湾する。	白色細粒・黒 ガラス胎土、砂 粒胎土少量、白 色粘土胎土	内: にぶい黄褐色 外: 黄 ・黄	底面存在、 胴部下 1/8	覆土
10	土師器 甕	口径: - 底径: 7.3 器高: (1.8)	内: 底面ヘラナテ 外: 胴部ナテ、底面木葉痕	突出する底面で、胴部はやや内湾す る。底面に木葉痕が残る。	白色粘・砂粒 胎土少量	内: にぶい黄褐色 外: にぶい黄褐色 ・黄	底面存在、 胴部にわず かに残存	覆土
11	直土器 甕	口径: - 底径: - 器高: (3.9)	内: 胴部同心円当て具痕 外: 胴部輻射状跡	ゆるやかな湾曲をもつ。	白色細粒・砂 胎土中量、白色 粘土胎土	内: 灰 外: 灰 ・黄	胴部破片	覆土 12と同一 個体
12	直土器 甕	口径: - 底径: - 器高: (2.9)	内: 胴部同心円当て具痕 外: 胴部輻射状跡	ほぼ直線的にのびる。	白色細粒・砂 胎土中量、白色 粘土胎土	内: 灰 外: 灰 ・黄	胴部破片	覆土 11と同一 個体
13	直土器 甕	口径: - 底径: - 器高: (16.1)	内: 胴部同心円当て具痕 外: 胴部平行明き	胴部はわずかに湾曲する。	白色細粒・砂 胎土中量、白色 粘土胎土	内: 灰 外: 灰 ・黄	胴部破片	覆土
14	石製品 砥石	長さ: 23.8 幅: 7.1 厚さ: 4.0 重量: 1.467	形状を呈し、上下両端は意図的に破 断。 側面形状は方形に近い台形状。	表面面、両側面及び下端に研磨痕が あり、中でも、弓状に湾曲する右側面 に顕著な研磨痕。 各面には龜裂状の平行する磨痕あり。 研磨対象物のものか。	石材は本日の細 かな貝質の属炭 質。古墳時代後 期の石臼磨出上 の砥石は最少。	完存	15と連続し、 覆土内表面 上より出土。	
15	石製品 砥石	長さ: 20.2 幅: 18.6 厚さ: 6.7 重量: 3.565	形状は比較的厚みのある「風」字状。 各面に自然面を有す。	表面の平行な擦痕に類門的な顕著な 研磨痕あり。 断面全体に茶褐色の色変色あり。変 熱によるものか。	石材は室山岩。	完存	14と連続し、 覆土内表面 上より出土。	

住居跡北壁内側に存在するものであり、P1及びP2はその位置関係から柱穴として問題なかろう。

出土遺物には実測可能な10点の土師器と、破片として掲載した須恵器3点、その他に砥石1点と片面に微かな研磨痕が認められる板状の石1点がある。土師器10点については1～5を壜形土器とした。2～4の3点は1と比較して器高が高く、中でも底部付近まで残る2は6.3cmを測る。4は口縁部外面に明確な線を携つものの、内面にヘラミガキが施されるため本器種の範囲とした。6～10については残存率が低く、また残存部位も限定されるため器種判定が難しいものもある。6は鉢形土器に、7は台付き甕形土器の底部であろう。また、8～10は甕形土器の底部破片であり、10の底面には木葉痕が見られる。3点の須恵器はすべて甕形土器の破片と思われる。器面に施された工具の一致から、11と12は同一個体であろう。14は側面のすべてに砥石として使用された研磨痕が顕著に残る。湾曲した状況は、かなり使用頻度が高かったことを窺わせる。

第19号住居跡 (第12・13図, 図版7・8・29)

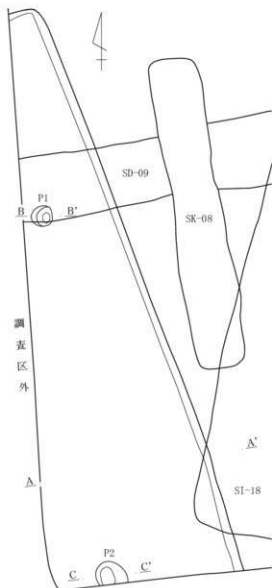
本住居跡は調査第Ⅱ区B地点内の南端に位置し、第18号住居跡及び第9号溝跡と重複する関係にある。中でも、第18号住居跡の南西コーナーと本住居跡の東壁とが僅かに切り合うが、その前後関係は覆土の堆積状況から本住居跡が前出するものである。また、第9号溝跡が切り合うが、本住居跡より後出する関係にある。

住居跡形状は、唯一発見された北東コーナーから、直角状を呈する方形と推定されるが、その規模については不明である。調査区内における東壁長は9.5mを測るものの、これより大型であることに間違いない。住居跡内部からはP1及びP2としたピットが発見されているが、これを柱穴として考えるには大型住居跡に対してあまりにも貧弱であり、さらに東壁に近接しすぎている。

確認面から床面までの深さは約40cmで、東壁及び北壁はほぼ垂直に立ち上がる。また、床面は平坦であるものの踏みしめられて硬化したような状況は窺えない。床面上の所々には、人頭ほどの焼土塊が散在するが、明確に焼失家屋と推察するほどの炭化材の出土は認められない。

覆土は東西方向の堆積土を示したに過ぎないが、自然埋没の状況を示していると言える。壁際よりロームブロックを含む黒褐色土の第3層が流入後、第2層が、そして白色粒を含む第1層が堆積する。

出土遺物は床面上より比較的残存率の高い土器類がまとまって出土しており、その内訳は土師器坏形土器5点、甕形土器2点、鉢及び甌形土器が各1点の計9点である。坏は口縁が丸味をもって立ち上がる1と2、体部に段をもって大きく開く3〜5がある。双方には内面に黒色処理されるものがあり、また内外面の整形方法はすべて同一である。9の甌は器高26cmを測る大型品で、残存率も高い。



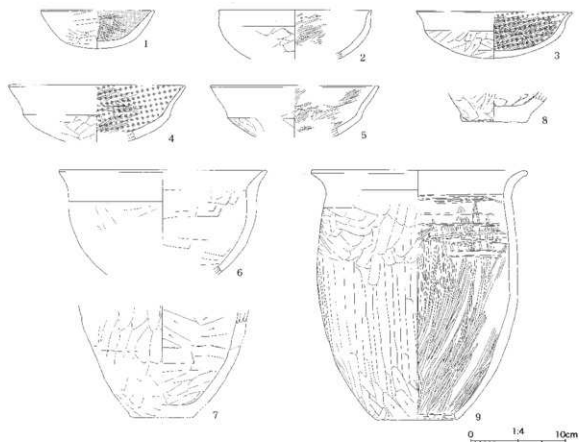
- 1 黒褐色土 褐色土粒・白色粒少量、しまりあり、粘性なし。
- 2 黒褐色土 ロームブロック(大豆大・小豆大)中量、しまりあり、粘性なし。
- 3 黒褐色土 ロームブロック少量、しまりあり、粘性ややあり。

- P1
- 1 黒褐色土 ローム粒少量、しまりなし、粘性あり。
- 2 黒褐色土 炭化物・ロームブロック少量、ローム粒中量、しまりややなし、粘性あり。

- P2
- 1 黒褐色土 炭化物・ロームブロック少量、ローム粒中量、しまりややなし、粘性あり。
- 2 黒褐色土 ロームブロック少量、しまりややあり、粘性あり。

0 1.60 2m

第12図 第19号住居跡実測図



第13図 第19号住居跡出土遺物実測図

第5表 第19号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	大きさ (cm)	整形	特徴	胎土	色調・焼成	(上層定価 1上現存額)	
							残存率	備考
1	土師器 杯	口径： 12.0 底径： - 器高： 4.1	内：口縁～底部ミガキ 外：口縁ケズリ後ナデ、体～底部 ケズリ	丸底で半球状。内面黒色地肌。	砂粒多量、白 色粒・赤色粒 ・貝	内：黒 外：にぶい黄	1/8	覆土
2	土師器 杯	口径： 15.9 底径： - 器高： 15.11	内：口縁～体部ミガキ 外：口縁部ココナデ、体部ケズリ	丸味をもつ体部。口縁部と体部の境 に横をもつ。口縁部はほぼ直立する。	砂粒少量。白 色粒・黒ガラ ス粒微量	内：にぶい赤褐色 外：にぶい橙 ・貝	1/8	覆土
3	土師器 杯	口径： 16.4 底径： - 器高： 4.9	内：口縁～底部ミガキ 外：口縁部ココナデ、体～底部ケズリ	丸底。浅めの体部で口縁部との境に 横がある。口縁部は外反して開く。 内面黒色地肌。	白色細粒（計 状割合含む） ・砂粒少量、白 色粒微量	内：黒 外：にぶい黄褐色 ・貝	口縁部一部 欠損	覆土
4	土師器 杯	口径： (18.0) 底径： - 器高： 15.9	内：口縁～底部ミガキ 外：口縁部ココナデ、体～底部ナデ	丸味をもつ体部。口縁部と体部の境 に横がある。口縁部は外反して開く が、上半はやや内湾する。内面黒色 地肌。	赤色粒・砂粒 少量	内：黒 外：にぶい黄 ・貝	1/5	覆土
5	土師器 杯	口径： (17.0) 底径： - 器高： 15.41	内：口縁～体部ミガキ 外：口縁部ココナデ、体部調整不明 部あり	丸味をもつ体部。口縁部と体部の境 に横をもつ。口縁部の下半は外反、 上半はまっすぐで閉じて開く。	砂粒少量	内：にぶい黄褐色 外：明黄褐色 ・貝	体部1/4、 口縁部わず かに残存	覆土 外面摩耗
6	土師器 鉢	口径： (21.0) 底径： - 器高： (11.0)	内：口縁部ココナデ、体部傾斜へう ナデ 外：口縁部ココナデ、胴部近側傾 斜。体部調整不明瞭なるもナデか	胴部丸味を帯びて立ち上がる。口縁 部はわずかに外反して開く。胴部内 面に明瞭な横をもつ。	白色細粒・黒 ガラス粒・砂 粒多量、白色 粒微量	内：黒褐色 外：赤褐色 ・貝	口縁部の平 かに残存、 体部1/5、 底面欠損	覆土 外面摩耗
7	土師器 甕	口径： - 底径： (6.8) 器高： 11.8	内：胴部下下ミガキナデ・下下下位 へうナデ。底部ナデ 外：胴～底部ナデ	平底で底部はわずかに突出する。口 縁部はほぼ直線上に立ち上がる。	白色細粒・砂 粒・小礫多量、 白色粒少量	内：黄褐色 外：橙 ・貝	胴下半～底 部1/2	覆土 胴部 内面上半・ 外面摩耗
8	土師器 甕	口径： - 底径： 6.9 器高： 23.0	内：胴部へうナデ、底部ケズリ 外：胴～底部ナデ	平底で突出する底部。胴部下端はわ ずかに丸味を帯びる。	白色粒・赤色 粒・黒ガラス 粒・砂粒多量 ・貝	内：にぶい黄褐色 外：黄褐色 ・貝	底面2/3 欠損	覆土
9	土師器 甕	口径： 22.0 底径： 8.3 器高： 26.4	内：口縁部ココナデ、体部傾斜状ミ ガキ後傾斜ミガキ 外：口縁部ココナデ、体部上半ナデ 中～下半傾斜ケズリ・下位傾斜ケズ リ一部ナデ、底部ケズリ	胴部はゆるやかな湾曲をもつ。胴部 で多少くびれる。口縁部はゆるやか なくの字状に折れ曲がり、外反して 開く。	白色粒（計状 割合含む）・黒 ガラス粒多量、 砂粒・小礫微 量	内：にぶい黄褐色 外：にぶい黄褐色 ・貝	口縁・胴部 1/4欠損	覆土

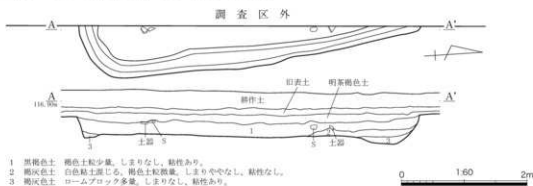
第22号住居跡 (第14・15図, 図版9)

本住居跡は調査第II区B地点内の南側に位置し、調査区内にて東壁と南東コーナーの一部を発見したに過ぎない。形状は南東コーナーが丸く湾曲しており、東壁北端においても僅かではあるが同様な形状の一部が見取れる。これにより東壁長を5.1m前後と理解することが可能であり、これを一辺とする隅丸形状の住居跡であると推定することができる。

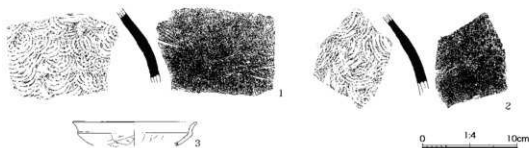
確認面から床面までは約30cmの深さを測り、壁は直線的に外傾して立ち上がる。壁直下にはおおよそ25cm幅の周溝が付随し、周溝内にはロームブロックを多量に含む褐色灰土とした第3層が堆積する。

住居跡内覆土は、褐色土粒子を少量含む黒褐色土の第1層が内部の大半を覆い、壁際に白色粘土や第1層に含まれる褐色土粒子を微量に含む褐色灰土の第2層が堆積する。

出土遺物は調査面積から想定できるように、大量の出土遺物を望むことは不可能であり、約10cm四方の須恵器破片2点と器形復元可能な土師器坏形土器1点の計3点である。1・2は共に灰色を呈し、内面に同心円文による工具痕が見られる。同一個体とも思われるが、若干文様が異なるようである。3は底部周辺に欠損する坏形土器である。口縁部は、体部との境に明瞭な段を有して大きく外反する。体部内外面にはそれぞれヘラナゲ及びヘラケズリが施され、ミガキは見られない。



第14図 第22号住居跡実測図



第15図 第22号住居跡出土遺物実測図

第6表 第22号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	大きさ (cm)	型形	特徴	土質			備考
					胎土	色調・焼成	残存率	
1	須恵器 盤	口径: -	内: 胴部同心円当て具痕 底径: -	胴部の湾曲強い。	白色細粒・砂 胎中級、白色 粘土質	内: 灰 外: 灰	胴部破片	
		底径: [7.7]						
2	須恵器 盤	口径: -	内: 胴部同心円当て具痕 底径: -	胴部片ゆるやかに湾曲する。	白色細粒・小 練少量、白色 粘土質	内: 灰 外: 灰	胴部破片	
		底径: [7.6]						
3	土師器 坏	口径: (13.0)	内: 口縁部コナゲ、体部ナゲ 底径: -	丸味をもって立ち上がる体部。口縁 部は体部との境に段をもち、強く外 反して開く。器厚薄い。	砕粒観察	内: 橙 外: 橙 ・黄	口縁~体 部破片	覆土
		底径: (2.5)						

第26号住居跡 (第16～18図, 図版10・11・21・29・31)

本住居跡は調査第Ⅱ区B地点内のほぼ中央に位置し、調査区内より磁北に対して主軸がおおよそ45度の角度で傾いた状態で発見されている。重複する遺構には、第23号～第25号土坑のほか第6号溝跡があり、出土遺物から第23号土坑は本住居跡と同じ古墳時代の遺構と考えて間違いないであろう。なお、本住居跡のカマド1や南東壁の一部を切ることから、後世に掘り込まれたことは明白である。また、これ以外の第24号・第25号土坑及び第6号溝跡についてもすべて後世のものである。

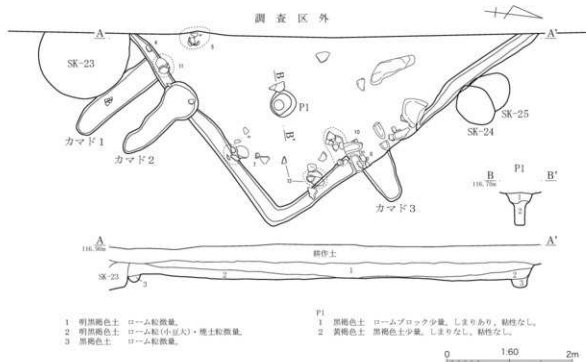
住居跡形状は、東コーナーが直角を呈し、これを構成する北東及び南東の壁は直線的に掘り込まれる。規模については、南東壁に構築された最も古いカマド1がその中心に位置すると考えると、壁長は6.2m前後と判断される。よって、住居跡全体の約1/3程度の調査が行われたに過ぎないが、各コーナーが直角を呈し、一辺約6.2mの方形の住居跡であろうと推定される。

確認面から床面まではおおよそ25cmの深さを測り、壁はやや外傾しながら幾分湾曲気味に立ち上がる。双方の壁面は平坦で、また直線的に掘り込まれる。

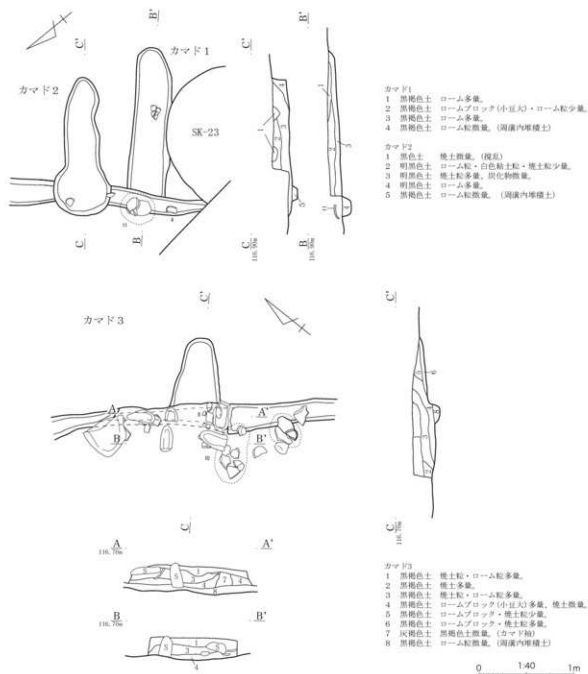
壁直下には幅13～25cm、床面からの深さ15cmほどの周溝が、カマド2及びカマド3の燃烧部を除いて全周し、内部にはローム粒を微量に含む黒褐色土の第3層が堆積する。カマド1の燃烧部には周溝が掘り込まれ、周溝上部からは11とした斐形土器が出土しており、3基確認されたカマドの構築順序のうえでは最も古いことが分かる。カマド2の燃烧部内においても周溝が確認できることから、最終的なカマド3を構築した際に、周溝を廻らした可能性も否定できない。

覆土は、周溝内を含め3層に区分することが可能で、平坦な堆積状況から自然埋没の状態を示していると言える。壁付近から住居跡中央部に向かって、小豆大のローム粒や焼土粒を微量に含む明黒褐色土の第2層が、その後やはりローム粒を微量に含む明黒褐色土の第1層が住居跡全体を覆う。

床面は極めて平坦で、カマド2及びカマド3の周辺では被熱により赤褐色への変化が窺われる。また、調



第16図 第26号住居跡実測図

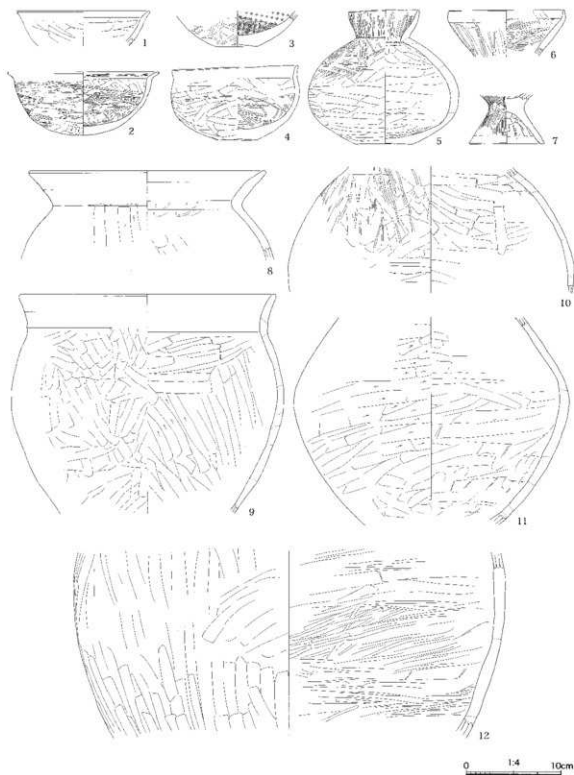


第17図 第26号住居跡カマド実測図

査区外との接点付近において、各壁周辺と比較してやや硬化した面を確認することができる。

P1は、一辺6.2mとして推定した住居跡形状から判断して、主柱穴と判断して間違いないであろう。形状は径約40cmのほぼ円形で、床面からの深さは50cm、断面は漏斗状を呈す。また、内部には住居跡覆土第2層と同様な第1層が開口部付近に、またロームが主体となってしまうりない黄褐色土の第2層が中位下半に堆積する。P1と南東壁間の距離は1.3mであり、これを想定される6.2mの規模に当てはめると、柱穴間の距離は3.5m前後であろう。

カマドについては、これまで上述したようにカマド1・2が南東壁に、カマド3が北東壁に作り付けられており、これらを時代順にすると1から2へ、そして最終的に3が作られていることは明らかである。



第18図 第26号住居跡出土遺物実測図

最も古いカマド1は、既に燃焼部及び袖部等が削平され、住居跡外に大きく突出する煙道部のみが残る。その大きさは壁より1.6mほど延びており、確認面からの掘り込みは14cmと比較的浅い。覆土は第1層から第3層まで区分することが可能であるが、各層には使用に伴う焼土粒の混入や、被熱による底面及び側壁の赤色化を認めることはできない。

第7表 第26号住居跡出土遺物観察表

(上: 測定値 下: 残存高)

No.	器種・器形	大きさ (cm)	整形	特徴	胎土	色調・焼成	残存率	備考
1	土師器 坪	口径: (14.0) 底径: - 器高: 13.0	内: 口縁部コナデ、体部ナデ 外: 口縁部コナデ、体部ケズリ	丸味を持った体部。体部と口縁部の境にわずかに稜をもち、口縁部は外傾して開く。内面に明瞭な稜あり。	白色顔料・砂粒 中量	内: 橙 外: 明赤褐色・黄	口縁→体部 上半1/3	覆土
2	土師器 坪	口径: 16.0 底径: - 器高: 6.7	内: 口縁部コナデ後傾位ミガキ、体部ケズリ、上半中心にナデ後ミガキ。底部ケズリ後ミガキ。 外: 口縁部コナデ、体部傾位ケズリ後傾位ミガキ。底部ケズリ後ミガキ	丸底。体部は半球状で、口縁部は短くくの字状に折れ曲がり、外傾して開く。内面に明瞭な稜あり。	白色顔料・砂粒・小礫多量、白色粒・小礫少量	内: 明赤褐色 外: 明赤褐色・黄	口縁→体部 下半1/3欠損	覆土
3	土師器 坪	口径: - 底径: 4.0 器高: 3.4	内: 体→底部中央方向ミガキ 外: 体部ナデ後ミガキ。底部門に沿ってケズリ後ナデ	上げ底状の底面。体部は丸味をもつて立ち上がる。底面付近の厚厚や厚め。内面凹色処理。	白色顔料中量、白色粒・黒ガラス粒・小礫少量	内: 黒 外: 赤褐色・黄	底面完全、下半内面露出	覆土
4	土師器 瓶	口径: 13.1 底径: 4.0 器高: 7.8	内: 口縁部コナデ、体→底部ナデ後不定方向ミガキ 外: 口縁部コナデ、体部ナデ・下半ケズリ→底ミガキ。底部ケズリ	平底。丸味を帯びた体部で、頸部でわずかにくびれる。口縁部は外傾して開く。	白色顔料(粉状物含む)・砂粒・中量	内: 明赤褐色 外: 明赤褐色・黄	口縁→体部 一部欠損	覆土
5	土師器 甕	口径: 7.2 底径: 5.8 器高: 14.2	内: 口縁部コナデ後傾位ミガキ、体部上位ナデ・中へ下傾ヘラナデ。底部ナデ 外: 口縁部コナデ後傾位ミガキ。体部下位傾ケズリ・中へ上位ナデ後ミガキ。底部ナデ	平底。やや扁平な球形状の胴部。口縁部は内湾しながら開く。	白色顔料中量、砂粒・小礫少量	内: ぶい橙 外: 橙	口縁→体部 完全、体部2/3	覆土
6	土師器 甕	口径: (12.0) 底径: - 器高: 15.1	内: 口縁部コナデ後一部ナデ。胴部傾位ミガキ 外: 口縁部コナデ、胴部傾位ナデ後傾位ミガキ	口縁部は直線的に外に開く。上部にわずかな稜を持ち直立する。	白色顔料・砂粒・小礫少量、白色粒少量	内: ぶい赤褐色 外: 青褐色	口縁→胴部 1/6	覆土
7	土師器 白付甕	口径: - 底径: (7.8) 器高: 15.2	内: 胴部ヘラナデ。右部ヘラナデ・下端コナデ 外: 胴部傾位ハケ後台座との境ナデ。台座部傾位ハケ・下端コナデ	台座はハの字状に開く。台座下縁は内面へわずかに折り返される。	白色顔料・砂粒少量	内: 橙 外: ぶい黄褐色・黄	台座2/3	
8	土師器 甕	口径: (24.8) 底径: - 器高: 19.4	内: 口縁部コナデ。胴→胴部上半コナデ。一部成形部は断面に傾斜する。胴部中位ナデ 外: 口縁部コナデ。胴部傾位ケズリ	球形状の胴部。口縁部はくの字状に折れ、外反丸味に開く。内面に稜あり。	白色顔料・黄色粒・砂粒・小礫中量	内: ぶい赤褐色 外: ぶい黄褐色・黄	口縁部1/6、胴1/2半平に欠損	カマド3
9	土師器 甕	口径: (27.0) 底径: - 器高: (13.5)	内: 口縁部コナデ。胴部上半傾位ヘラナデ・中位へ下半傾位ケズリ 外: 口縁部コナデ。胴部ナデ	胴部中に最大径をもつ。胴部に稜をもち、口縁部はわずかに外反して開く。	白色顔料・黄色粒・砂粒多量・黄	内: ぶい褐色 外: ぶい黄褐色・黄	1/5、底面全欠	覆土
10	土師器 甕	口径: - 底径: - 器高: (13.2)	内: 胴部傾位ヘラナデ 外: 胴部コナデ。胴部上半ナデ後傾位ミガキ・中位傾位ケズリ	球形状の胴部。胴部中に最大径をもつ。	白色顔料・砂粒多量、白色粒・小礫少量	内: 明赤褐色 外: 明赤褐色・黄	胴上半→中位1/4	カマド3・覆土
11	土師器 甕	口径: - 底径: - 器高: (21.9)	内: 胴部ヘラナデ・上半一部にナデ・下半粘土接合部に割断片痕 外: 胴部傾位→斜位ケズリ・下半ナデ	胴部中に最大径をもつ。胴部下はゆるやかな丸味をもつが、上半はやや稜的に立ち上がる。	白色顔料・黒ガラス中量、砂粒・小礫少量	内: 黄褐色 外: ぶい赤褐色・黄	胴部1/5	覆土
12	土師器 甕	口径: - 底径: - 器高: (19.5)	内: 胴部傾位ヘラナデ後傾位ミガキ 外: 胴部傾位ケズリ後斜位ナデ	大形。ゆるやかな湾曲をもつ胴部。口縁部は直線的に外に開く。	白色顔料多量、白色粒・砂粒・小礫少量	内: ぶい橙 外: ぶい橙	胴部中へ下位1/6	

カマド2はカマド1の東側に平行して構築される。周溝に切られるものの楕円状の燃焼部と、やはり壁外に1.15mほど突出する煙道部が特徴的である。煙道部の掘り込みは20cmで、内部には先端部からローム粒・白色粘土粒及び焼土粒を少量含む明黒色土の第2層や、これと色調が同一で焼土粒を多量に、また炭化物が微量みられる第3層が燃焼部分を含めて大きく堆積する。

カマド3は北東壁の東コーナーに寄った位置に構築され、その遺存状態は非常に良好である。袖には河原石が直立して並べられ、これを覆うように粘性に富んだロームにて補強される。カマド周辺には表面の一部が被熱により赤色化、ないしは黒色化した大型の河原石が散在するが、これらは間違いない袖及び天井部に用いられたものであろう。覆土内の各層には焼土粒が含まれ、また燃焼部及び煙道部の壁面が赤色化しており、使用頻度が高かったことが窺われる。

出土遺物は住居跡平面実測図からも明らかのように、発見された10軒の住居跡に最も多量で、その出土位置はカマド3内もしくはその周辺部に集中する。全体の形状や整形技法が明らかな2・4及び5の坪や坪形土器また全体形状が明確でないものの甕形土器には長胴状のものが含まれないなど、古墳時代中期の特徴を示す土器が多数を占める。

第46号住居跡 (第19図, 図版12)

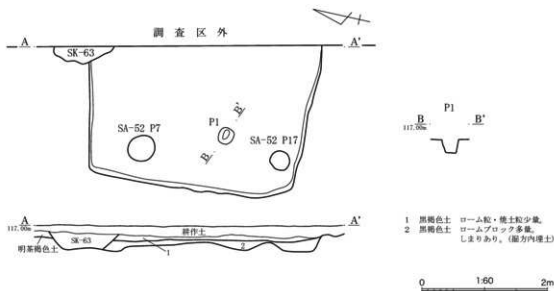
本住居跡は調査第Ⅱ区B地点内の北側に位置し、住居跡の約1/3は調査区外に延びる。重複する遺構には、北壁にて第63号土坑、また内部には第52号櫓列跡に伴うP7とP17が掘り込まれている。また、当該箇所周辺では以前に実施された耕地整理に伴う削平がローム面にまでおよび、遺構確認面がハードローム層に近いことよって、壁高の残りは非常に悪い。また、調査区との接点部分には後世の第6号溝跡が掘り込まれるため、さらに遺構の確認状況を悪化させている。

住居跡形状は完掘された西壁長をもとにすると、一辺3.2mの方形と考えられるものの、西壁と南及び北壁が作るそれぞれのコーナーがやや広角となっており、東側に向かって台形状に広がる形状となる。

壁高は確認面が低いことに伴って、西壁で6cm前後、南壁の東側部分では皆無に等しい箇所もある。各壁はほぼ直線的に掘り込まれるが、一部ではやや歪んだ曲線的な部分も存在する。壁高の低いことに伴い、確認された覆土も床面上に堆積した黒褐色土の第1層に限られる。

床面は、ロームブロックを多量に含む黒褐色土の第2層が貼り床として埋め戻されるが、やや凹凸があり、また意図的な硬化面を認めることはできない。床面には住居跡覆土第1層と類似するP1を発見しているが、これが柱穴として機能したものは不明である。住居跡内部には第52号櫓列跡を構成するピットが存在するが、これらの覆土とは明確に区別される。

出土遺物は、床面上より微細な土師器片が数点認められたが、実測図として掲載することはかなわなかった。土器片以外では、壁際周辺から炭化材が数点出土しており、大型なもの3点について樹種同定、そのうちの1点について放射性炭素年代測定（AMS測定法）分析を実施している。これらの結果については他の炭化材と共に附編に掲載している。



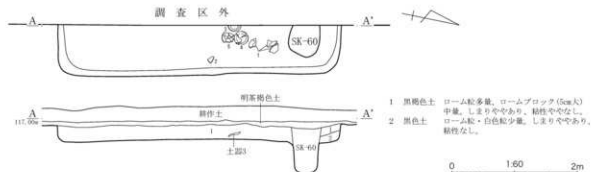
第19図 第46号住居跡実測図

第47号住居跡 (第20・21図, 図版13・29)

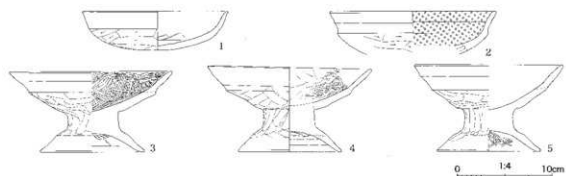
本住居跡は調査第Ⅱ区B地点内の北側に位置し、住居跡の大半は西側調査区外に延びると共に、北側内部には後世の第60号土坑が掘り込まれる。形状は、唯一完掘された東壁をもとに想定すると一辺が4.3mで、コーナーが丸味をもったやや隅丸方形と考えられる。確認面から床面までの深さは25cmほどで、壁は床面との接点で幾分湾曲気味に外傾し、それぞれは直線的に掘り込まれる。

床面は極めて平坦であるものの、踏みしめ等による硬化した状況は窺えない。なお、床面上からは溝溝や柱穴、またカマド等の付帯施設を確認することはできない。覆土は北壁部分に第2層が堆積する以外、ローム粒やロームブロックを多く含む黒褐色土の第1層が全面を覆う。

出土遺物は、狭小な調査範囲にもかかわらず実測可能な土師器坏形土器2点、高坏形土器3点の計5点が出土している。坏は共に口径16cm前後で、丸味の体部や口縁部が外傾して立ち上がるなどの点が類似する。さらにこの傾向は、3点の高坏にも認めることができる。口径・底径及び器高の各法量、また内外面の整形方法等の点が極めて近似する。



第20図 第47号住居跡実測図



第21図 第47号住居跡出土遺物実測図

第8表 第47号住居跡出土遺物観察表

No	器種・器形	大きさ(cm)	整形	特徴	胎土	色調・焼成	(土器定標) 土残存率		備考
							残存率	備考	
1	土師器 坏	口径: 15.8 底径: - 器高: 4.1	内:口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラナデ 外:口縁部ヨコナデ、体~底部ケズリ	丸底で半球状。口縁部は上半が外反して開く。	白色粒・黒ガラス粒・砂粒多数、赤色粒・褐色粒散見	内:にぶい黄褐色 外:にぶい黄褐色・やや不良	ほぼ定形、口縁部一部欠損		
2	土師器 坏	口径: 17.2 底径: - 器高: 4.5	内:口縁~体部ヨコナデ 外:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	体部は丸味を帯び、口縁部との境に線をもち、口縁部は外反して開く。内面黒色処理。	白色粒・黒ガラス粒・赤色粒・褐色粒散見	内:黒ガラス粒・砂粒中量、白色粒・褐色粒散見	外:にぶい黄褐色・良	口縁~体部1/4程度欠損	
3	土師器 高坏	口径: 17.1 底径: 11.0 器高: 8.5	内:口縁~体部ミガキ、脚部ヘラナデ 外:口縁部ヨコナデ、体部ナデ、脚部ナデ、基部ヨコナデ	坏部は口縁部と体部の境に線をもち、口縁部は外反して開く。脚部は短く、基部は外反して開き、上半に線をもち、	砂粒少量、白色粒・赤色粒散見	内:褐灰 外:褐灰・良	口縁~体部1/4程度欠損		
4	土師器 高坏	口径: 17.2 底径: 10.7 器高: 9.6	内:口縁~底部ナデミガキ、脚部ヘラナデ・ヨコナデ 外:口縁部ヨコナデ、体部ナデ、脚部ナデ、基部ヨコナデ、脚部下半ヨコナデ	口縁部は外反して開き、体部との境に線をもち、脚部は短く、基部は上半に線をもち、外反して開く。	白色細粒(針状物含む)、砂粒中量、白色粒散見	内:にぶい黄褐色 外:にぶい黄褐色・良	口縁~体部一部欠損		
5	土師器 高坏	口径: 15.4 底径: 10.7 器高: 9.1	内:口縁~体部調整不明瞭、底部上半ヘラナデ、下部ヨコナデミガキ 外:口縁部ヨコナデ、体部調整ナデ、脚部調整ナデ、基部ヨコナデ後半ナデ	坏部は外反して開き、口縁部と体部の境に線をもち、脚部は短く、基部上半に線をもち、外反して開く。坏部の歪み顕著。	白色細粒(針状物含む)、黒ガラス粒・砂粒中量、白色粒散見	内:褐灰 外:褐灰・良	脚~基部一部欠損 口縁~体部内面鈍頭溝		

第64号住居跡 (第22図, 図版14)

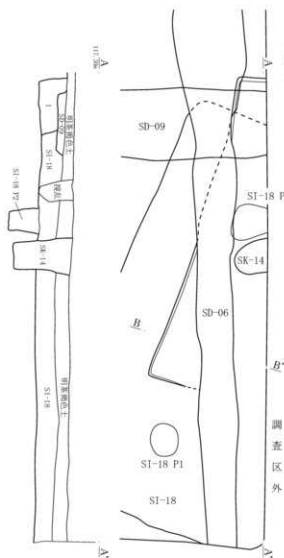
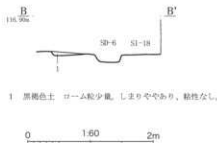
本住居跡は調査第Ⅱ区B地点内の南端に位置し、全体が第18号住居跡と重複する関係にあるばかりか、後世の第6号及び第9号溝跡に切れられ、さらに住居跡の大半が東側の調査区域外に延びる。そのため唯一明らかな西壁と、僅かに発見された北壁及び南壁より全体形状等について推定しなければならない。

形状は、西壁とこれに直行する僅かな北側及び南壁からの推定が可能である。これを基にすると南北双方のコーナーが直角を呈す一辺約5mの方形であることが分かる。

壁高は切り合いのない北壁部分で45cm、それ以外では第18号住居跡の削平を受けるため僅か数cmに過ぎない。北壁の立ち上がりは明瞭で、やや外傾気味となって直線的である。

床面についても、その大半は第18号住居跡に削平されるものの、第6号溝跡西側及び第9号溝跡底面から北壁にかけて部分的に残る。僅かな範囲であるが、やや凹凸がみられ貼り床は施されない。北壁周辺では切り合いが無いため、確認面から床面までの堆積土が存在するが、分層が不可能なローム粒を含む黒褐色土の第1層を確認したに過ぎない。通常、壁際には壁の崩落土となるロームを多く含む黄褐色土の存在が一般的であるが、本住居跡では確認することはできなかった。なお、僅かに壁が残る西壁においても同様な第1層のみの堆積が確認できる。

本住居跡の出土遺物として確認できたものは皆無である。このことについては、調査の手順として、後世の遺構から調査する方法を遵守し、先ず第9号溝跡、次いで第6号溝跡の順に調査し、最後に第18号住居跡を完掘した。この時点で第18号住居跡の西壁と、第9号溝跡北側の北壁が同一のものであると認識していたが、第18号住居跡床面精査の際に西壁を確認し、本住居跡の存在を認識することとなった。遺構の前後関係に誤りはないと思われるが、僅かに残る本住居跡覆土内遺物を、第18号住居跡遺物として取り上げた可能性も否定できない。第18号住居跡遺物を検討すると、器形や調整から大きな時間幅を認めることはできないであろう。



第22図 第64号住居跡実測図

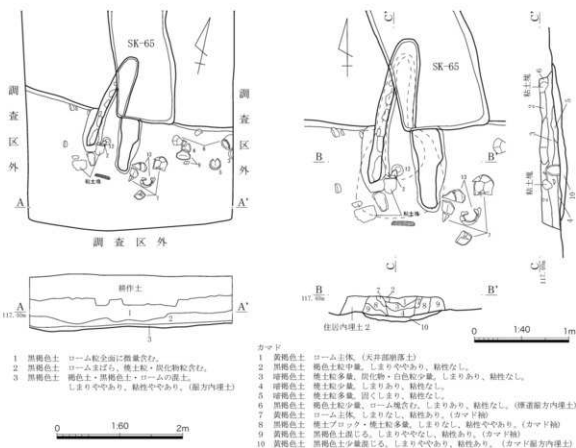
第66号住居跡 (第23・24図, 図版15・16・29-31)

本住居跡は調査第Ⅲ区内の南端に位置し、約3.5m幅の調査区中央部より北壁に構築されたカマドが発見された以外、住居跡の大半は調査区域外に延びる。重複する遺構には、カマド煙道部の一部を切るように北側から延びる長方形の第65号土坑がある。調査区内より完掘された壁及びコーナ部が未検出であるため、住居跡形状や規模についてはまったく不明である。唯一、全体形状が明らかなカマドについては、その主軸が調査区に対して南西方向に傾くが、本来この方向は磁北の向きと一致している。なお、北壁はこのカマドの主軸に直行して掘り込まれるため、調査区内ではやや南東方向に傾斜した状態となる。

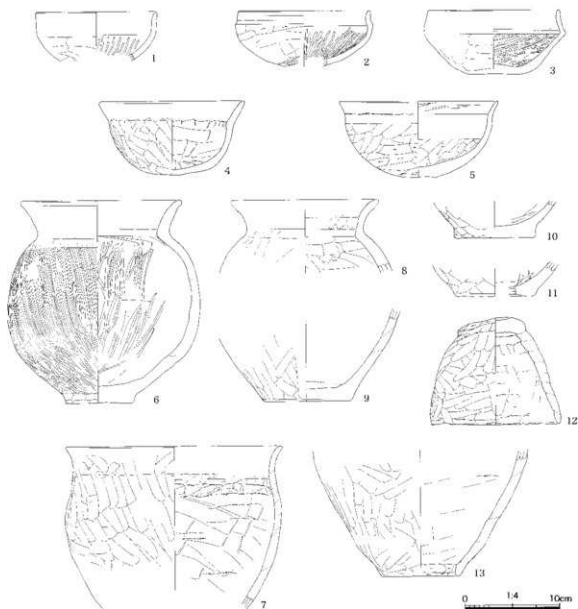
確認面からの深さは、調査区域外との接点部において耕作土直下に覆土第1層が確認することができ、これに第2層及び第3層を含めると45cmほどになる。北壁の高さは20cm前後で、ほぼ垂直に立ち上がり、また直線的に掘り込まれる。

覆土は、住居跡中央部付近の堆積を示しているに過ぎないため、壁周辺の状況については不明である。住居跡内覆土は、床面上にややレンズ状に堆積する第2層と、上面に耕作に伴う不整合な箇所が存在し、ほぼ平坦に堆積する第1層からなる。第1層は全体にローム粒を微量含む黒褐色土、第2層も第1層と色調の区分が難しい黒褐色土で、ロームを疎らに、焼土粒・炭化物粒を少量含む。共に粘性があり、ややしまった状態を示す。

床面は全体的に平坦かつ緻密で、堅固な状態を示している。特に、カマド周辺では部分的に焼土化した箇所や、炭化材及び焼土の出土も認められる。床は褐色土・黒褐色土及びロームを含む黒褐色土を用いて、掘方より5cmほど貼り床がなされる。



第23図 第66号住居跡・カマド実測図



第24図 第66号住居跡出土遺物実測図

カマドは、煙道部分が第65号土坑に切られるものの住居跡の掘り込みが深いこと、また確認面が比較的高位であることも手伝って遺存状況が非常に良い。先ず、袖部では、右袖が北壁より住居跡内部に80cmほど直線的に延びる。また、左袖では写真図版からも明らかのように、燃焼部から袖先端にかけての内側に方形のブロック状の粘土塊が連続的に並べられ、あたかも煉瓦窯と同様な状況が窺える。双方の袖は内側よりロームや粘土等が主体となる第7層、第8層そして第9層の順で構成され、被熱により硬化し、特に内側は赤褐色に変化している。天井部は遺存状況が良いこともあって、ローム主体の第1層及び第2層が良好な状態で残る。内部に堆積する第3層及び第4層には焼土粒が含まれ、特に第3層中では焼土粒が量的に多く、炭化物粒や粘土と思われる白色粒も見られる。燃焼部の掘り込みは浅く、その深さは床面より僅か6cmほどである。前述した第3層や第4層と比較して焼土粒は少なく、底面の被熱化もさほどではない。燃焼部の中央部や住居跡側には、釣鐘状を呈した土製支脚が使用時の状態で残る。煙道部は壁外に「U」字状を呈して1mほど大きく突出し、その内側は被熱により赤褐色化している。

第9表 第66号住居跡出土遺物観察表

(土器定額 1上残存額)

No.	器種・器形	大きさ(cm)	整形	特徴	胎土	色調・焼成	残存率	備考
1	土師器 杯	口径: 112.0 底径: - 器高: 15.21	内:口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ 後放射状ミガキ	口縁部と体部の境の線は不明瞭。口縁部はまっすぐ立ち上がる。	白色粒・黒ガラス粒中量、小砂少量	内:明赤褐色・赤 外:にぶい赤褐色・赤	口縁→体部 1/8	カマド内
2	土師器 杯	口径: 13.8 底径: - 器高: 5.9	内:口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ 後放射状ミガキ	口縁部は体部との境に線をもち、直立気味に立ち上がる。	白色細粒・黒ガラス粒中量、砂粒・小砂少量、白色粘散粒	内:明赤褐色・赤 外:明赤褐色・赤	口縁→体部 1/4	カマド内
3	土師器 杯	口径: 13.5 底径: 5.3 器高: 6.8	内:口縁部ヨコナデ、体→底部ミガキ	底部の立ち上がりが丸味をおび、底部と体部の境が不明瞭で、口縁部は体部との境に線をもち長く内傾する。内面に線あり。底部厚い。	白色粒・黒ガラス粒中量、赤褐色・赤、褐色粒・小砂少量	内:にぶい黄褐色・赤 外:にぶい黄褐色・赤	完形	体→底部外面摩耗
4	土師器 碗	口径: 15.1 底径: 7.8 器高: -	内:口縁部ヨコナデ、体→底部ヘラナデ 外:口縁部ヨコナデ、体→底部ケズリ	丸底で体部は半球状。口縁部は外反して開く。内面に明瞭な線あり。外外面ス付着。	白色粒・黒ガラス粒・砂粒・赤褐色	内:にぶい黄褐色・赤 外:褐色	ほぼ完形	覆土
5	土師器 碗	口径: 16.5 底径: 6.5 器高: 8.0	内:口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部上半ヨコナデ下半ナデ。底面半円形成ナデ 外:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ後上半ナデ。底部ケズリ後ナデで整理によりわずかな亀裂を平式とする。	平底。半球状の体部で口縁部は外反する。内面に明瞭な線あり。体部上半外面・胴→体部中位ス付着。	砂粒・小砂多量、白色細粒・赤褐色・黒ガラス粒中量	内:褐色 外:褐色・赤・赤褐色	口縁部一部欠損	
6	土師器 甕	口径: 16.7 底径: 7.1 器高: 21.4	内:口縁部ヨコナデ、胴→底部ヘラナデ 外:口縁部ヨコナデ、胴部縦線ハケ下ミガキ・下端線タ取りに近いナデ。底部ケズリ後ナデ	底部は平底で突出する。胴部は球状で中位に最大径をもつ。口縁部は「く」字状に開く。内面に線あり。	砂粒・小砂多量、白色細粒・赤褐色・黒ガラス粒中量、白色粒・赤褐色散粒	内:褐色 外:褐色	ほぼ完形	内面一部調整
7	土師器 甕	口径: 22.7 底径: 117.31	内:口縁部ヨコナデ、胴部断面土直ナデ、胴部ヘラナデ 外:口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	胴部はゆるくふくらみ、胴部でおむかひにげられる。口縁部は外反して開く。胴部下外面ス付着。	白色粒・黒ガラス粒・砂粒中量、小砂少量	内:にぶい褐色 外:にぶい褐色	口縁→胴中位3/4	カマド・覆土
8	土師器 甕	口径: 15.2 底径: 7.0 器高: -	内:口縁部ヨコナデ、一部断面内傾ナデ 外:口縁部ヨコナデ、胴部と胴部の境線ナデ。胴部調整不明瞭なるも縦→斜位ナデか	胴部球状。胴部は外反し、口縁部は平内傾して開く。内面に線あり。	白色細粒・黒ガラス粒・砂粒多量、白色粒・小砂少量	内:にぶい黄褐色・赤 外:にぶい黄褐色・赤	1/8	口縁→胴部外面調整、胴部外面孔れ
9	土師器 甕	口径: - 底径: 8.8 器高: 19.0	内:胴→底部調整不明瞭 外:胴部ナデ。底部調整不明瞭なるもナデか	底部中心の凹む。	白色細粒・砂粒・小砂多量、赤褐色粒少量、白色粒・赤褐色散粒	内:にぶい褐色 外:にぶい黄褐色	底部完形	内外面摩耗
10	土師器 甕	口径: - 底径: 8.2 器高: 14.31	内:胴→底部調整不明瞭なるもナデか 外:胴部ナデ	突出する平底。胴部はやや丸味をもっており立ち上がる。	白色粒・黒ガラス粒・砂粒中量	内:明赤褐色・赤 外:にぶい黄褐色・赤	底部1/3	カマド袖内面残れ
11	土師器 甕	口径: - 底径: 7.8 器高: 13.31	内:胴→底部ヘラナデ 外:胴→底部ナデ	円底でやや丸味をもっており立ち上がる。	黒ガラス粒・砂粒中量	内:灰青褐色 外:にぶい黄褐色	底部1/3	覆土
12	土師器 土製文甕	口径: 7.0 底径: 13.3 器高: 11.4	内:調整不明瞭なるもヨコナデ・ナデか 外:胴部中心ケズリ後ナデにより平明線を作り端線ケズリ。胴部ナデ	内面粘土接合痕が顕著に残る。特に内面が赤色(滑料系の赤色)。特に胴部に顕著。	白色粒・砂粒中量	内:褐色 外:にぶい褐色	完形	カマド内
13	土師器 甕	口径: - 底径: 8.0 器高: 13.4	内:胴部調整不明瞭なるもヘラナデか。底部ケズリ 外:胴部ナデ	底部からゆるやかに広がりながら立ち上がる。	黒色粒多量、白色細粒・砂粒中量、赤褐色粒少量、白色粒・赤褐色散粒	内:にぶい黄褐色 外:にぶい褐色	底部完形	覆土 胴部一部摩耗

出土遺物はカマドが発見されていることもあって、右袖周辺や内面から出土の支脚1点を含め13点の出土がある。その内訳は土師器杯形土器3点と、これらより器高があり口縁が開く埴形土器2点、甕形土器6点、甕形土器1点である。1～3の杯は、口径13cm前後、器高は6～7cmである。口縁部は体部との境線からやや内傾して立ち上がり、内面には丁寧なヘラミガキが施される。4・5の埴はこれらよりも大型で、口縁が大きく外反し、体部外面はヘラケズリ及びヘラナデによって整形される。甕において全体が明確なもののは6の1点に限られるが、口縁が残る7・8を含めてその特徴をみると、「く」字状に外反して端部は玉状となる。体部整形は7・8がヘラケズリ及びヘラナデが行われることに對し、6の外面上半にハケ、下半と内面にヘラミガキが施される点が大きく異なる。

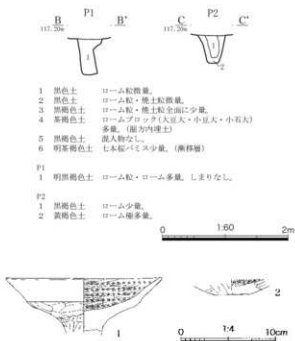
第80号住居跡 (第25・26図, 図版17・30)

本住居跡は調査Ⅲ区内中央部に位置し、西壁の長さが6.7mを測ることから、これを一边とするやや四角方形気味の方角を呈するとと思われる。となると、全体の約3/4が東側の調査区外に延びることになり、さらに西壁では、後出する第78号及び第79号土坑に切られるため一部不明確な箇所がある。

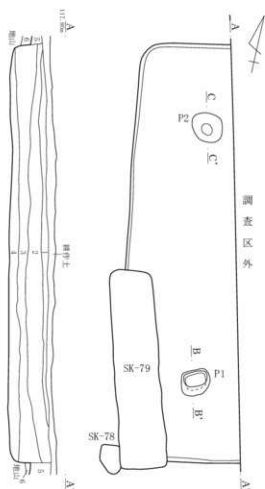
確認面からの深さは20cmほどであるが、調査区との接点部では耕作土直下から40cmの深さを確認できる。壁高は20～25cmで、各壁とも直線的に掘り込まれ、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は、ロームブロックを多量に含む茶褐色土の第4層を貼り床とし、極めて平坦に作られるものの硬化面は認められない。覆土は3層に区分することが可能で、各層は平坦な堆積を示すことから自然埋没と判断される。

柱穴には位置関係からP1とP2が相当するが、西壁との距離が1.2m前後であり、壁に近接した位置に掘り込まれた感じを受ける。共に径50cm前後の楕円形で、深さはP1が55cm、P2が45cmである。P2では柱底が明瞭に残る。柱穴間の距離は4mである。

出土遺物は少なく、北西コーナー付近出土の土師器高坏形土器の1と、2の覆土中出土の土師器坏形土器の底部以外は皆無である。内面はヘラミガキの後に黒色処理、また外面は坏部下半から脚部にヘラケズリが施される。法量において、第47号住居跡出土のものと同近似する。



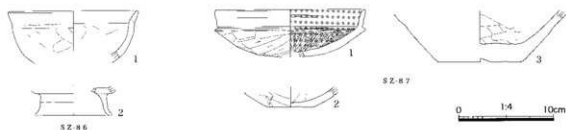
第26図 第80号住居跡出土遺物実測図



第25図 第80号住居跡実測図

第10表 第80号住居跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	大きさ (cm)	器形	特徴	胎土	色調・焼成	残存率	備考
1	土師器 高坏	口径: (16.2) 底径: - 部高: [5.7]	内: 口縁～体部ミダキ 外: 口縁部コナナギ, 体部ナギ, 脚部底縁ナギ	坏部は外側に横があり、口縁部は直線的に開く。坏部内面黒色処理。	内: 黒 外: にぶい黄褐色 粒・砂粒少	内: 黒 外: にぶい黄褐色 粒・砂粒少	坏部1/5 脚部ほぼ平方に残存	
2	土師器 坏	口径: - 底径: (3.8) 部高: [1.1]	内: 体～底部ミダキ 外: 体部ナギ, 底部ナギ	若干四角平底。体部は中や外側に開く。内面黒色処理。	白色細粒・白色粒・砂粒少 黒	内: 黒 外: 粒・黄	体～底部破 片	覆土



第28図 第86号・第87号方形周溝遺構出土遺物実測図

第11表 第86号方形周溝遺構出土遺物観察表

No.	器種・器形	大きさ (cm)	整形	特徴	胎土	色調・焼成	残存率	（上層定額 上残存額）	
								備考	
1	土師器 杯	口径：(13.0) 底径：- 器高：(5.0)	内：口縁部コナナ、体部調整不明 外：口縁部コナナ、体部調整不明	丸味を帯びる体部で口縁部は直線的に外に開く。口縁部内面に焼あり。外面粘土接合痕あり。	砕粒少量	内：橙 外：橙	1/3	口縁～体部 蓋土 体部内外面 磨耗顯著	
2	土師器 高台付杯	口径：- 底径：(8.1) 器高：(2.0)	内：高台部クロコナナ 外：高台部クロコナナ	高台部はハの字状に開き、下端が外反する。	白色粒・赤色細粒・黒色粒少量	内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙・黄	高台部1/4	蓋土	

第12表 第87号方形周溝遺構出土遺物観察表

No.	器種・器形	大きさ (cm)	整形	特徴	胎土	色調・焼成	残存率	（上層定額 上残存額）	
								備考	
1	土師器 杯	口径：(15.0) 底径：- 器高：(4.9)	内：口縁部コナナ後傾位ミガキ、体部中位傾位ミガキ後放射状ミガキ 口縁部と体部の傾斜位ミガキ 外：口縁部コナナ、体部ケズリ後口縁部の境を中心にナズ	丸底で口縁部と体部の境に境をもつ。口縁部は直線的でやや外に開く。内面黒色焼成。	白色細粒少量、砕粒・小礫少量、白色粒少量	内：黄 外：にぶい黄・黄	口縁部1/6 体部1/2	口縁部摩耗	
2	土師器 壺	口径：- 底径：(4.7) 器高：1.6	内：胴～底部ナズ 外：胴部ケズリ後ナズ、底部ケズリナズ	平底。底面節厚肉。内面黒色赤色の赤色。	黒ガラス粒少量、白色粒・砕粒少量	内：暗赤褐 外：褐灰・黄	胴～底部	蓋土	
3	土師器 壺	口径：- 底径：(8.8) 器高：(5.1)	内：胴～底部ナズ 外：調整不明	平底で直線的に立ち上がる。	黒色粒・砕粒・小礫中量、白色細粒・褐色粒少量、白色粒少量	内：にぶい黄橙 外：褐灰・黄	底部2/3、胴下部1/8	蓋土 外面摩耗・調整顯著	

ける形状は方形というより六角形を半載したものに近い。調査区内最大長は西側の調査区外接点部分で7.6m、東側周溝直線部分で約5mほどである。

確認面における周溝の幅は最大となるA-A'において2.16m、最小で55cm、深さは10～35cmである。断面形は深い箇所が鍋底状、浅い部分では舟底状である。北側部分では周溝が直線的に内側に入り込む箇所があるが、この部分については写真図版でも明示しているように、確認作業時に同一の遺構であることを覆土の堆積状態より確認している。A-A'の土層堆積では第1層から第3層までの区分があるが、これほど明瞭に区分できる状態ではなかったことを付け加えておく。

覆土については3箇所にて断面観察を行っており、すべてにおいて明褐色土の第1層が上半部分を覆い、その下位から底面部分に黒褐色土の第2層が堆積するなど同様な状況を示している。第2層や第3層中には白色粒子が認められるが、火山灰の可能性もある。浅間山供給のFPの可能性もあるが、距離及び方向的にどうであろうか。今市バミスの降灰もあり、混在したものを認めているとも考えられる。

出土遺物は僅少かつ少量で、30%ほどの残存率である坏形土器1点の他に、混在した平安時代の坏形土器の高脚高台部分がある。

第87号方形周溝遺構 (第27・28図, 図版5・18・23・30)

本遺構は、先の第86号周溝遺構の南東コーナー付近にて重複する関係にあり、重複箇所における断面観察より後出する遺構であることが明らかとなっている。形状は「S」字状に屈曲するものの、重複箇所を第86

号の拡張もしくは形状変化とすると、密接な関係にあると判断できる。やはり、調査区域の狭小が混雑を大きくしている。掲載可能な出土遺物は3点あり、中でも坏形土器の1は残存率が高く、形状が明瞭に把握できる。体部は丸味をもって立ち上がり、口縁部は明瞭な稜より直線的に外傾する。内面には丁寧なヘラミガキが施され、黒色処理がなされる。周溝の幅や深さ等の形状、また内部に堆積した覆土の状況、さらに出土遺物の時期など、あらゆる点で第86号と類似する。

3. 土坑

遺跡内からは63基の土坑が出土しているが、当時期に所属するものは第20号及び第23号とした僅かに2基である。第23号土坑については出土土器から、また第20号土坑は古代に掘り込まれた第6号溝跡に切られることからその理由とした。

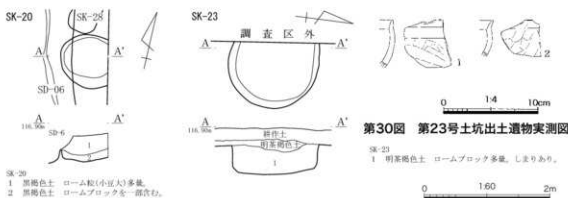
第20号土坑 (第29図, 図版21・24)

本土坑は調査Ⅱ区B南側に位置し、西側が第6号溝跡に切られると共にその一部が調査区外に延びる。形状は南北85cm、東西は推定で約1.1mの楕円形で、確認面からの深さは40cmである。底面はやや鍋底状、壁は北側でほぼ垂直に、南側では外傾気味に立ち上がる。覆土は平坦に堆積する第1層と第2層に区分され、共にローム粒やロームブロックを含む黒褐色土である。出土遺物はない。

第23号土坑 (第29・30図, 図版24)

本土坑は調査Ⅱ区B地点の中央部にて、第26号住居跡の南側に近接して位置する。一部が調査区外に延びるものの、径1.5m前後の円形と推定される。確認面からの深さは45cmほどで、断面形は底面周辺がやや湾曲状を呈し、壁がほぼ垂直に立ち上がる鍋底形である。

覆土は、分層不可能なロームブロックを多量に含む明茶褐色土の1層で、非常にしまりのある特徴を有している。出土遺物は貧弱で、大型破片は無いものの実測可能な土師器坏形土器2点がある。共に球状の体部から外傾する口縁部の先端が尖る。この2点以外にも土師器小片が十数点出土しているが、後世の遺物は含まれていない。



第29図 第20号・第23号土坑実測図

第13表 第23号土坑出土遺物観察表

No.	器種・器形	大きさ (cm)	形状	特徴	胎土	色調・焼成	() 上: 鑑定値 () 上: 残存値	
							残存率	備考
1	土師器 坏	口径: - 底径: - 高さ: [5.0]	内: 口縁部コナデ、体部ナデ 外: 口縁部コナデ、体部ナデ	体部は丸味を帯びる。口縁部と体部の境は明瞭な稜をもたないが、わずかにくびれる。口縁部はわずかに外傾する。内面に明瞭な稜あり。	白色粒・砂粒 微量	内: 明赤褐色 外: 橙 ・ 黄	口縁→体部 破片	覆土
2	土師器 坏	口径: - 底径: - 高さ: [3.8]	内: 口縁部コナデ、体部ナデ 外: 口縁部コナデ、体部ナデ	体部は丸味を帯びる。口縁部と体部の境がわずかにくびれる。口縁部は若干外反して開く。内面に稜があるが、不明瞭。	砂粒少量	内: 橙 外: にぶい黄緑 ・ 黄	口縁→体部 破片	覆土

第3節 奈良・平安時代

発見されたすべての住居跡10軒と、その他では2基の方形周溝遺構、そして2基の土坑については、前述したように出土遺物や切り合い関係から古墳時代後期に所属するものとして理解できた。これら以外にはやはり土坑・溝跡及び井戸跡などの遺構が発見されており、構築時期としては奈良・平安時代や中世、さらに時期不明のものも多数ある。奈良・平安時代に所属する遺構には、溝跡・掘立柱建物跡・欄列跡・井戸跡及び土坑等があり、これらについては出土遺物や切り合い関係により決定している。しかし、一部には不確かな遺構も存在することを付け加えておく。

1. 溝跡

調査区内からは大小あわせ8条の溝跡が発見されており、所属する時代は奈良・平安時代や中世、さらに近現代までのものも明らかに含まれる。ここでは、出土遺物から確実に奈良・平安時代に所属する第5号及び第6号溝跡について記載する。中でも第6号溝跡については、都合2回の掘り返しが行われ、最終段階にはかわりけの出土も認められており、中世まで引き続き使用されていたと考えて間違いないであろう。

第5号溝跡 (第31・33図, 図版19・20・30)

本溝跡は、県道東側に設定した調査第Ⅰ区内B地点より発見されたものである。本調査区南側にはA地点が僅かな間隔を置いて設定されているが、当調査区は既に耕地整理に伴う削平が行われており、本来B地点から続くと思われる溝跡は存在しない。

第5号溝跡は幅僅か3mほどの狭小な調査区内に、見事なまでに収まった状態で発見された。溝跡は調査区が狭いために外側に延びる箇所もあるが、中央部付近では東西双方の立ち上がりが判明しているため、およその形状や規模を理解することが可能である。溝幅が明確なC-C'では95cmの幅があり、確認面からの深さは25cmほどである。これに対し最も北側のB-B'ではその幅について不明であるが、底面までの深さが65cmと非常に深い。

覆土はB-B'地点が非常に良好な状態である。第1層から第3層に区分され、それぞれが掘り返しを示しているとも考えられるが、C-C'やD-D'では第3層の堆積が認められないことから、B-B'に限って底面に堆積した第1次堆積土と捉えることも可能である。そうなると、掘り返しは2回であると想定可能である。溝跡内からは残存率が悪いものの出土遺物は意外に多く、須恵器坏高台部分や短頸壺の頸部、また内面黒色処理された土師器坏がある。

第6号溝跡 (第32・33図, 図版7・10・20-22・24・25・30)

本溝跡は先の第5号溝跡に平行するように、県道西側に設定した調査Ⅱ区B地点より、長さ約49mにわたって発見されている。距離があるため重複する遺構も多いが、前後関係を捉えながら調査を進めたため、比較的に理解することができる。

先ず第6号溝跡の最大幅であるが、これは第26号住居跡カマド1煙道部付近が最も広く1.6mを測る。当該付近を含め、第18号住居跡の北側あたりから、第42号土坑付近までの35m部分は溝幅が大きく広がる。これはE-E'～H-H'までの土層断面図から明らかのように、明確な掘り返しによって溝幅が拡張されたことを物語っている。特に、E-E'では、4層→3層→1・2層の順に掘り返しを確認することが可能で、当初を含めると3回の構築が行われたと言える。第42号土坑付近の溝先端付近は、耕地整理がローム面にまで達しており、そのため削平されて消滅している。

出土遺物は5点を実測し掲載している。第5号溝跡内の遺物と1を除いて時期的に非常に近い。2～5は須恵器及び土師器坏であり、3の内面は黒色処理がなされる。1はかわりけであり、時間的に後出する。



第31図 第5号溝跡出土遺物実測図

第14表 第5号溝跡出土遺物観察表

No	器種・器形	大きさ(cm)	整形	特徴	胎土	色調・焼成	（ ）:推定値 () :残存率	
							残存率	備考
1	須恵部 高台付片	口径: -	内: 体~底部口ロナデ	高台は直立する。外面下半に稜がある。	砂粒多量	内: 黄灰 外: 黄灰・ ・黄	高台部 1/6	
		底径: (7.0)	外: 体部口ロナデ、底部回転へう切り・高台付後ケズリ					
2	須恵部 短頸志か	口径: -	内: 内~胴部口ロナデ	わずかに胴部が張り胴部へ至る。	白色細粒・砂粒 散見	内: 灰 外: 灰 ・黄	胴~胴部破 片	覆土
		底径: -	外: 外~胴部口ロナデ					
3	須恵部 盤	口径: -	内: 胴部無文当て具残	ゆるやかに湾曲する。	白色細粒・白 色粒散見	内: 灰 外: 灰 ・黄	胴部破片	覆土
		底径: -	外: 胴部無文格子印き					
4	土師部 杯	口径: (15.4)	内: 口縁~体部頸部ミダギ	口縁部と体部の境に稜をもち、口縁部は外反して開く。内面黒色処理。	白色細粒・黒 ガラス粒少量、 白色粒散見	内: 黒陶 ガラス粒少量、 黒陶 ・黄	口縁~体部 破片	覆土
		底径: -	外: 口縁部口ロナデ、体部ナデ					
5	かわらけ	口径: -	内: 底部口ロナデ	平底。底部中心付近は部厚が薄い。	砂粒少量	内: にぶい黄陶 外: にぶい黄陶 ・黄	底部破片	覆土
		底径: -	外: 底部回転糸切り跡					

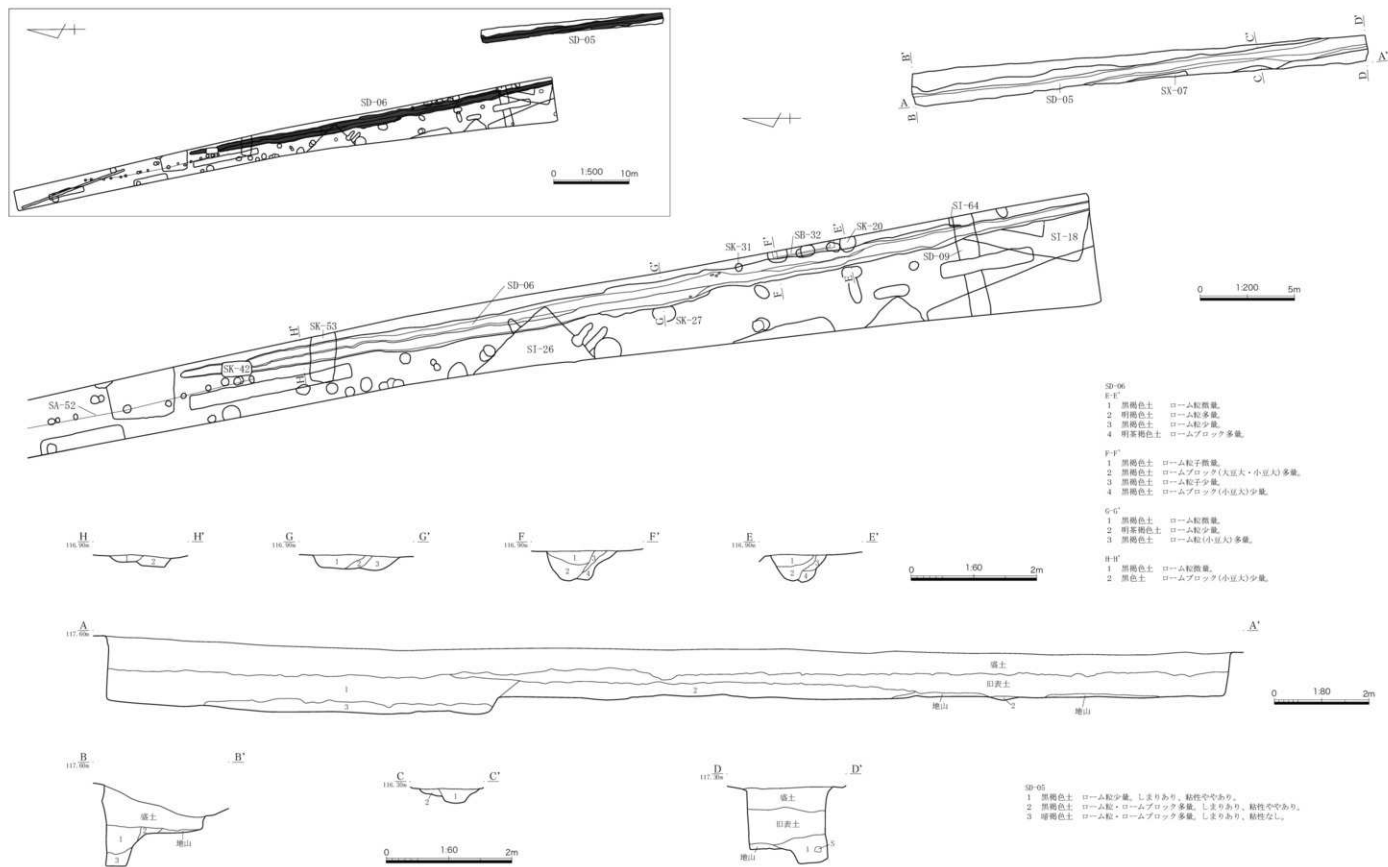


第32図 第6号溝跡出土遺物実測図

第15表 第6号溝跡出土遺物観察表

No	器種・器形	大きさ(cm)	整形	特徴	胎土	色調・焼成	（ ）:推定値 () :残存率	
							残存率	備考
1	かわらけ	口径: (7.9)	内: 口縁~底部口ロナデ	平底で直線的に口縁部へのびる。	褐色粒少量	内: にぶい黄陶 外: にぶい黄陶 ・黄	1/5	覆土 全体的に埋 戻
		底径: (4.2)	外: 口縁~体部口ロナデ、底部切 り跡し不明。回転糸切り跡しか					
2	須恵部 杯か	口径: -	内: 体~底部口ロナデ	体部は底部から外に開くように立ち 上がる。	白色細粒・砂 粒中量、白色 ・黄	内: 灰 外: 灰 ・黄	体~底部破 片	覆土
		底径: (6.6)	外: 体部下端回転へラケズリ、底部切 り跡し不明					
3	土師部 杯	口径: (14.4)	内: 口縁~底部ミダギ	平底で体部は直線的にのびる。内面 黒色処理。	白色細粒・砂 粒少量、黒色 粒少量、白色 粒散見	内: 黒・一部に ぶい黄陶 外: にぶい黄陶 ・黄	1/8	覆土
		底径: (8.6)	外: 口縁部口ロナデ、体部口ロナ デ・下部回転へラケズリ、底部回 転へう切り後ケズリによる再調整か					
4	土師部 杯	口径: -	内: 体~底部口ロナデ	体部下端丸味を持って立ち上がる。	白色粒・砂粒 散見	内: にぶい黄陶 外: にぶい黄陶 ・黄	底部破片	覆土
		底径: (9.3)	外: 体部口ロナデ、底部静止糸切 り跡し					
5	土師部 杯	口径: (8.0)	内: 底部口ロナデ後ミダギ	底部外面周縁わずかに凹む。底部が わずかに突出する。	白色細粒少量、 白色粒・黒陶 母粒散見	内: 黒 外: にぶい黄陶 ・黄	底部 1/5	覆土
		底径: (8.0)	外: 体部口ロナデ・下部回転へう ケズリ、底部回転糸切り跡し後黒 漆を持ちへラケズリ					

さて第5号及び第6号の溝跡についてであるが、双方はほぼ平行する関係にあり、その間隔は心々にて6.5 m前後である。溝幅も非常に類似しており、掘り返しも2回ずつ行われている。また、出土遺物も9世紀代のものが多数を占めており、時間的に非常に近い段階で掘削されたことが窺える。これらのことから双方の溝跡を道路状遺構の側溝と考えると、非常に理解しやすい。



第33図 第5号・第6号溝跡実測図

2. 掘立柱建物跡

調査Ⅱ区B地点及びⅢ区からは、合計2棟の掘立柱建物跡が出土している。共に狭小な調査区との関係から桁行のみの調査となっているため、規模や梁行等については不明確である。

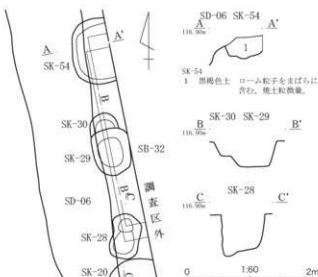
第32号掘立柱建物跡 (第34図, 図版21・25・26)

本建物は調査Ⅱ区B地点内の中央南側に位置する。当初は調査区外との接点部分であることから、第28号～第30号及び第54号土坑として認識していたが、掘方や間尺を検討したところ、掘立柱建物跡となる可能性が高い。

規模は、おそらく2×2間の東西建物で、大きさは桁行3.1m、柱間寸法は1.5mである。第28号～第30号では建て替えによる掘方が明瞭であり、柱穴の新旧関係についても明らかである。

各柱穴の掘方は、70～100cmの楕円形で、最も深い第28号で70cmほどである。覆土については第54号にて確認したに過ぎないが、ローム粒子や焼土粒を含む黒褐色土が認められた。

当初より土坑としての認識であったため、柱痕を確認していない。また出土遺物も無い。



第34図 第32号掘立柱建物跡実測図

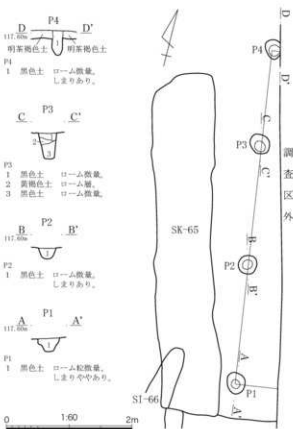
第67号掘立柱建物跡 (第35図, 図版23)

本掘立柱建物跡は調査Ⅲ区Dの南側に位置し、第32号と同様に桁行に限って発見され、それ以外は調査区外に延びる。

建物はおそらく2×3間の南北棟で桁行は5.3m、梁行は不明である。柱間寸法は南から1.9m、1.9m、1.5mの順で、P3-P4間が詰まる。柱穴は4本とも共に30cm前後の円形で、確認面からの深さは最も深いP3が40cm、P1及びP2が20cm前後と比較的浅い。P4は調査区外との接点部であったため、漸移層から確認できており、その深さはP3と同じ40cmである。

P1・P2及びP4の内部は、ロームを微量に含む黒色土の1層、P3ではこの1層下に黄褐色土の2層や黒色土の3層が堆積する。なお、柱痕はすべてのピットより確認されていない。

非常に柱穴が小さく、また掘り込みが浅いなどの状況を考え合わせると、当時代よりは中世の掘立柱建物跡の可能性も否定できない。なお、周辺からは数多くの柱穴とも思えるピットが発見されているが、建物を構成するものは無い。



第35図 第67号掘立柱建物跡実測図

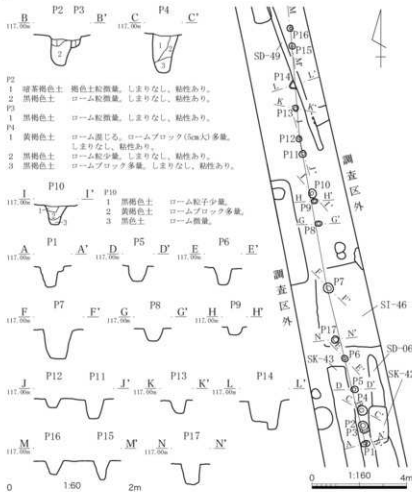
3. 櫛列跡 (第36図, 図版23)

櫛列跡とした遺構は調査第Ⅱ区B地点北側より発見されている。

第52号櫛列跡としたもので、17本の柱穴が18mにわたって、ほぼ一直線状に掘り込まれている。柱穴は大きいもので径45cm前後、小さいものでは25～30cm前後である。

確認面からの深さも一定ではなく、最も深いP7で45cm、最も浅いP9では10cmほどである。

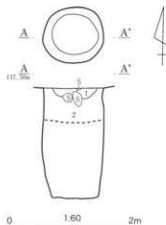
柱穴間の距離は、最大でP7-P17、P7-P8間が2.5m前後、近いところではP9-P10間が近接、それ以外では80cm前後が多数を占める。覆土は、P2～P4・P10にて確認しているが、ロームブロックを含む黒褐色土や黄褐色土が多い。出土遺物は発見されていない。



第36図 第52号櫛列跡実測図

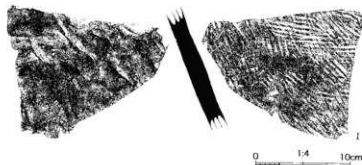
4. 井戸跡 (第37・38図, 図版5・24)

調査区内より発見されている井戸跡は、第77号井戸跡の1基である。本井戸跡は調査第Ⅲ区内南側に位置し、開口部の形状は径90cmのほぼ正円、確認面からの深さは底面まで1.75mで比較的浅い。断面形状は筒状であるが、中位部がやや膨らみ、底面付近で幾分窄む。確認面付近から第2層とした破線部付近にかけて、



第37図 第77号井戸跡実測図

- 1 黄褐色土 ロームブロック多量、右(人頭大～拳大)含む。
- 2 黒色土 ローム粒(小豆大)少量、右(人頭大～拳大)含む。



第38図 第77号井戸跡出土遺物実測図

第16表 第77号井戸跡出土遺物観察表

No.	器種・器形	大きさ(cm)	器形	特徴	（上）推定値 （上）残存値			
					胎土	色調・焼成	残存率	備考
1	須恵器 壺	口径： - 底径： - 器高： 11.2cm	内：割線無文帯で貝殻 外：割線平帯付き	器厚厚い、直線的で湾曲のない割線 片、底面面取り切れ。底石として使 用可。	白色細粒・砂 粒多量、小礫 懸濁	内：灰 外：灰 ・白	割線破片 覆土	

写真図版にもあるとおり大量の礫が出土しており、これらに1点ではあるが大型な須恵器片が混じる。

5. 土坑

第12号・第21号土坑（第39図、図版24・30）

第12号・第21号土坑の双方は、調査第Ⅱ区B地点内の南側に位置し、切り合う関係にある。第21号土坑の形状は、長軸1.45m、短軸55cmの長楕円形で、確認面からの深さは東側のピット底面で45cmである。断面形状は東側底面に掘り込まれたピットに向かって大きく傾斜し、ここにロームブロックを多量に含む黒褐色土の第2層が流入する。覆土内からは1点であるが、土錘が出土している。

第12号は先の第21号を切り、長軸1.05m、短軸55cmの楕円形を呈す。確認面からの深さは15cmで、内部にはロームブロックを多量に含む黒褐色土の1層が堆積する。

第27号土坑（第39図、図版21・24）

本土坑は調査第Ⅱ区B地点内の中央部やや南側に位置し、一部が後世の第6号溝跡に切られる。形状は長軸1.25m、短軸推定で90cmの楕円形で、確認面からの深さは18cmである。断面形状は皿状で、覆土は壁付近くにロームブロックを多量に含む明褐色土の第2層と全体を明茶褐色土の第1層が覆う。

第36号・第37号・第56号土坑（第39図、図版25）

第36号・第37号及び第56号土坑の3基は、調査第Ⅱ区B地点内の中央部に位置し、互いが切り合う関係にある。また、それぞれの一部は西側の調査区外に延びる。最も古い第56号土坑は、第36号と第37号に挟まれ、形状は推定で長軸75cm、短軸50cmの楕円形で、断面形状は「U」字状を呈す。覆土は混入物が異なる明茶褐色土の第3層及び第4層である。第36号は最も南に位置し、第56号を切る。形状は、推定で径60cmの円形で、やはり断面形状は「U」字状を呈す。覆土は混入物が異なる黒褐色土の第1層及び第2層である。北側に位置する第37号はやはり第56号を切る。形状は、推定で径65cmの円形、断面形状は「U」字状を呈す。覆土は混入物が異なる黄褐色土の第5層及び第6層である。各土坑からの出土遺物はない。

第31号土坑（第39図）

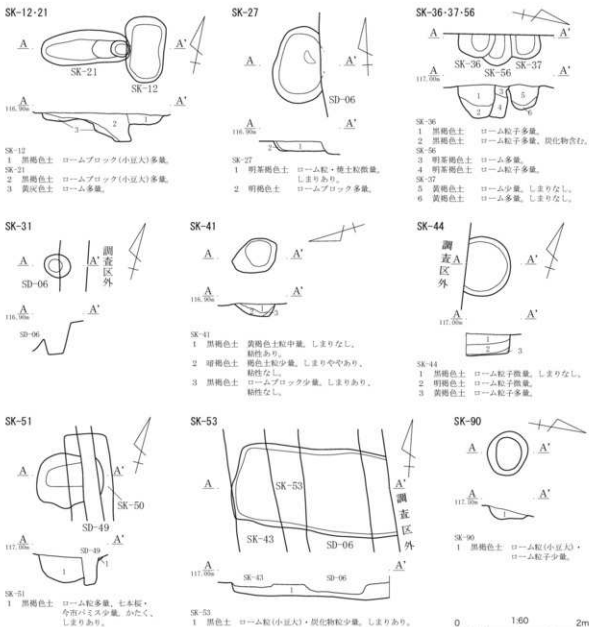
本土坑は調査第Ⅱ区B地点内の中央部の南側に位置し、後世の第6号溝跡に一部が切られる。形状は径42cmの円形で、土坑というよりはピットに近い。確認面からの深さは50cm。断面形状は確認面付近が広がる漏斗状を呈す。同時代の第6号溝跡に切られることから本時代の所屬とした。

第41号土坑（第39図、図版25）

本土坑は調査第Ⅱ区B地点内の中央部に位置し、後世の第43号土坑に一部が切られる。形状は長軸75cm、短軸55cmの不整楕円形の小型な土坑である。確認面からの深さは20cm。断面形状は船底状で、覆土は黒褐色土ではあるものの、混入物の違いにより第1層から第3層に区分される。

第44号土坑（第39図、図版25・30）

本土坑は調査第Ⅱ区B地点内の中央部やや北側に位置し、一部が西側の調査区外に延びる。形状は径95cmの円形で、確認面からの深さは35cmである。断面形状は箱形で、覆土は底面付近にローム粒子を多量に含む黄褐色土の第3層が、次にやはりローム粒子を微量に含む明褐色土の第2層が、そしてローム粒子を微量に含む黒褐色土の第1層が覆う。覆土内からは微細ではあるが、壺形土器の底部片が出土している。



第39図 土坑実測図

第51号土坑 (第39図, 図版26)

本土坑は調査Ⅱ区B地点内の北側端に位置し、後世の第49号溝跡及び第50号土坑に切られる。形状は長軸1.05m、短軸90cmの楕円形で、確認面からの深さは40cmである。断面形状は鍋底状で、内部にはローム粒、七本桜・今市バミスを含む黒褐色土が堆積し、変形土器の底部片の出土がある。

第53号土坑 (第39図, 図版25・30)

本土坑は調査Ⅱ区B地点内のほぼ中央部に位置し、第43号土坑及び第6号溝跡に切られると共に、その一部が東側調査区外に延びる。形状は短軸1.45m、長軸は推定で約2.8mの隅丸方形で、確認面からの深さは20cmほどである。覆土はローム粒及び炭化物粒を含む黒褐色土の1層で、覆土内より微細ではあるが4・5とした2点の土師器坏形土器がある。4の体部から底部外面には「□加納」の墨書が見られる。共に内面には黒色処理が施される。2点の坏は本来第6号溝跡に伴う可能性も有り得る。



第40図 土坑内出土遺物実測図

第17表 土坑内出土遺物観察表

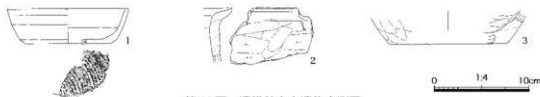
No.	遺物名・器種・器形	大きさ(cm)	形状	特徴	胎土	色調・焼成	() 上推定値 上残存値	
							残存率	備考
1	SK-21 土製品 土埴	長: 14.01 幅: 1.4 孔: 0.35	内: - 外: ナデ	管状、楕円形。	褐色粒無染	内: - 外: にぶい黄橙・黒	下端欠損	覆土
2	SK-44 土器 甕	口径: - 底径: 45.6 部高: 13.0	内: 胴~底面ヘラナデ 外: 胴ナデ、底面ケズリ	平底で突出する底面。	白色粒(針状物含む)、砂粒中量	内: 褐色 外: にぶい黄橙・黒	胴部下~底面破片	覆土
3	SK-51 土器 甕	口径: - 底径: 45.6 部高: 12.7	内: 胴~底面ヘラナデ 外: 胴~底面ケズリ	平底で若干突出する底面。	白色細粒(針状物含む)・透明粒・砂粒多量	内: 褐色 外: にぶい橙・やや不良	胴部下~底面破片	覆土
4	SK-53 土器 杯	口径: - 底径: 7.2 部高: 11.7	内: 体部ミダキ、底面一定方向ミダキ 外: 体部クロコナデ、底面凹縁縁切り跡	平底、体部下端はゆるやかに立ち上がる。内面黒色焼成、体~底面外面塗層あり。「口加納」か。	白色細粒・褐色粒少量、白色粒少量	内: 黒 外: にぶい黄橙・黒	体~底面破片	覆土
5	SK-53 土器 杯	口径: - 底径: - 部高: 13.11	内: 口縁~体部ミダキ 外: 口縁~体部クロコナデ	口縁部は直線的に開く。内面黒色焼成。	白色粒・黒ガラス粒無染	内: 黒 外: にぶい黄橙・黒	口縁~体部破片	覆土

第90号土坑 (第39図、図版27)

本土坑はⅢ区北側に位置し、第88号溝跡に切られる。形状は長径70cm、短径60cmの楕円形で、内部にはローム粒やローム粒子を含む黒褐色土が堆積する。中世に該当する第88号溝跡に切られるため、当時代に構築された土坑とした。出土遺物はない。

6. 遺構外出土遺物 (第41図、図版30)

確認面までの表土層が厚かったⅢ区内より遺構外出土遺物が3点出土している。すべて土器片であり、僅かな残存部より器形復元し、実測図として掲載している。1は底径が大きく器が浅いなど、やや古い様相を示す环形土器で、8世紀前半に位置付けられようか。2は甕形土器の口縁部片で端部は「く」字状に大きく外反する。外面は横位のケズリが施される。3も甕の底部片が僅かに残る。内外面にナデ及びケズリあり。



第41図 遺構外出土遺物実測図

第18表 遺構外出土遺物観察表

No.	遺物名・器種・器形	大きさ(cm)	形状	特徴	胎土	色調・焼成	() 上推定値 上残存値	
							残存率	備考
1	土器 甕 杯	口径: 112.0 底径: 85.8 部高: 3.7	内: 調整不明なるもクロコナデ 外: 口縁~体部クロコナデ、底面凹縁縁切り	平底、体部下端はゆるやかに立ち上がる。	白色細粒・赤色粒・黒ガラス粒・砂粒中量、白色粒少量	内: にぶい橙 外: にぶい橙	1/6	Ⅲ区 内面摩耗
2	土器 甕	口径: - 底径: - 部高: 16.11	内: 口縁部コナデ、胴部ヘラナデ 外: 口縁部コナデ、胴部口縁部との境ナデ横位ケズリ	胴部は直線的、口縁部は短く、くの字状に折れる。口縁部は直立する。	白色粒・赤色細粒・黒ガラス粒・砂粒少量、赤色粒少量	内: にぶい橙 外: にぶい橙	口縁~体部破片	Ⅲ区
3	土器 甕	口径: - 底径: 112.2 部高: 12.7	内: 胴部調整不明なるもケズリ・ナデか、底面ナデ 外: 胴~底面ナデ	平底、胴部は若干丸味をもっており立ち上がる。	赤色粒・黒色粒・砂粒多量	内: にぶい黄橙 外: にぶい黄橙・黒	胴~底面破片	Ⅲ区 外面摩耗

第5節 中世以降

これまで遺構伴出遺物や覆土の状況、さらに他の遺構との切り合い関係から、古墳時代、奈良・平安時代さらに中世に所属する遺構を明示し記載してきた。これら以外については、調査時において時期不明として取り扱ってきたが、明らかに上述した3時代の遺構と比較して覆土にまったくしまりがなく、また掘り込みも上位に位置する等の点を勘案すると、中世以降に所属するものとして大過ないと思われる。また、中には明らかに現代に所属する遺構や、試掘トレンチを土坑として誤認したものも含まれる。

1. 土坑

中世以降に該当する土坑は総計で45基である。形状は長大な長方形、方形、楕円形及び円形であり、深さはそれらの形状によって大きく異なる。また、これらからの出土遺物がまったく皆無である点も特徴である。土坑は県道西側のⅡ及びⅢの各区から出土しており、Ⅰ区からの発見は皆無である。

第1号土坑 (第43図, 図版24)

本土坑は調査第Ⅱ-A区のほぼ中央部に位置し、南北方向に長大な土坑である。その大きさは長軸12.3m、短軸70cm、確認面からの深さは僅かに5cmほどである。第4号溝跡と重複し、本土坑がこれを切る関係にある。覆土はロームを微量に含む黒褐色土の1層で、出土遺物は皆無である。本土坑は、試掘調査の際のトレンチ跡の可能性が高いと思われる。

第8号土坑 (第43図, 図版21・22・24)

本土坑は調査第Ⅱ-B区内の南側に位置し、第9号溝跡及び第18号住居跡と重複関係にある。形状は南北方向に主軸をもつ方形の土坑で、長軸5m、短軸90cm、確認面からの深さは10cm程度である。この土坑についても、第1号土坑と同様な形状を示すことから試掘トレンチである可能性が高い。

第10号土坑 (第43図, 図版24)

本土坑は調査第Ⅱ-B区内の南側に位置し、第11号住居跡に隣接して掘り込まれる。長軸1.9m、短軸55cm、深さ10cmを測り、南北方向に主軸をもつ楕円形の土坑である。覆土はローム粒及び今市バミスを微量に含む黒褐色土1層である。

第13号土坑 (第43図)

本土坑は調査第Ⅱ-B区内の南側に位置し、第6号溝跡に近接して掘り込まれる。形状は径50cmの円形で、深さ45cmほどのピット状を呈す。覆土はロームを全体に含む茶褐色土の第2層が底面から開口部付近まで、さらにその上位にローム及び今市バミスを微量に含む明茶褐色土の第1層が堆積する。

第14号土坑 (第43図)

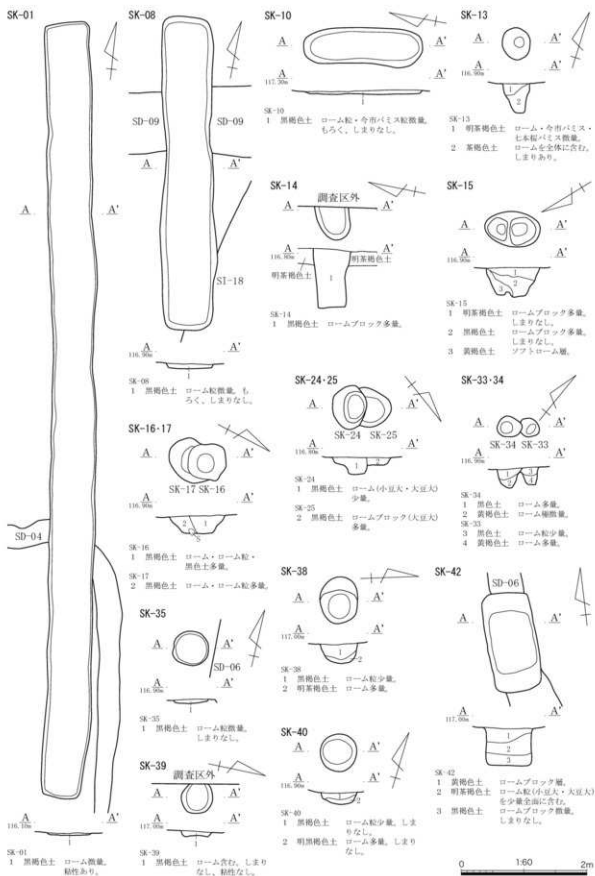
本土坑は調査第Ⅱ-B区の南側に位置し、第18号住居跡と重複する。土坑の一部は東側調査区域外に延びるため、全体の形状は不明確である。推定形状は短軸55cmの楕円形で、確認面からの深さは95cmである。覆土はロームブロックを含む黒褐色土の1層で、しまりがない。耕作土直下から掘り込まれており、非常に新しい土坑であろう。

第15号土坑 (第43図, 図版9)

本土坑は調査第Ⅱ-B区の南側に位置し、第16号及び第17号土坑が隣接する。確認面の形状は長軸85cm、短軸55cm、確認面からの深さは50cmである。底面には長軸方向に2箇所の窪みがあり、堆積土の第3層から第1層は北側から流入した状況を示す。

第16・17号土坑 (第43図, 図版9)

重複する双方の土坑は調査第Ⅱ-B区の南側に位置し、第22号住居跡に隣接する。覆土の状況から第16号



第43図 土坑実測図(1)

土坑は後出するもので、形状は径60cmのやや不整な円形、深さは30cmほどで、断面形状は台形状である。第17号土坑の形状は、上述の土坑に切られるためやや不明瞭な部分があるが、長軸推定で90cm、短軸60cmの楕円形である。深さは30cmで、やはり断面形状は台形状に近い。覆土は共に混入物が近似する黒褐色土である。

第24・25号土坑（第43図、図版24）

双方の土坑は調査第Ⅱ-B区の中央部に位置し、第26号住居跡に隣接する。前後関係は覆土の状況から第25号から第24号の順となる。第24号土坑の形状は長軸70cm、短軸55cmの楕円形で、深さは25cmである。第25号土坑の形状は、長軸はおおよそ63cm、短軸60cmの不整形、深は13cmで、断面形状は浅い皿状を呈す。覆土は互いに色調及び混入物が近似する黒褐色土である。

第33・34号土坑（第43図、図版25）

双方の土坑は調査第Ⅱ-B区の中央部に位置し、第55号土坑に隣接する。形状は共に径30～40cmほどの円形、深さ30cmのピット状である。

第35号土坑（第43図、図版25）

本土坑は調査第Ⅱ-B区の中央部に位置し、第6号溝跡に隣接する。形状は径55cmの円形、深さは5cmほどで、断面形状は皿状である。覆土はローム粒子を微量に含む黒褐色土である。

第38号土坑（第43図）

本土坑は調査第Ⅱ-B区の中央部に位置し、南側には切り合う第36号、第37号及び第56号土坑が隣接する。形状は長軸75cm、短軸60cmのほぼ円形である。深さは33cmで、断面形状は鍋底状を呈す。覆土は底面付近にローム主体の明茶褐色土が、その上位にはローム粒を少量含む黒褐色土が堆積する。

第39号土坑（第43図、図版25）

本土坑は調査第Ⅱ-B区の中央部内北側に位置し、第38号土坑に隣接する。一部が西側の調査区域外に延びるが、長軸はおおよそ55cm、短軸50cmの不整形、深は8cmほどで、断面形状は浅い皿状を呈す。覆土はロームを含む黒褐色土である。

第40号土坑（第43図、図版25）

本土坑は調査第Ⅱ-B区の中央部内北側に位置し、第39号土坑に隣接する。形状は径60cmの円形で、深さは18cmである。断面形状は緩い船底状で、覆土はロームを多量に含む明黒褐色土の第2層、その上位にローム粒を少量含む黒褐色土の第1層が堆積する。

第42号土坑（第43図、図版25）

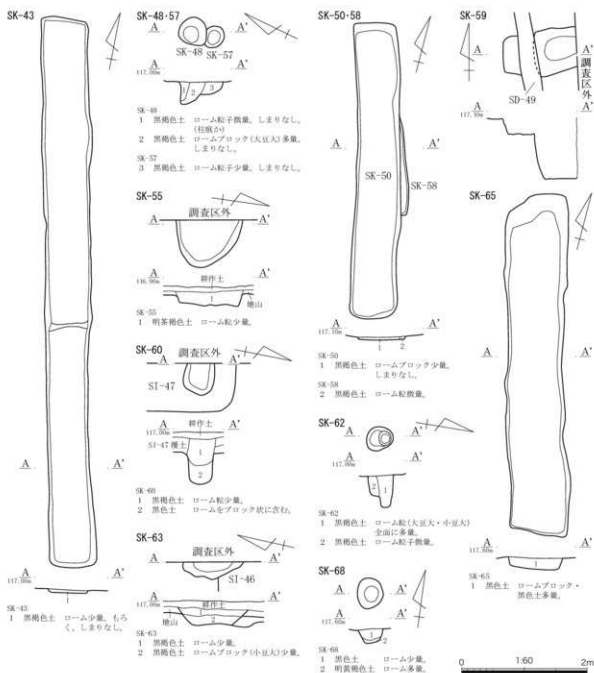
本土坑は調査第Ⅱ-B区の中央部北側に位置し、第6号溝跡と重複する関係にある。形状は長軸1.6m、短軸80cmの隅丸長方形を呈す。深さは60cmで、断面形状は箱形である。内部には、それぞれロームブロックやローム粒を含む3層が帯状に堆積する。

第43号土坑（第44図）

本土坑は調査第Ⅱ-B区の北側に位置し、南北方向に延びる長大な土坑である。その大きさは長軸8.8m、短軸70cm、確認面からの深さは僅かに5cmほどである。第41号及び第53号土坑と重複し、本土坑がもっとも後出する遺構である。覆土はロームを少量含む黒褐色土の1層である。本土坑は、第1号や第8号土坑と同様に試掘調査の際のトレンチ跡の可能性が高い。

第48・57号土坑（第44図、図版25）

双方の土坑は調査第Ⅱ-B区の北側に位置し、南側には第46号住居跡に隣接する。形状は双方共に径40～50cmほどの円形で、深さは第48号が35cm、第57号が20cmのピット状を呈す。



第44図 土坑実測図(2)

第50・58号土坑 (第44図, 図版26)

双方の土坑は調査Ⅱ-B区の北側に位置し、49号溝跡と重複する。形状は南北方向に主軸があり、大きさは長軸4.66m、短軸70cmの長方形を呈し、確認面からの深さは僅かに5cmほどである。第1号や第8号及び第43号土坑と短軸幅が同一であり、試掘調査の際のトレンチ跡と考えられる。第58号土坑はこれに切られ、僅かに東壁のみが発見されている。長軸1.6m、短軸60cm前後の長方形を呈すると思われる。

第55号土坑 (第44図, 図版26)

本土坑は調査Ⅱ-B区の中央部北側に位置し、南側には第26号住居跡が隣接する。土坑の一部が西側調査区外に延びるため、形状については推定となるが、長軸はおおよそ1.6m、短軸1.1mの楕円形と思われる。

深さは耕作土直下から20cmで、断面形は箱形である。覆土はローム粒を少量含む黒褐色土の1層で、掘り込み面が耕作土中にあることから、時期的にかなり新しいと思われる。

第59号土坑 (第44図)

本土坑は調査第Ⅱ-B区の北側に位置し、後世に第49号溝跡が掘り込まれる。土坑の一部が東側調査区外に延びるため、形状については推定となるが、長軸約1.5m、短軸75cmの隅丸長方形と思われる。確認面からの深さは95cmで、西壁は底面からやや湾曲気味に立ち上がり、確認面付近では階段状を呈す。覆土はしまりのないロームブロックを大量に含む黒褐色土の1層で、その掘り込み面も耕作土中にあることから、時期的にかなり新しいと思われる。

第60号土坑 (第44図、図版13・26)

本土坑は調査第Ⅱ-B区の北側の第47号住居跡内に位置し、一部が西側調査区外に延びる。住居跡内床面における平面形状は、推定で長軸約75cm、短軸50cmの隅丸長方形と思われる。深さは西壁面の土層堆積図を参考にすると、耕作土直下より70cmで、断面形は「U」字状を呈す。覆土である第1層及び第2層は共にしまりがなく、ロームをブロック状に含む黒褐色土の第2層が底面付近に、その上位にローム粒を少量含む黒褐色土の第1層が堆積する。

第62号土坑 (第44図)

本土坑は調査第Ⅱ-B区の北側に位置し、南側には第44号土坑が隣接する。形状はビット状で、径40cm、深さは50cmである。

第63号土坑 (第44図)

本土坑は調査第Ⅱ-B区の北側に位置し、第46号住居跡の北壁と切り合う。土坑の一部が東側調査区外に延びるため、形状については推定となるが長軸98cm、短軸は50cmほどの不整楕円形であろう。掘り込み面が耕作土内であるため、時期的には非常に新しいと判断される。

第65号土坑 (第44図、図版26)

本土坑は調査第Ⅲ区の南側中央部に位置し、南北方向に延びる長大な土坑である。第66号住居跡と重複しこれを切る。その大きさは長軸5.4m、短軸90cmの長方形で、確認面からの深さは15cmほどである。本土坑は、調査第Ⅱ区の第1号や第8号土坑と同様に試掘調査の際のトレンチ跡の可能性が高い。

第68号土坑 (第44図、図版26)

本土坑は調査第Ⅲ区の南側に位置し、南側には第66号住居跡が近接する。形状はビット状で、径40cm、深さは20cmほどである。

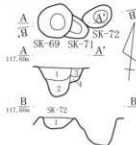
第69・71・72号土坑 (第45図、図版26)

切り合い関係にある3基のビット状の土坑は調査第Ⅲ区の南側に位置する。第69土坑は第71号土坑を切る関係にあり、その大きさは径52cmの円形で、確認面からの深さは45cmである。覆土は下方にロームブロックを少量含む黄褐色土、上方に混入物がみられない黒褐色土が堆積する。第71号土坑は長軸約55cmの楕円形で、深さは20cmほどである。やはり第69号土坑と同様な覆土が第3層、第4層となって上下に堆積する。第72号土坑は長軸50cmの楕円形で、深さは18cmである。

第73・74号土坑 (第45図、図版26)

双方の土坑は調査第Ⅲ区の南側に位置し、上述した第69号、第71号及び第72号土坑が南側に掘り込まれる。第73号土坑は径47cmの円形、第74号土坑は長軸32cmの不整楕円形で、共にビット状を呈す。それぞれの深さは35cmと20cmで、第73号土坑が深い。双方の覆土は混入物が近似する黒褐色土や黒褐色土である。

SK-69-71-72



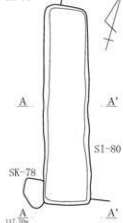
- SK-69
1 黒色土 炭人物なし、しまりあり。
2 黄褐色土 ロームブロック少量、黒色土少量。
SK-71
3 黒色土 炭人物なし、しまりあり。
4 黄褐色土 ロームブロック多量。
SK-72
1 黒褐色土 ローム多量、しまりあり。

SK-73-74



- SK-73
1 黒褐色土 ローム(小豆大・大豆大)多量。
SK-74
2 黒色土 ローム粒少量。
3 黒褐色土 ローム(小豆大・大豆大)多量。

SK-79



- SK-79
1 黒褐色土 ロームブロック(小豆大・大豆大)多量、しまりなし。

SK-75



- SK-75
1 黒褐色土 ローム粒少量。
2 明茶褐色土 ローム粒(小豆大・大豆大)多量。

SK-76



- SK-76
1 黒褐色土 ローム少量、しまりあり。

SK-78



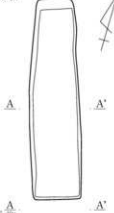
- SK-78
1 黒褐色土 ローム粒少量。
2 黄褐色土 ロームブロック主体。

SK-78



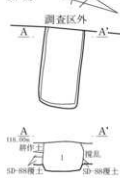
- SK-79
1 黒褐色土 ロームブロック(小豆大・大豆大)多量、しまりなし。

SK-81



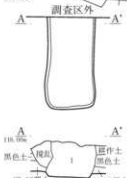
- SK-81
1 黒色土 ロームブロック(大豆大・小粒大)を含む、もろく、しまりなし。

SK-82



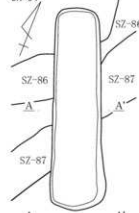
- SK-82
1 黒褐色土 ローム多量。

SK-83



- SK-83
1 明茶褐色土 ロームブロックを層状に含む。

SK-84



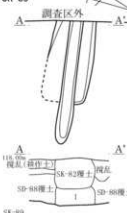
- SK-84
1 黒色土 ロームブロック・灰色ブロック多量、もろく、しまりなし。

SK-85



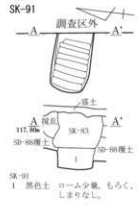
- SK-85
1 黄褐色土 ロームブロック層、黒色土少量。
2 黒色土 ローム粒少量。
3 黒褐色土 ローム粒多量。

SK-89



- SK-89
1 黒色土 ロームブロック多量。

SK-91



- SK-91
1 黒色土 ローム少量、もろく、しまりなし。

第45図 土坑実測図(3)

第75号土坑 (第45図, 図版26)

本土坑は調査第三区の南側に位置し、第65号土坑が南側に近接する。形状は長軸55cm、短軸45cmの不整形円形で、深さは35cmである。覆土は下層に明茶褐色土と上層に黒褐色土が堆積し、共にローム粒を含む。

第76号土坑 (第45図, 図版27)

本土坑は調査第三区の南側位置し、北側には第77号井戸跡が掘り込まれる。形状は径28cmの円形で、深さは15cmほどのビット状を呈す。覆土はロームを少量含む黒褐色土の1層である。

第78号土坑 (第45図, 図版27)

本土坑は調査第三区のほぼ中央部に位置し、後述する第79号土坑に切られる。形状は長軸45cmほどの不整形円形で、深さは13cmである。覆土は下層にロームブロック主体の黄褐色土が、上層にローム粒を微量に含む黒褐色土が堆積する。

第79号土坑 (第45図, 図版27)

本土坑は調査第三区のほぼ中央部に位置し、上述した第78号土坑や第80号住居跡と重複する。形状は長軸3.15m、短軸72cmの長方形で、深さは18cmである。覆土はロームブロックを多量に含む黒褐色土である。これまで試掘トレンチ跡と判断した土坑と短軸幅が一致するなど、本土坑についても同様なトレンチ跡と判断すべきであろうか。

第81号土坑 (第45図, 図版27)

本土坑は調査第三区の中央部に位置する。形状は長軸3.2m、短軸80cmの長方形で、深さは15cmである。覆土はロームブロックを含む黒褐色土である。上述した第79号土坑や第65号土坑と同様に、やはり試掘トレンチ跡と考えられる。

第82号土坑 (第45図, 図版27)

本土坑は調査第三区の北側に位置し、第88号溝跡内に掘り込まれる。また、その一部が西側調査区外に延びるため長軸については不明であるが、短軸62cmの長方形であろう。深さは45cmで、覆土はロームを多量に含む黒褐色土である。本土坑の直下には第89号土坑が掘り込まれている。

第83号土坑 (第45図, 図版27)

本土坑は調査第三区の北側に位置し、第82号土坑と同様に第88号溝跡内に掘り込まれる。また、その一部が東側調査区外に延びるため長軸については不明であるが、短軸75cmの長方形である。深さは55cmで、覆土はロームブロックを層状に含む明黒褐色土である。本土坑の直下には第91号土坑が掘り込まれている。第82号土坑を含め、その掘り込み面は耕作土中にあるため、現代まで遡る遺構と考えられる。

第84号土坑 (第45図, 図版27)

本土坑は調査第三区の北側に位置し、第86号及び第87号方形周溝遺構を切る。形状は長軸3.2m、短軸80cmの長方形で、深さは22cmである。第79号や第81号土坑と形状が一致しており、また切り合う遺構の中で最も後出するなどの特徴から、これら3基の土坑は試掘トレンチの可能性が高い。

第85号土坑 (第45図, 図版27)

本土坑は調査第三区の北側に位置し、周辺には第86号及び第87号方形周溝遺構が掘り込まれる。形状は長軸1.45m、短軸73cmの長方形で、底面中央には長軸方向に対して溝状の掘り込みが伴う。なお、底面からは木質出土状態図にて示したように、半截された木材が隙間なく敷き詰められている。仕様の目的としては、おそらく芋穴であろう。

第89号土坑 (第45図, 図版23・27)

本土坑は調査Ⅲ区の北側に位置し、第82号土坑直下に掘り込まれると共に第88号溝跡にその底面がある。また、一部が西側調査区外に延びるため長軸については不明であるが、短軸74cmの長方形を呈す。深さは西側壁面にて25cmを測る。やはり第85号土坑同様に底面中央には長軸方向に対して溝状の掘り込みが伴うことから、同じ使用方法が考えられる。このことから、上位に位置する第82号土坑も極めて新しい遺構と判断できる。

第91号土坑 (第45図, 図版23・27)

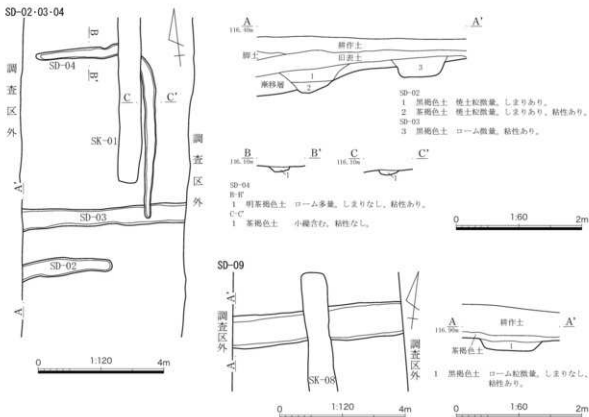
本土坑は調査Ⅲ区の北側に位置し、第83号土坑直下に掘り込まれる。また、一部が東側調査区外に延びることから長軸については不明であるが、短軸62cmの長方形を呈す。深さは東壁面にて35cmを測る。第85号や第89号土坑とは異なり、底面中央には長軸方向に対して溝状の掘り込みがみられないが、同じ使用方法が考えられる。第83号土坑も極めて新しい遺構となる。

2. 溝跡

中世以降とした溝跡は5条あり、すべて県道西側の調査Ⅱ-A区及びⅡ-B区より発見されている。各溝跡からは出土遺物が無いため、覆土の状況や切り合う遺構との前後関係から推察している。

第2号溝跡 (第46図, 図版22)

本溝跡は調査Ⅱ-A区に位置し、東西方向に掘り込まれる。調査範囲が狭いため、溝全体の様相についてはまったく分からないが、第3号溝跡と平行関係にあることから、区画溝の可能性が高い。確認面が深いため、平面図から規模を読み取ることはできないが、西壁より幅1.1m、深さ40cmであり、第3号溝跡と比較してほぼ同規模であることが分かる。黒褐色土の第1層、茶褐色土の第2層には焼土粒が含まれる。



第46図 溝跡実測図(1)

第3号溝跡 (第46図, 図版22)

本溝跡は調査第Ⅱ-A区に位置し、第2号溝跡と同様に東西方向に直線的に掘り込まれる。調査区内を横走り、西壁面における大きさは、幅90cm、深さ30cmで、断面形は箱形に近い。やはり区画溝として機能したと思われる。

第4号溝跡 (第46図, 図版22)

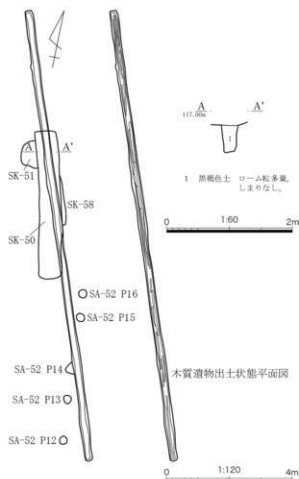
本溝跡は調査第Ⅱ-A区の中央部に位置する。鉤の手状に直角に曲がり、コーナー部は湾曲的である。溝幅は最大で40cm、深さは10cmほどである。内部にはロームや小礫を含む茶褐色土が堆積する。第3号溝跡との前後関係は、本溝跡が後出する。

第9号溝跡 (第46図, 図版21・22)

本溝跡は調査第Ⅱ-B区の南側に位置し、第3号溝跡と同様に東西方向に掘り込まれる。溝幅は最大で1m、深さは15cmほどで、断面形状は皿状である。内部にはローム粒を含む黒褐色土が堆積する。

第49号溝跡 (第47図, 図版22)

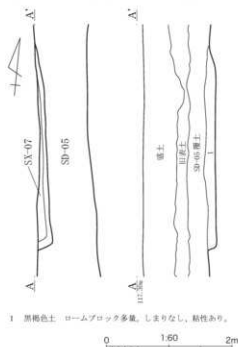
本溝跡は調査第Ⅱ-B区の北側に位置し、第50号、第51号及び第58号土坑と重複関係にある。幅25cm、深さ45cmをもって直線的に掘られ、内部には枝がびっしりと敷き詰められる。この状況から暗渠と考えられるが、南北の末端部分で途切れ、内部にはローム粒を多量に含む黒褐色土が堆積する。木質の枝が残ること、また暗渠として利用されたのであれば、現代まで時期が遡るものである。



第47図 溝跡実測図 (2)

3. 不明遺構 (第48図)

遺構の大半が県道部分内にあり、その性格が不明であるため第7号不明遺構とした。調査第Ⅰ-B区内にあり、第5号溝跡と重複する。部分的な形状から判断して堅穴住居跡の可能性があるが、一部の発見であるため、判断は避けた。



第48図 不明遺構実測図

第IV章 まとめ

第1節 発掘調査の成果

今回の神田城南遺跡の発掘調査は、一般県道小川大金停車場線拡幅工事に伴うものであり、調査期間約3ヶ月、全体の調査面積も僅かに1,100㎡を数える程度である。発見された遺構については第三章に記載したとおり、古墳時代から中世以降まで幅広く、中でも古墳時代から中世までの遺構が当遺跡の特徴を最も良く表していると思われる。ここでは各時代の遺構の特徴や性格等を記載し、調査成果のまとめとしたい。

1. 古墳時代

古墳時代の遺構には、出土遺物を中心に判断した結果、竪穴住居跡10軒と土坑2基がある。住居跡についてその状況や特徴についてまとめると、調査第Ⅱ区B地点にて8軒、また調査第Ⅲ区の中央部から南側にかけて2軒の住居跡が発見されている。昭和42年に実施された神田城跡と神田城南遺跡の発掘調査では、前者で古墳時代後期の竪穴住居跡1軒、後者では中期の竪穴住居跡5軒の他に剣型・双孔円盤及び白玉等の石製模造品が採集されている（小川町1968, 眞保1999）。今回を含めた3回にわたる調査から、古墳時代の竪穴住居跡の位置関係をみると、おおよそ当該時代の集落範囲は指定史跡である那須神田城跡を含めた馬の背状の台地内の南側に営まれていることが分かる。

今回発見された10軒の竪穴住居跡出土土器の特徴から年代観を考えることとするが、各住居跡のすべてを調査したわけではない。例えば、第47号住居跡のように調査範囲が極めて部分的なものも存在する。そのため住居跡出土土器のセット関係を全面的に明示しているものではないことを先にお断りしておく。

今回ここで取り扱う出土遺物は、10軒のうち第11号、第18号、第19号、第26号、第47号、第66号及び第80号住居跡の7軒と、方形周溝遺構とした第86号及び第87号である。那須郡においては大規模な調査例が少ないため、比較対象可能な資料があまり見当たらないが、そのような中で那珂川町三輪仲町遺跡（塚原1994）と那須烏山市滝田本郷遺跡（相馬1997）が大いに参考となる。両遺跡からは古墳時代を中心に多量の遺構及び遺物が出土しており、また土器編年も明示されていることから比較検討対象に適している。

さて、7軒の住居跡出土土器の時間軸における編年の位置であるが、一見して第26号住居跡出土土器が最も古相な特徴を有していると言える。本住居跡については3基のカマドを伴う約1/3程度の調査に限定されたが、坏形土器や甕形土器に加え埴形土器が組成される点の一つのメルクマールとなろう。坏形土器内の完存に近い2や4の特徴として、器形が深く口辺が外反する内斜口縁の形状を有することや、口辺部が直立し窪み底となるなどである。これらを藤田氏の編年を参考とするならば（藤田1999）、5世紀の土器編年における第Ⅲ期段階として5世紀後半の第3四半世紀とすることができる（註1）。なお、本住居跡には3基のカマドが設けられるが、この時期にカマドが認められる住居跡は県内を見渡しても極端に少ない（註2）。

さて、坏形土器に限定して比較してみると、第26号住居跡出土土器に近い特徴を示すものに第66号住居跡がある。ここでも深みのある器体形状と外反する口辺部形状が存在すると同時に、口辺が内傾気味に直立するものや「く」字状に折れるものが含まれており、後者の特徴は時間的に遅れる様相を示していると言える。さらに第66号住居跡に後出するものとして、土器組成が明瞭でないものの第11号住居跡が提示できよう。第11号住居跡出土の1とした坏形土器は、遺存率が低く実測図に難点があるものの口径が大きく、また5の甌が比較的小型であることから本土器群を6世紀中葉と位置付け、これを遡る第66号住居跡の土器群を6世紀前葉と考えたい。

これまでに記載した第26号、第66号及び第11号住居跡については、その編年の位置付けが理解されたが、

これら以外の第18号、第19号、第47号及び第80号住居跡出土土器については、坏形土器の口径が16cm前後に集中し、口辺が丸底の体部より瘦をもって、大きく外反する形状を示す点で一致する。さらに、第47号及び第80号住居跡出土の高坏形土器においても細部にわたって近似しており、これらは6世紀後半に比定される特徴を保持するものである。また、点数的には少ないが、第87号方形周溝遺構出土の坏形土器も同類の範疇であり時間的に同一視できよう。

神田城南遺跡より発見された10軒の住居跡について、出土土器の特徴からおおよその年代を考えてみた。第26号住居跡は最も古い5世紀後半に、それ以降6世紀後半まで住居跡が営まれることが判明したが、このことは昭和42年の調査によって発見された住居跡とほぼ同じ時期でもある。双方の調査は部分的ではあるが、発見された遺構が時間的に一致しており、本遺跡における古墳時代にかかわる集落の出現と終焉が理解できたと思われる。

2. 奈良・平安時代

奈良・平安時代に関係する遺構は第5号・第6号溝跡、第32号・第67号掘立柱建物跡、櫓列跡、井戸跡がそれぞれ1基、そして12基を数える土坑である。特にここで問題としたい遺構は、現県道の両側より発見された第5号溝跡と第6号溝跡である。それぞれの溝跡については第三章にて記載したとおりであるが、その特徴をまとめてみると、

- ①双方の溝跡は直線的に掘り込まれる。これらは共に2回の掘り返しが行われており、都合3回にわたって溝の整備が行われたことになる。
- ②双方の溝跡は、I-B区とII-B区の一部において平行する箇所があり、その心々間の距離は6.5m前後である。
- ③I-B区内の第5号溝跡と切り合う遺構は皆無で、溝跡内覆土より出土した土器にはその特徴から9世紀代の時期が与えられる。
- ④第6号溝跡覆土内より出土した土器には、8世紀後半から終末の特徴がみられることから、これを側溝の構築年代の上限とすることができる。逆に、下限を示す遺物に小さなかわらけがあり、おおよそその時期は中世後半であると理解される。

このような特徴から道路状遺構と認定した場合、側溝間の硬化面については現県道直下に位置するため現時点では確認することはできないが、道路状遺構に伴う側溝とすることに問題はないと思われる。県内より発見された駅路及び道路跡については、中山・晋及び藤田直也によりまとめられた『日本古代道路事典』が詳しいので(中山・藤田2004)、これを参考に神田城南遺跡発見の道路状遺構と比較検討を試みたい。

先ず時期と道路幅の関係であるが、那須烏山市既久保遺跡にて明瞭な回答が提出されている。駅路の調査であった既久保遺跡では、道路の構築状態や修治の様相からI期8世紀前半、II期9世紀前半、III期9世紀後半そしてIV期10世紀以降中世以前の4時期に分けられ、道路の幅員はI期が12mでII期では6mに狭まることが確認されている。県内では道路状遺構と認定される遺跡が数多くあるが、ここでは神田城南遺跡と同様に側溝が存在し、時期や道路幅が類似する道路状遺構を抽出すると第19票のような結果が得られる。

神田城南遺跡と同様に側溝を備え、道路幅ないしは側溝間の距離が6m前後を測り、さらにその構築時期が古代となるものは9遺跡にて確認されている。それぞれの位置については、推定される駅路から大きく離れるものは皆無である。

神田城南遺跡が位置する那須郡における推定駅路については、直線的に並ぶ南原遺跡、既久保遺跡、新道平遺跡、三輪仲町遺跡が想定され、既久保遺跡と新道平遺跡間には官衙関連遺跡と考えられる長者ヶ平遺跡

第19表 栃木県内の道路状遺構（抜粋）

文献は『日本古代道路事典』に誌したため別表した

No.	遺跡名	位置	時期	道路の状況・側溝等の距離	周辺の状況
1	宮内北遺跡B地点	小山町大字外城	古代から中世	側溝等の距離は心々で9m 7m幅の硬化面あり	付近に延喜式内社の茨原神社あり
2	折木遺跡	石橋町大字石橋字折木 (現下野市)	9世紀代か	50mにわたって2本の側溝を検出 側溝間の距離は心々で6m	東谷・中島遺跡群と上神土・茂原 官御遺跡を結ぶ延長上にある
3	上神土・ 茂原官御遺跡	上三川町上神土 平野郡市茂原町	民間ワラワラ降伏以前	台地部に切り通しの道路遺構あり 道路幅は約6m	北3kmに東谷・中島遺跡群の道路 遺構あり
4	多功南原遺跡	上三川町大字多功	墾拓の時期は7世紀中葉 ～9世紀の第3回平賀 まで 道路遺構の時期は8世紀 代からか	側溝間の距離は心々で6m 道路面に段状凹凸面あり	北約2kmに内郡家に比定される 多功遺跡あり 南約2kmに下野薬師寺あり
5	釜根遺跡	河内町大字下岡本字釜根 (現宇都宮市)	明確な遺物無し	両側溝を備え、道路幅は約6m	飯久保遺跡との間に日枝神社南遺 跡と南原遺跡を置いて一直線状に 延び
6	南原遺跡	氏家町大字狭間田字南原 (現さくら市)	明確な遺物無し	両側溝を備え、道路幅は約6m	旧氏家町と直根沢町の町界 日枝神社南遺跡と見の野神社は約 9mで両側溝を備える
7	飯久保遺跡	南原須野大字湧野山字飯久保 (現那須烏山市)	I期8世紀前半、II期9 世紀前半、III期9世紀後半 、IV期10世紀代	道路幅はI期が12m、II期が6 mに変化	古くは「待軍道」 旧南原須野と旧氏家町の郡・町界
8	新道平遺跡	南原須野大字上川井字新道平 (現那須烏山市)	明確な遺物無し	硬化面をもつ道路遺構の幅は7m で側溝は不明 硬化面のない道路遺構の幅は7m で側溝あり	硬化面をもつ道路遺構が新しい要 素か
9	三輪神町遺跡 第5次調査	小川町大字三輪 (現那須川町)	堀穴住居跡との重複関係 から古代に比定	共に遺跡間5mの2時期分の溝跡 を確認	

が介在する。神田城南遺跡の道路状遺構は推定駅路から方向を違え、大きく離れるものであるが、木本雅康は既に本道路状遺構についてその存在を明示していた（木本2011）。詳細については著書に譲るが、綿密な踏査による状況把握を含め、古代における重要な産金地である馬頭町武部との関連や古代末期の築城である神田城の存在などを主要な要素と考えている。なお、神田城以北については不明としながら、那須郡家に比定される那須官衙跡の東方を通過すると推定している。

3. 中世

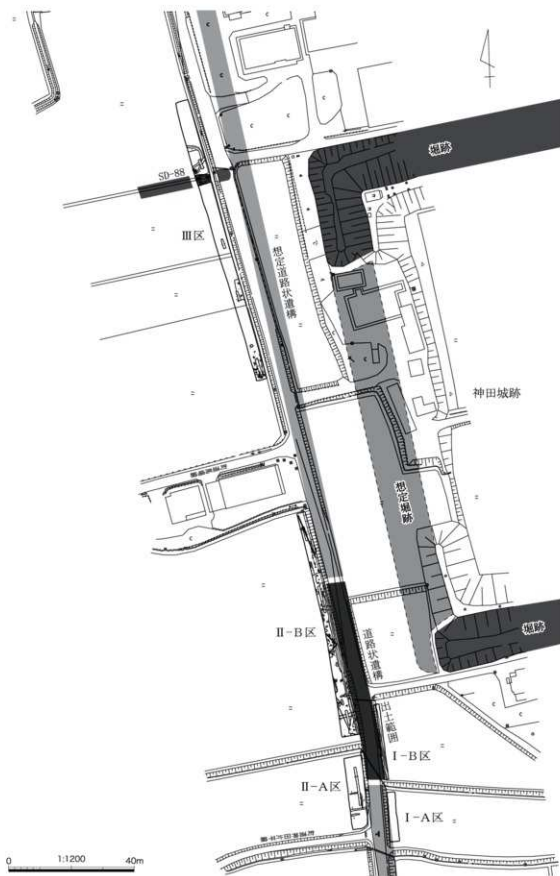
隣接する国指定史跡那須神田城跡に関連する遺構として中世に所属するものは、第88号溝跡が唯一であろう。第88号溝跡は規模的に小さくなるが、神田城跡にめぐる北側の堀との位置関係において、その延長上に位置している。第88号溝跡は泉道下を横切って、那須神田城跡付近まで掘り込まれることになるが、その間には道路状遺構が南から延びてくることは言うまでもない。第88号溝跡の機能や性格については、狭小な調査範囲から不明とせざるを得ないが、城館周辺を区画した溝跡と考えるべきであろうか。

那須神田城跡については、那須氏の祖、須藤権守貞信（資家）の築城と伝えられ、築城年代は天喜4年（1056年）、長治2年（1105年）、天治2年（1125年）の3説がある。また、源平合戦の鳥島島の戦いで扇的を射抜いたことで名高い那須母一は、那須資隆の11男としてこの神田城に生まれたと伝えられている。

館の大きさは、東西約132m、南北約162m、総面積は26,774㎡である。郭内は東西約66m、南北約117m、面積は7,725㎡あり、南北に長い単郭式長方形の居館跡である。土塁は幅幅約10m、上幅は約2m、高さは約5mある。北東隅を除き土塁の各隅部は若干高く堅固になっており、南側と東側の土塁中央が切れた場所には門があったと推定されている。土塁の北側と南側には幅10mの箱堀が明瞭に残っているが、東側と西側は埋め立てられ、現在は水田となっている。

このような郭内、土塁及び堀で構成される形態は、古代末から鎌倉初期の典型的な館跡の特徴として捉えることができ、国の史跡として昭和59年7月6日に指定されている（栃木県教委1982・2010）。

今後、那須神田城跡については数年をかけた整備計画が策定されており、周辺の調査も実施されるであろうが、是非その時は第88号溝跡と道路状遺構の関係を解明していただきたい。



第49図 那須神田城跡と道路状遺構及び第88号溝跡位置図

[註]

- 1 近年の5世紀にかかわる土器編年については、若干古く位置付ける傾向があり、第26号住居跡の土器を5世紀の中葉とする考えも散見される。
- 2 例えば第26号住居跡とはほぼ同時期の遺跡として真岡市（旧二宮町）曲田遺跡がある（藤田・仲山2009）。ここでは31軒の住居跡が発見されているが、カマドのあるものは皆無である。また、内山敏行によると、東谷・中島遺跡群においても数多くの同時期の住居跡が調査されているが、やはりカマドのあるものは皆無に等しいとのことである。
- 3 この「かわらけ」の時期については、埋蔵文化財センター田代 様より指導をいただいた。

[参考文献]

- 小川町誌編纂委員会 1970「第五編 文化」『小川町誌』小川町
- 木本雅康 2011「下野国那須郡を中心とする古代官道」『古代官道の歴史地理』同成社 古代史叢書9
- 眞保昌弘 1999「Ⅱ 遺跡の環境」『那須吉田新宿古墳群』小川町教育委員会
- 相馬一夫 1997「第4章 調査結果の整理と考察」『滝田本郷遺跡』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 栃木県教育委員会 1982「X 大田原市・黒磯市・那須郡概説」『栃木県の中世城館跡』栃木県教育委員会
- 栃木県教育委員会 2010「4. 那須神田城跡」『とちぎの国指定史跡』栃木県教育委員会
- 塚原孝一 1994「第四章 調査の成果」『三輪仲町遺跡（本文Ⅱ）』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 中山 晋・藤田直也 2004「下野国」『日本古代道路事典』古代交通研究会編 八木書店
- 藤田典夫 1999「栃木県における5世紀の土器編年」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会
- 藤田典夫・仲山英樹 2009『曲田遺跡・馬場先遺跡』栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団

附編 理化学分析

神田城南遺跡出土炭化材の年代と樹種

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、神田城南遺跡の住居跡や土坑から出土した炭化材を対象として、各遺構の年代確認のために放射性炭素年代測定を、木材利用状況を検討するために樹種同定をそれぞれ実施する。

1. 神田城南遺跡出土炭化材の放射性炭素年代 (AMS測定法)

(1) 試料

対象試料は、第18号住居跡 (SI-18) 出土炭化材3点 (No.1~3)、第46号住居跡 (SI-46) 出土炭化材3点 (No.1~3)、第66号住居跡 (SI-66) 出土炭化材2点 (No.1~2)、第36号土坑 (SK-36) 出土炭化材1点の合計9点である。そのうち、放射性炭素年代測定は、SI-18 No.2、SI-46 No.2、SI-66 No.1、SK-36の4点について実施する。試料とした炭化材は、いずれも樹皮が認められないため、年代測定試料は残存する最も外側の年輪を含む2~5年分を採取して測定試料とした。

(2) 分析方法

試料に土壌や根等の目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する (酸・アルカリ・酸処理)。試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅 (II) と銀箔 (硫化物を除去するため) を加えて、管内を真空にして封じり、500°C (30分) 850°C (2時間) で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO₂ を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO₂ と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650°C で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 95DH-2) を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシュウ酸 (HOX-II) とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定と同時に ¹³C/¹²C の測定も行いうため、この値を用いて δ¹³C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1,950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma:68%) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0 (Copyright 1986-2013 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

暦年較正とは、大気中の ¹⁴C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ¹⁴C 濃度の変動、及び半減期の違い (¹⁴C の半減期 5,730 ± 40 年) を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算や再検討に対応するため、1 年単位で表している。

暦年較正結果は、測定誤差 σ、2σ (σ は統計的に真の値が 68%、2σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲)

双方の値を示す。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

表1. 放射性炭素年代測定結果

遺構番号	種類	処理方法	測定年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) BP	暦年較正結果				Code No.
						誤差	cal BC/AD		cal BP	
SI-18 No.2	炭化材	AAA	1,560±20	-27.97 ± 0.44	1,520±20 (1,515±23)	σ	cal AD 539 - cal AD 590	cal BP 1,411 - 1,360	1.000	IAAA-130969
						2 σ	cal AD 432 - cal AD 489	cal BP 1,518 - 1,461	0.177	
							cal AD 532 - cal AD 606	cal BP 1,418 - 1,344	0.823	
SI-46 No.2	炭化材	AAA	1,220±20	-23.36 ± 0.59	1,240±20 (1,243±24)	σ	cal AD 689 - cal AD 750	cal BP 1,261 - 1,200	0.783	IAAA-130970
						2 σ	cal AD 760 - cal AD 776	cal BP 1,190 - 1,174	0.192	
							cal AD 794 - cal AD 798	cal BP 1,156 - 1,152	0.025	
SI-66 No.1	炭化材	AAA	1,620±20	-26.08 ± 0.41	1,600±20 (1,602±24)	σ	cal AD 411 - cal AD 433	cal BP 1,539 - 1,517	0.312	IAAA-130971
						2 σ	cal AD 459 - cal AD 466	cal BP 1,491 - 1,484	0.068	
							cal AD 489 - cal AD 532	cal BP 1,461 - 1,418	0.620	
SK-36 覆土	炭化材	AAA	1,340±20	-23.14 ± 0.56	1,370±20 (1,366±24)	σ	cal AD 649 - cal AD 666	cal BP 1,301 - 1,284	0.288	IAAA-130972
						2 σ	cal AD 634 - cal AD 685	cal BP 1,316 - 1,265	0.284	

- 1) 処理方法のAAAは、酸処理-アルカリ処理-酸処理を示す。
- 2) 年代値の算出には、Libbyの半減期568年を使用した。
- 3) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 4) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。
- 5) 暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV.7.0 (Copyright 1986-2013 M Stuiver and PJ Reimer) を使用した。
- 6) 暦年の計算には、補正年代に0で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。
- 7) 年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。
- 8) 統計的に真の値が入る確率は σ は68.3%、 2σ は95.4%である。
- 9) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

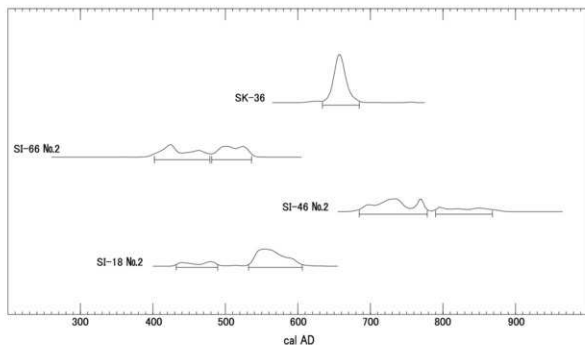


図1. 暦年較正曲線図

(3) 結果

炭化材の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）、および暦年較正結果を表1、図1に示す。補正年代は、SI-18 No.2が $1,520 \pm 20\text{BP}$ 、SI-46 No.2が $1,240 \pm 20\text{BP}$ 、SI-46 No.2が $1,600 \pm 20\text{BP}$ 、SK-36が $1,370 \pm 20\text{BP}$ である。また、補正年代に基づく暦年較正結果（ 2σ ）は、SI-18 No.2がcalAD 432-606、SI-46 No.2がcalAD685-868、SI-66 No.1がcalAD402-536、SK-36がcalAD634-685である。

(4) 考察

年代について

放射性炭素年代測定の結果、第18号住居跡は $1,520 \pm 20\text{BP}$ (calAD432-606)、第46号住居跡は $1,240 \pm 20\text{BP}$ (calAD685-868)、第66号住居跡は $1,600 \pm 20\text{BP}$ (calAD402-536)、第36号土坑は $1,370 \pm 20\text{BP}$ (calAD634-685)となり、少しずつ遺構の年代が異なる結果が得られた。年代測定結果に基づけば、第66号住居跡が最も古く、第18号住居跡、第46号住居跡と続くことになる。第36号土坑は、第18号住居跡と第46号住居跡の間に機能したことになる。

今回は、各試料とも残存する最も外側の年輪2-5年分を測定試料としているが、いずれの試料も樹皮は残存せず、第46号住居跡No.2や第66号住居跡No.1では、さらに外側に年輪が存在したことを示唆する痕跡が認められる。また第18号住居跡No.2と第36号土坑の炭化材は、破片である。そのため、測定値と実際の伐採年代とで若干の時期差が生じている可能性がある。

2. 神田城南遺跡出土炭化材の樹種同定

(1) 試料

対象試料は、第18号住居跡(SI-18)出土炭化材3点(No.1~3)、第46号住居跡(SI-46)出土炭化材3点(No.1~3)、第66号住居跡(SI-66)出土炭化材2点(No.1~2)、第36号土坑(SK-36)出土炭化材1点の合計9点である。そのうち、樹種同定は全点について実施した。

(2) 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の断面を製作し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

表2. 樹種同定結果

遺構	番号	位置	形状	種類
第18号住居跡 (SI-18)	No.1	南側床面	分割状	コナラ属コナラ亜属クスギ節
	No.2	北側床面	破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節
	No.3		破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節
第46号住居跡 (SI-46)	No.1		破片	クリ
	No.2		ミカン割状	クリ
	No.3		破片	クリ
第66号住居跡 (SI-66)	No.1	カマド前床面直上	芯持丸木(直径2.8cm)	タラノキ
	No.2		節部分	針葉樹
第36号土坑 (SK-36)		覆土	破片	カヤ

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

(3) 結果

樹種同定結果を、表 2 に示す。炭化材は、針葉樹 1 分類群(カヤ)、広葉樹 3 分類群(コナラ属コナラ亜属クスギ節・クリ・タラノキ)に同定された。なお、第 66 号住居跡№ 2 は、針葉樹の節部分で、組織の保存状態も悪く、種類は不明である。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、樹脂道および樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁には 2 本が対をなしたらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1 分野に 1-4 個。放射組織は単列、1-10 細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クスギ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は 1-2 列、孔圏外で急激に径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高のものと同複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は 3-4 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。

・タラノキ (*Aralia elata* (Miq.) Seemann) ウコギ科タラノキ属

環孔材で、孔圏部は 4-6 列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部の小道管は、2-3 列が接線状に紋様を描きながら長く連なる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-6 細胞幅、1-40 細胞高で精細胞が認められる。

(4) 考察

木材利用について

各遺構から出土した炭化材には、合計 4 種類が認められた。各種類の材質をみると、針葉樹のカヤは、沖積地に生育する常緑高木であり、木材は重硬・緻密で強度・耐水性が高い。クスギ節は、二次林や河畔林に生育する落葉高木で、木材は重硬で強度が高い。クリは二次林等に生育する落葉高木で、木材は重硬で強度・耐朽性が高い。タラノキは、低地の二次林に生育する落葉低木で、木材は軽軟で強度は低い。これより、本遺跡の堅穴住居跡出土炭化材では、基本的に強度の高い木材が多く、建築部材として強度を意識した木材を選択したことが示唆される。なお現在の植生を考慮すれば、これらの木材は本遺跡周辺で入手可能であったと考えられる。

また、堅穴住居跡の炭化材について住居別に種類構成をみると、第 18 号住居跡はクスギ節、第 46 号住居跡はクリであり、遺構によって種類構成が異なる。年代測定結果では、第 18 号住居跡が 5～7 世紀初頭、第 46 号住居跡が 7 世紀末～9 世紀に相当する値が得られていることから、時代・時期によって部材として利用される木材が異なっていた可能性もある。

ところで、北関東・甲信地域での建築部材については、古墳時代前期～後期にかけてはクスギ節やコナラ節

の利用が多く、古墳時代末期～平安時代初期にかけてはクリを中心に、クスギ節やコナラ節が混じる傾向が指摘されている（高橋，2012）。今回得られた同定結果は、この指摘とも調和するものといえる。

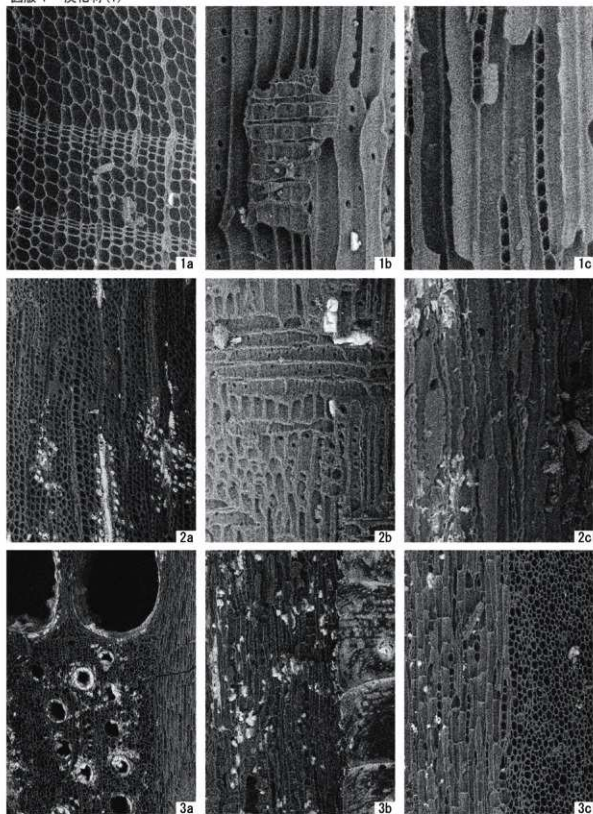
第66号住居跡の炭化材は、1点がカマド前の床面直上から出土している。直径2.8cmのタラノキの芯持丸木であり、木材の強度や大きさを考えると、構築部材ではないか、部材であったとしても主要なものではなかったことが示唆される。そのため、他の2軒の住居とは木材利用の比較は難しい。

第36号土坑の覆土から出土した炭化材は、針葉樹のカヤに同定された。破片で炭化していることから、どのような用途に用いられ、炭化するに至ったかの詳細は不明である。

引用文献

- 林 昭三，1991，日本産木材 顕微鏡写真集。京都大学木質科学研究所。
- 伊東 隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ。木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81-181。
- 伊東 隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ。木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所，66-176。
- 伊東 隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ。木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83-201。
- 伊東 隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ。木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30-166。
- 伊東 隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ。木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，47-216。
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編)，2006，針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト、伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘(日本語版監修)，海青社，70p。
[Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 島地 謙・伊東 隆夫，1982，図説木材組織。地球社，176p。
- 高橋 敦，2012，北関東・甲信 一茨城県・栃木県・群馬県・山梨県・長野県一。伊東 隆夫・山田 昌久(編)「木の考古学 出土木製品用材データベース」，海青社，157-178。
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編)，1998，広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト。伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修)，海青社，122p。[Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

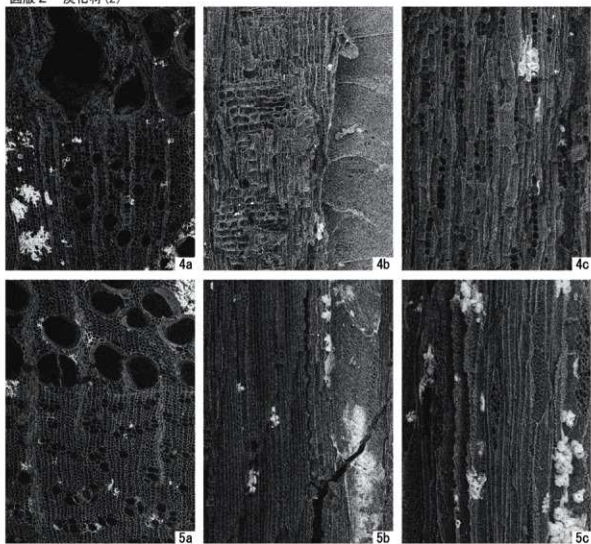
図版1 炭化材(1)



1. カヤ(第36号土坑)
 2. 針葉樹(第66号住居跡:No.2)
 3. コナラ属コナラ亜属クスギ節(第18号住居跡:No.3)
- a: 木口, b: 柱目, c: 板目

200 μ m: 3a
200 μ m: 1-2a, 3b, c
100 μ m: 1-2b, c

図版 2 炭化材(2)



4. クリ(第46号住居跡:No.1)
 5. タラノキ(第66号住居跡:No.1)
 a:木口, b:柀目, c:板目

200 μm: a
 200 μm: b, c

写 真 图 版



発掘調査区と史跡那須神田城跡（真上から）



発掘調査区と史跡那須神田城跡（南側上空から）



発掘調査区と史跡那須神田城跡（北側上空から）



I-A区 現況（北から）



I-A区 調査風景（北から）



I-A区 調査風景（南から）



I-A区 完掘（南東から）



I-B区 現況（北から）



I-B区 調査風景（北から）



I-B区 確認（北から）



I-B区 調査風景（南から）



Ⅱ-A区 現況(北から)



Ⅱ-A区 表土除去(南から)



Ⅱ-A区 調査風景(南から)



Ⅱ-A区 調査風景(南から)



Ⅱ-B区 現況(南から)



Ⅱ-B区 確認(南西から)



Ⅱ-B区 調査風景(北から)



Ⅱ-B区 調査風景(南東から)



Ⅲ区 現況 (南から)



Ⅲ区 調査風景 (南東から)



Ⅲ区 SZ-86・87 確認 (南西から)



Ⅲ区 SE-77 調査 (東から)



降雪日の調査



RCヘリによる空撮



史跡那須神田城跡土塁遠景 (北から)



史跡那須神田城跡土塁遠景 (北西から)



II-B区 SI-11 完掘（南西から）



II-B区 SI-11 完掘（南東から）



II-B区 SI-11 遺物出土（南から）



II-B区 SI-11 柱穴土層（東から）



II-B区 SI-11 貼床完掘（東から）



II-B区 SI-18土層（南から）



II-B区 SI-18完掘（北西から）



II-B区 SI-18,SD-06土層（南から）



II-B区 SI-18 P1完掘（南から）



II-B区 SI-18・19完掘（南から）

図版
八
遺構（竪穴住居跡）



II-B区 SI-19・18 完掘（南から）



II-B区 SI-19 土層（南から）



II-B区 SI-19 完掘（東から）



II-B区 SI-19 調査風景（南から）



II-B区 SI-19・18 調査風景（北から）



II-B区 SI-22 完掘・土層（南東から）



II-B区 SI-22 遺物出土（東から）



II-B区 SI-22 遺物出土（北から）



II-B区 SI-22 遺物出土（南から）



II-B区 SI-22,SK-15~17 完掘（南から）

図版
一〇 遺構（竪穴住居跡）



II-B区 SI-26 遺物出土（南から）



II-B区 SI-26.SD-06 確認（南西から）



II-B区 SI-26 調査風景（北から）



II-B区 SI-26 遺物出土（北東から）



II-B区 SI-26 遺物出土（東から）



II-B区 SI-26 カマド1・2 確認（南東から）



II-B区 SI-26 カマド1・2 半截（北西から）



II-B区 SI-26 カマド1・2 土層（南西から）



II-B区 SI-26 カマド1・2 完掘（東から）



II-B区 SI-26 カマド3 完掘（西から）



II-B区 SI-26 カマド3 確認（東から）



II-B区 SI-26 カマド3 土層（西から）



II-B区 SI-26 カマド3 土層（南から）

図版
一二
遺構（竪穴住居跡）



II-B区 SI-46 完掘（南東から）



II-B区 SI-46 確認（北から）



II-B区 SI-46 完掘・土層（西から）



II-B区 SI-46 遺物出土（南から）



II-B区 SI-46 焼土（西から）



II-B区 SI-47 完掘（東から）



II-B区 SI-47 確認（北東から）



II-B区 SI-47 完掘（南から）



II-B区 SI-47 遺物出土（南東から）



II-B区 SI-47,SK-60 土層（東から）

図版
一四
遺構（竪穴住居跡）



II-B区 SI-64 完掘（南から）



II-B区 SI-64 確認（南から）



II-B区 SI-64 土層（南西から）



II-B区 SI-64 完掘（北西から）



II-B区 SI-64 北部完掘（西から）



Ⅲ区 SI-66 遺物出土（西から）



Ⅲ区 SI-66 確認（西から）



Ⅲ区 SI-66 遺物出土（北東から）



Ⅲ区 SI-66 遺物出土（東から）



Ⅲ区 SI-66 完掘（南西から）



Ⅲ区 SI-66 カマド完掘（南東から）



Ⅲ区 SI-66 カマド確認（南から）



Ⅲ区 SI-66 カマド土層（南東から）



Ⅲ区 SI-66 カマド袖完掘（南西から）



Ⅲ区 SI-66 カマド土層（南から）



Ⅲ区 SI-80 完掘・土層（北西から）



Ⅲ区 SI-80 確認（南西から）



Ⅲ区 SI-80 完掘・土層（西から）



Ⅲ区 SI-80 掘方（南から）

図版 一八 遺構（方形周溝遺構）



Ⅲ区 SZ-86・87 完掘（北東から）



Ⅲ区 SZ-86・87 確認（北東から）



Ⅲ区 SZ-86・87 土層 E-E'（西から）



Ⅲ区 SZ-86 土層 B-B'（北から）



Ⅲ区 SZ-86・87 調査風景（南東から）



I-B区 SD-05 調査風景（南から）



I-B区 SD-05 完掘（北から）



I-B区 SD-05 確認（北から）



I-B区 SD-05 調査風景（南から）



I-B区 SD-05 土層 B-B'（南から）



I-B区 SD-05 土層 C-C'（南から）



I-B区 SD-05 完掘（南から）



I-B区 SD-05 底面（南から）



I-B区 SD-05 西壁土層・底面（北東から）



II-B区 SD-06 調査風景（南から）



II-B区 SD-06 調査風景（北から）



II-B区 SD-06・09,SK-08 周辺確認(南西から)



II-B区 SD-06,SI-26 周辺確認(南東から)



II-B区 SD-06,SK-20 土層 E-E' (南から)



II-B区 SD-06,SK-27 土層 G-G' (南から)



II-B区 SD-06,SK-54 土層 F-F' (南から)



II-B区 SD-06 調査風景(南から)



II-B区 SD-06,SI-18 土層(南から)



II-A区 確認（南から）



II-A区 SD-02・03 確認（南東から）



II-A区 SD-04 確認（南東から）



II-A区 調査風景（南から）



II-B区 SD-09・06 確認（南西から）



II-B区 SD-09.SK-08 完掘（東から）



II-B区 SD-49 完掘（北から）



II-B区 SD-49 完掘（西から）



Ⅲ区 SD-88,SZ-86・87 確認（南から）



Ⅲ区 SD-88 調査風景（東から）



Ⅲ区 SD-88,SK-89 完掘・土層（東から）



Ⅲ区 SD-88,SK-91 完掘・土層（西から）



Ⅱ-B区 SA-52 完掘（南から）



Ⅲ区 SB-67 完掘（南西から）



Ⅲ区 SB-67 確認（南西から）



Ⅲ区 SE-77 完掘 (南から)



Ⅲ区 SE-77 土層 (南から)



Ⅱ-A区 調査風景 (南から)



Ⅲ区 SE-77 出土礫 (南から)



Ⅲ区 SE-77 調査風景 (東から)



Ⅱ-A区 SK-01 完掘 (南東から)



Ⅱ-B区 SK-08 完掘 (南から)



Ⅱ-B区 SK-10 完掘 (南から)



Ⅱ-B区 SK-12・21 完掘 (南から)



Ⅱ-B区 SK-20 完掘 (西から)



Ⅱ-B区 SK-23 完掘 (東から)



Ⅱ-B区 SK-27 完掘 (南から)



Ⅱ-B区 SK-20,SD-06 土層 (南から)



Ⅱ-B区 SK-24・25 土層 (東から)



Ⅱ-B区 SK-27,SD-06 土層 (南東から)



II-B区 SK-33・34 土層 (南から)



II-B区 SK-35 土層 (南から)



II-B区 SK-36・37・56 完掘 (東から)



II-B区 SK-39 土層 (東から)



II-B区 SK-40 土層 (南から)



II-B区 SK-41 完掘 (南から)



II-B区 SK-42 土層 (南から)



II-B区 SK-44 完掘 (東から)



II-B区 SK-48・57 土層 (西から)



II-B区 SK-28-30・54 完掘 (西から)



II-B区 SK-29・30 完掘 (西から)



II-B区 SK-53 完掘 (西から)



II-B区 SK-28 完掘 (西から)



II-B区 SK-54,SD-06 土層 (南から)



II-B区 SK-53 土層 (南西から)



II-B区 SK-50・51 確認 (南東から)



II-B区 SK-51 土層 (南から)



II-B区 SK-54 土層 (南から)



II-B区 SK-50 完掘 (南から)



II-B区 SK-51 完掘 (南から)



II-B区 SK-55 完掘 (東から)



II-B区 SK-60 完掘 (東から)



II-B区 北側確認 (南西から)



II-B区 調査風景 (北から)



III区 SK-65 完掘 (南から)



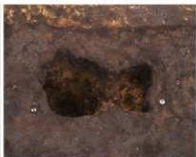
III区 SK-68-69-71-72 完掘 (西から)



III区 SK-68 土層 (南から)



III区 SK-69-71 土層 (南から)



III区 SK-73-74 完掘 (西から)



III区 SK-75 完掘 (西から)



Ⅲ区 SK-76 土層 (南から)



Ⅲ区 SK-78・79 完掘 (南西から)



Ⅲ区 SK-78 完掘 (南から)



Ⅲ区 SK-81 完掘 (南西から)



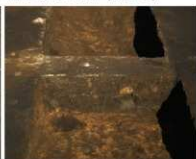
Ⅲ区 SK-84 完掘 (東から)



Ⅲ区 SK-85 完掘 (南東から)



Ⅲ区 SK-81 土層 (南から)



Ⅲ区 SK-84 土層 (南から)



Ⅲ区 SK-85 底面 (南東から)



Ⅲ区 SK-82・89 土層 (東から)



Ⅲ区 SK-83 完掘 (西から)



Ⅲ区 SK-90 土層 (東から)



Ⅲ区 SD-88 完掘 (東から)



Ⅲ区 SK-91 土層・底面 (西から)



Ⅲ区 遺構確認 (南から)









第26号住居跡



第66号住居跡

報告書抄録

ふりがな	かんだじょうみなみいせき
書名	神田城南道跡
副書名	安全な道づくり事業費(補助)一般県道小川大金停車場線北片平工区に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第366集
編著者名	芹澤清八
編集機関	公益財団法人とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒329-0418 栃木県下野市紫474番地 TEL 0285-44-8441
発行機関	栃木県教育委員会 公益財団法人とちぎ未来づくり財団
発行年月日	西暦2014年3月27日 (平成26年3月27日)

ふりがな 所収道跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	道跡番号					
神田城南道跡	那珂川町 三輪地内	09411	58	36° 75' 13"	140° 12' 63"	2012.12 ～ 2013. 2	1,100 ㎡	道路建設

所収道跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
神田城南道跡	集落	古墳時代	竪穴住居跡	10	土師器・砥石 土師器・須恵器・土錘	現県道を挟んだ両側の調査区より道路跡の側溝を発見。側溝間6.5m前後、最も古い出土遺物に8世紀末葉の土師器坏がある。これにより帰属時期については、奈良時代終末に遡る道路跡であると判断される。
			方形周溝遺構	2		
			土坑	2		
			溝跡	2		
			(道路状遺構側溝)			
		奈良・平安時代	掘立柱建物跡	2		
			柵列跡	1		
			井戸跡	1		
			土坑	12		
			溝跡	1		
中世 中世以降	溝跡	5				
	土坑	45				

要約	<p>神田城南道跡は那珂川右岸の台地上に位置し、国指定史跡那須神田城跡の南及び西側に広がる遺跡である。神田城跡は、古代末から鎌倉時代初期の典型的な館跡の特徴がよく残っており、その形状は東西132m、南北162mを測る県内屈指の規模の単郭式長方形である。神田城跡は那須与一誕生の地として、東国武士団那須氏の台頭を知る上で大変貴重な遺跡である。勿論、当地は古代以来の政治や交通の要衝の地であり、ここに神田城が築かれたことについても納得ができる。さらに、今回の調査によって古代に遡る官道が隣接して発見されたことは、極めて重要である。</p>
----	---

栃木県埋蔵文化財調査報告第366集

神田城南遺跡

—安全な道づくり事業費(補助)

—一般県道小田大金停車場線北片平工区に伴う埋蔵文化財発掘調査—

発行 **栃木県教育委員会**

宇都宮市埴田1-1-20

TEL 028(623)3425

公益財団法人とちぎ未来づくり財団

宇都宮市本町1-8

TEL 028(643)1011

平成26年3月27日発行

編集 **公益財団法人とちぎ未来づくり財団**
埋蔵文化財センター

下野市紫474番地

TEL 0285(44)8441

印刷 **株式会社 松井ビ・テ・オ印刷**
